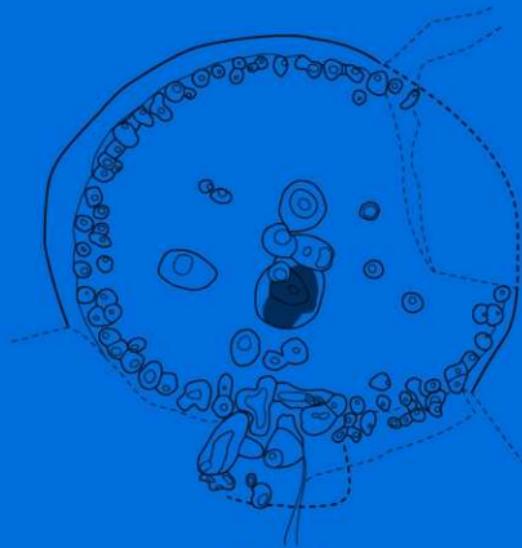


# 壺 遺 跡

(第18地点)

—コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2014

水戸市教育委員会  
株式会社 セブン-イレブン・ジャパン  
株式会社 地域文化財研究所

# 坏 遺 跡

(第18地点)

—コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014

水 戸 市 教 育 委 員 会  
株式会社 セブン-イレブン・ジャパン  
株式会社 地 域 文 化 財 研 究 所

## ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。そして、私たちの祖先もこの豊かな自然のもと生活を営んできました。

坪遺跡は、市街地の西寄りに位置する河和田の台地上に位置し、この一帯では桜川の恵みにより、高天原遺跡、高天原古墳群、若林遺跡、赤塚遺跡、赤塚古墳群など、先土器時代から奈良・平安時代に至るまでの多くの遺跡が分布しており、連綿とした人々の生活の営みを垣間見ることができます。また、桜川の対岸には、本市を代表する中世城館である河和田城跡が存在しています。

歴史的文化遺産である埋蔵文化財は、その性格上、一度壊されてしまうと二度と現状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世に伝えていかなければならぬ貴重な財産です。

高度経済成長期から、赤塚周辺での都市化も大きく進み、河和田周辺に位置する遺跡の様相も大きく変わり、都市化と文化財保護の両立が行政としても大きな課題として懸念されるところがありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき保護保存に努めているところです。

このたび計画された店舗の建築工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、十分な協議を重ねてまいりました。その結果、今回の計画によって、遺跡の一部について現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査では、縄文時代を中心とする遺構・遺物群が発見され、坪遺跡で初めてとなる縄文時代後期の集落跡を確認しました。

ここに刊行する本書を、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、調査実施に当たり御理解と御協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成26年3月

水戸市教育委員会

教育長 本 多 清 峰

## 例　　言

- 1 本書は、茨城県水戸市河和田地内におけるコンビニエンスストア建設工事に伴い実施した、坪遺跡第18地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社セブン－イレブン・ジャパンの委託を受けた株式会社地域文化財研究所が、水戸市教育委員会の調査指導のもとに行なった。
- 3 調査概要及び調査組織は以下のとおりである。

所 在 地 茨城県水戸市河和田3丁目2390-1外

調 査 面 積 1,860 m<sup>2</sup>

調 査 期 間 平成25年7月29日～平成25年9月13日

調査担当者 小川将之（株式会社地域文化財研究所）

調 査 員 高野浩之（株式会社地域文化財研究所）

調査参加者 有田洋子 石崎寿子 江橋和子 小山司農夫 河原井俊吉郎 黒須秀明

斎藤宏光 菅谷末吉 鈴木とし江 高田幸江 高安幸且 飛田とし子

福田雅美 村上拓海 渡辺恵子

整理参加者 大関美穂 川村理華 木村春代 田中成光 増田香理 藤井陽子

古里兼吉 横 勝男 深山恒男

- 4 本書の作成は、株式会社地域文化財研究所において、高野が担当した。執筆は米川暢敬（水戸市教育委員会）と高野が分担し、文責は各節の文末に記載した。

- 5 出土した遺物の内、縄文土器は斎藤弘道氏にご教示いただいた。

- 6 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、一括して水戸市大串貝塚ふれあい公園埋蔵文化財センターにて保管している。

- 7 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・ご協力を賜った。記して深く感謝を表したい（敬称略・順不同）。

香曾我部祥彰 斎藤栄治 清水勇 斎藤弘道 小川務 芦田和義

茨城県教育庁文化課 水戸市教育委員会 株式会社セブン－イレブン・ジャパン

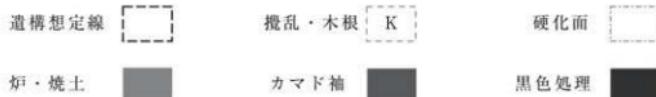
株式会社柴建築設計事務所 コスモ総合建設株式会社 有限会社小川重機

## 凡　例

- 1 測量は世界測地系座標を用い、挿図中の方位は真北を示す。
- 2 挿図中で使用した遺構の略号は以下のとおりである。

S I : 壊穴住居跡・建物跡	S K : 土坑	P i t : ピット
P : 壊穴住居跡・建物跡内柱穴又はピット	S D : 溝	S X : 風倒木痕
K : 扰乱・植栽痕		
- ※ 表中に示した略号は「表凡例」として各表に提示してある。
- 3 遺構実測図中の方位は座標北を示し、土層図及び断面図に記した数値は標高を示す。
- 4 遺構の形態・規模は基本的に現存している状態で判断した。計測は壁上端で行った。深さは検出面の最も高い位置から遺構内の最も低い位置まで測り、遺構内施設（柱穴等）の深さは床・底面の位置から計測している。
- 5 遺構平面図及び断面図の縮尺は、基本的に1/60とし、各図にスケールで示した。
- 6 遺構の土層及び遺物の色調表現は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）に準拠した。土層説明の中で、ブロックの大きさは、1～2mmを「小」、2～5mmを「中」、5～10mmを「大」、10mm以上を「極大」と表現し、極大以上のものについては（φ）で規模を明記した。粒・ブロック等の含有量は、1%以下を「極微量」、1～2%を「微量」、2～5%を「少量」、5～10%を「中量」、10%以上を「多量」とし、多量のものについては（）付で全体に含まれる割合を示した。いずれも同書の「粒状構造」、「面積割合」を参照している。
- 7 出土遺物の縮尺は、土器類が1/3、土製品が1/2、石器類が1/3を基本としているが、大型の土器・石器は1/4、小型の石器は2/3の縮尺を適宜用いた。
- 8 遺物観察表の標記は、（）内を復元値、〈〉内を遺存・現存値として表す。遺物の計測値は規模を「cm」、重量を「g」で表した。
- 9 出土遺物一覧表の中で、接合したものは全体で1点とし、逆に同一個体が明らかであっても接合しないものはそれぞれを1点とした。
- 10 出土遺物写真は、文様等の見易さを優先し、縮尺は図版と一致しない。
- 11 挿図中で使用したスクリーントーン及び線種類は以下凡例図のとおりである。
- 12 表紙に使用した図は、SI01 平面図（第9図）である。

## 凡　例　図



※ これ以外の表記は挿図中に記載した。

# 目 次

ごあいさつ

例言

凡例・凡例図

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査経過

　第1節 調査に至る経緯 ······ 1

　第2節 調査の方法と経過 ······ 1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

　第1節 地理的環境 ······ 3

　第2節 歴史的環境 ······ 3

　第3節 坪遺跡における既往の調査 ······ 8

第Ⅲ章 調査の成果

　第1節 遺跡の概要 ······ 11

　第2節 基本層序 ······ 13

　第3節 縄文時代の遺構と遺物 ······ 14

　(1) 売穴住居跡 ······ 14

　(2) 土坑 ······ 32

　(3) ピット ······ 39

　第4節 奈良・平安時代以降の遺構と遺物 ······ 40

　(1) 平安時代の賣穴建物跡 ······ 40

　(2) 中世の地下式坑 ······ 42

　(3) 奈良・平安時代以降の土坑 ······ 43

　(4) 中世以降のピット ······ 44

　第5節 埋没谷 ······ 44

　第6節 遺構外 ······ 53

第Ⅳ章 総括

　第1節 土地利用の変遷 ······ 54

　第2節 まとめ ······ 55

写真図版

報告書抄録

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表 ······ 7 第5表 土坑一覧表2 ······ 44

第2表 坪遺跡における既往の調査一覧表 ······ 8 第6表 出土遺物観察表 ······ 56

第3表 土坑一覧表1 ······ 33 第7表 出土遺物一覧表(石器類) ······ 68

第4表 ピット一覧表 ······ 39 第8表 出土遺物一覧表(土器類) ······ 69

## 挿図目次

第1図	水戸市域の地形図	3	第25図	SI06遺構実測図	30
第2図	坏遺跡位置図	4	第26図	SI06出土遺物	31
第3図	坏遺跡周辺の旧地形図	5	第27図	SK01-02-03-04-05-06遺構実測図	34
第4図	周辺の遺跡図	6	第28図	SK07-08-09-10-11-12遺構実測図	35
第5図	坏遺跡における既往の調査地点図	9	第29図	SK13-14-15-16-17-18遺構実測図	36
第6図	坏遺跡第18地点調査区域図	10	第30図	SK21-22-23-24-27-28	
第7図	坏遺跡第18地点全体図	12		29-31遺構実測図	37
第8図	基本堆積土層図	13	第31図	土坑出土遺物1	38
第9図	SI01遺構実測図1	14	第32図	土坑出土遺物2	39
第10図	SI01遺構実測図2	15	第33図	ピット遺構実測図1	39
第11図	SI01遺物分布図1(縄文後期後半)	16	第34図	ピット遺構実測図2	40
第12図	SI01遺物分布図2(縄文中期～後期前半、石器・蝶)	17	第35図	ピット出土遺物	40
			第36図	SI07-SK19遺構実測図	41
第13図	SI01出土遺物1	18	第37図	SI07出土遺物	41
第14図	SI01出土遺物2	19	第38図	地下式坑(SK20-30)遺構実測図	43
第15図	SI01出土遺物3	20	第39図	地下式坑(SK20-30)出土遺物	43
第16図	SI01出土遺物4	21	第40図	SK25-26遺構実測図	44
第17図	SI01出土遺物5	22	第41図	埋没谷実測図	45
第18図	SI01出土遺物6	23	第42図	埋没谷出土遺物1	46
第19図	SI01出土遺物7	24	第43図	埋没谷出土遺物2	48
第20図	SI02-03-04遺構実測図1	26	第44図	埋没谷出土遺物3	50
第21図	SI02-03-04遺構実測図2	27	第45図	埋没谷出土遺物4	51
第22図	SI02出土遺物	28	第46図	埋没谷出土遺物5	52
第23図	SI03出土遺物	29	第47図	遺構外出土遺物	53
第24図	SI04出土遺物	29			

## 写真図版目次

図版1	調査区全景 / 調査区北西側全景 / 調査区北東側全景 / 調査区南東側全景 / 調査区中央部全景	
図版2	SI01全景 / SI01 1層・遺物出土状況 / SI01 2層・遺物出土状況 / SI01 床直上遺物出土状況 / SI01 遺物出土近景	
図版3	SI02～04全景 / SI02全景 / SI02炉全景 / SI02炉土層断面 / SI03全景 / SI04全景 / SI06全景 / SI06炉遺物出土状況	
図版4	SI07全景 / SK02～09・11・12全景 / SK21遺物出土状況 / SK22全景 / SK23遺物出土状況・全景 / SK20全景 / SK30全景 / SK30遺物出土状況	
図版5～12	出土遺物(1)～(8)	

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成25年4月24日付けて、コンビニエンスストア建設工事に伴い、事業者から水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。

今般の事業計画地である水戸市河和田3丁目2390-1外は、周知の埋蔵文化財包蔵地「坪遺跡」の範囲内に該当しており、直近の地点において竪穴建物跡等の埋蔵文化財の分布が確認されていたことに加え、従前において、宅地造成工事が計画されたことに伴い試掘調査を実施していたこともある、当該地点において埋蔵文化財の分布は既に確認されていたところであった。

このような状況下において、今般事業者から提出のあった事業計画に基づき、平成25年5月17日に再度となる試掘・確認調査を実施したところ、事業地内において、濃密な埋蔵文化財の分布を再確認するに至った。

今般の事業計画と調査成果を重ね合わせたところ、主には敷地内の切土工事、店舗建築工事に際して、直下に存在する埋蔵文化財への影響が懸念されたことから、これらの埋蔵文化財に対し、市教委は、その保存のあり方について事業者との協議を重ねたが、工事による影響は不可避であるとの判断から、開発対象地内の大部分において、遺構の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。このため市教委は、事業者から提出のあった文化財保護法第93条第1項に基づく届出について、敷地内において土木工事が埋蔵文化財に影響を与えると考えられる切土工事実施範囲及び店舗建築範囲に対し、次善の策として記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて進達した。

その後、平成25年6月3日付けて県教委教育長から事業者に対し、上記部分において工事着手前に発掘調査の実施を要すること、調査の結果重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議をする等の旨、指示・勧告があった。

これを受けて事業者は、市教委、株式会社地域文化財研究所と発掘調査実施に係る協定書を締結したうえで、株式会社地域文化財研究所と発掘調査業務委託契約を締結し、当該調査を坪遺跡第18地点発掘調査として、平成25年7月29日から発掘調査を実施することとなった。

（米川）

## 第2節 調査の方法と経過

発掘調査は、試掘調査の結果をもとに1,860m<sup>2</sup>の本調査区を設定して実施した。表土除去及び攪乱除去はバックフォーを用いて遺構検出面まで慎重に掘り下げ、この重機作業により発生した残土は場外へ搬出する措置をとった。表土除去後の作業は人力によって各遺構を掘り下げた。調査区には全体を包括した世界測地系IX系に基づく基準点測量を行い、10m×10mの方眼グリッドを設定した。グリッド名は北西隅を基点とし、東西方向をA～F、南北方向を1～6として、これらの記号を合わせたA1～F6までの名称を付した。

埋没谷の遺物取上げに際しては、グリッドをさらに4分割し、グリッド名以下に・1（北西側）、・2（北東側）、・3（南西側）、・4（南東側）の名称を加えた。遺構図面は1/20縮尺を基本とし、平面図は平板測量及び簡易造り方測量を併用して作成した。炉や遺物出土状況の微細図では適宜に応じた縮尺を用いている。写真撮影は、35mm判白黒フィルム・カラーリバーサルフィルム、プロニー判カラーリバーサルフィルムを使用し、1000万画素のデジタルカメラで撮影を補助した。

表土除去は7月29日から開始し、8月6日で終了した。

8月5日の表土除去最中から作業員を投入し、確認作業後、遺構の掘り下げをSK01～10の半蔵作業から着手した。6日、SI01の形状を確認し、掘り下げを開始した。7日は調査区東側を再精査した。遺構が検出されなかった部分の記録を終え、遺構掘削により発生する残土の置き場を確保した。8日は測量に入り、調査区内に基準点及び水準点を設置した。9日から埋没谷の掘り下げを開始し、23日には終了している。その間、埋没谷上で検出された遺構SI07を調査し、併せてSI01出土の遺物取り上げとSK01～17までを完掘した。24日以降はSI01とSI01に隣接したSI06の掘り下げを継続し、29日にはSI02～05の掘り下げにも着手した。30日はSI01の床面を精査し、柱穴の掘り下げを行った。

9月に入って、2日はSI01～03の掘り下げを継続するとともに、SK20としていたものが地下式坑の堅坑とわかり、主室部分の覆土除去を開始した。3日、SI01の柱穴掘り下げが完了し、同遺構の写真を撮影した。併せてSK21～23を完掘した。6日は調査区北西側の遺構確認を実施し、土坑・ピットの掘り下げを開始した。9日にはSI02～04を精査し、個々の写真を撮影した。10日は調査区北西側部分の掘り下げを終了し、埋没谷を中心に全体の清掃へ移った。清掃は11日まで継続し、調査区全体の写真撮影を行っている。12日はSI01・02・06の炉を調査し、新たに検出された地下式坑SK30を掘り下げた。13日、全遺構の掘り下げと記録を完了し、発掘調査を終了した。

整理調査は、遺構関連と遺物関連の作業に分けて実施した。

遺構図面の整理は、第二原図を作成した上で図面を修正し、報告書掲載用の遺構図はデジタルトレースによって作成した。掲載用の縮尺は1/60を基本としている。

遺物の整理は、出土した全てを水洗いした後、注記用の機械を用いて可能な限り注記した。注記は「201-015（遺跡記号-018（調査地点）」に出土地点を加え記入した。注記できない微小な遺物は収納袋に必要事項を記載して納めた。調査区より出土した遺物は、接合後に全て分類し、種別や個体・破片ごとの点数を出土遺物一覧表に掲載してある。遺物の実測は全て原寸で行い、トレースはロットリングを用いた手書きとした。トレースに際しては、原図から2/3縮尺したものを、報告書には1/3・1/4縮尺で掲載した。石器など微小な遺物は2/3縮尺とするなど、適した縮尺を用いている。

整理作業は、遺物の水洗いから作業を開始し、乾燥後速やかに注記作業へ移った。終了後、遺構図作成の作業に取りかかり、併行して原稿を執筆した。遺構関連の作業が全て終了した段階で、遺物の実測に入った。途中からトレース作業と拓図作成を併せて行った。編集作業はDTPソフトウェアを用いて版組みの作業を行った。編集終了後は、校正及び水戸市教育委員会の査読を経て、報告書の刊行に至った。

（高野）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

水戸市は茨城県のほぼ中央にあって、市域の北側では主要河川となる那珂川が蛇行しながら西から東へ流れ、その右岸台地上に市街地が広がる。

水戸市域の地形を概観すると、主要河川により構成される沖積低地、東茨城台地の北東部にあたる水戸台地、八溝山地に属する鶴足山塊の東南域に連なる低丘陵地の三地形に大きく分けることができる。特に遺跡の集中する水戸台地に注目すると、市域の北側を西から東へ流れる那珂川と、その支流にあたる桜川、涸沼川等によって形成された沖積地周辺は、更新世後期の海の浸食による海成面からなり、その複雑に入り組んだ様相から海退後に河岸段丘が発達したことが容易にうかがわれる。これらはさらに、沢渡川、逆川等を含めた河川によって開析され、通称上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地等の洪積地に区分することができる。台地の地質は、水戸層と呼ばれる第三紀層（凝灰質泥岩層）を基盤とし、その上部には砂、礫、シルトで構成された見和層と上市礫層が堆積し、さらに関東ローム層によって覆われていることが理解されている。

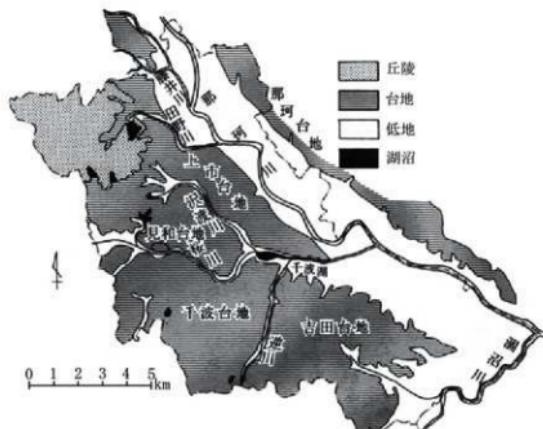
坏遺跡は、見和台地南端の桜川を挟み、対岸の千波台地を望む場所に立地する。（米川）

### 第2節 歴史的環境

#### 先土器時代～縄文時代草創期

当該期の遺跡には、今回の調査地となった坏遺跡の西側に隣接する赤塚遺跡があげられ、複数年度にわたり調査が行われている。赤塚団地建設に伴う第1次調査では正式報告書は未刊ながら、ソフトローム～ハードローム層にかけて1基の石器集中地点が検出さ

れた。出土した石器には、硬質頁岩・砂岩・頁岩製の尖頭器、黒曜石製の搔器、メノウ製や黒曜石製のナイフ形石器、台形様石器等が認められ、複数時期にまたがる可能性が指摘されている。国道50号バイパス建設に伴う第2次調査では、第二黒色帶上部付近から炭化物集中地点とともに石器集中地点が検出され、ホルンフェルス製ナイフ形石器・搔器、ガラス質黒色安山岩製台形様石器、砂岩製



第1図 水戸市域の地形図

敲き石、チャート製台石などが出土した。常磐自動車道建設に伴う松原遺跡の発掘調査では、遺構外の出土遺物に縄文時代草創期の長者久保・神子柴石器群に帰属すると考えられる安山岩製の石斧と剥片、頁岩製の石錐が出土している。

一方、発掘調査は行われていないが、清水遺跡で硬質頁岩製の削器と石刀、一本松遺跡で槍先形尖頭器が採集され、やはり長者久保・神子柴石器群に帰属すると考えられる。

#### 縄文時代

当該時期の遺跡は、西から赤塚遺跡・坪遺跡・高天原遺跡・若林遺跡が桜川左岸の縁辺に連なっている。時期は、縄文時代前期から後・晩期にかけて生活の痕跡をうかがうことができるが、主体となるのは中期である。

坪遺跡の西側に隣接する赤塚遺跡では、遺構は検出されていないものの前期の浮島・興津式土器、晩期の土器が出土している。坪遺跡の東側に隣接する高天原遺跡は、住宅団地造成に伴う調査で、阿玉台Ⅲ～加曾利EⅡ式の土器が認められる竪穴住居跡1軒と、大木8b式の土器を伴う袋状土坑4基が検出された。そのほかに早・前期や後・晩期の遺物も採集されているが、遺構は検出されていない。さらに高天原遺跡の東方に所在する若林遺跡では、古くから中期前葉から後葉にわたる土器が多量に採集されることで知られていたが、宅地造成に伴って行われた第1地点の調査では、竪穴住居跡1軒、土坑58基、野外炉2基、ピット1基が検出され、遺構密集度の高さとともに多量の遺物が出土している。遺物の時期は、阿玉台Ⅱ～Ⅳ式、加曾利EⅠ～Ⅲ式を主体とし、坪遺跡と類似した様相



第2図 坪遺跡位置図

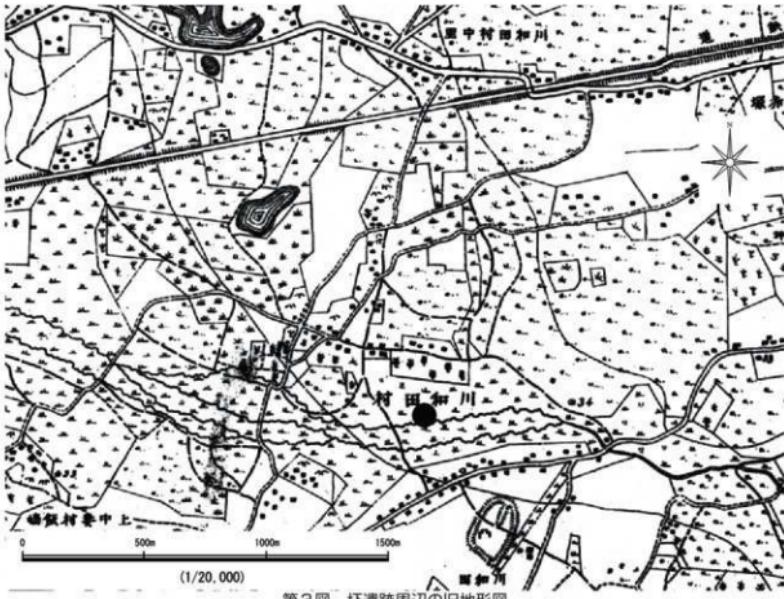
がうかがえる。また、在地的な様相を持つ諂訪タイプの土器に加え、東北系の大木7b～8a式土器、南関東系の中峠式、勝坂式、曾利式など多様な型式が認められる。

以上のことから、坪遺跡・高天原遺跡・若林遺跡の地点を中心として、桜川縁辺部に縄文時代、特に中期中葉から後葉にかけての阿玉台II～IV式期、加曾利E式期において大規模な集落が展開していたことが理解される。

#### 弥生時代～奈良・平安時代

弥生時代の遺跡としては、高天原遺跡、仙光内遺跡、飯島町遺跡、清水遺跡、大塚新地遺跡、向原遺跡等が周知されている。その内、代表的なものとして大塚新地遺跡があげられる。弥生時代後期の堅穴住居跡10軒を中心に、土坑50基が集中して検出され、当該時期の拠点的集落に位置づけられる。中でも中期の壺棺墓1基が確認されたことは注目される。向原遺跡でも中期堅穴住居跡3軒、後期堅穴住居跡8軒が調査されている。

古墳時代の遺跡には、墓域としては赤塚古墳群、飯島町古墳群が展開し、包蔵地としては赤塚遺跡、坪遺跡、高天原遺跡、大塚新地遺跡、向原遺跡、仙光内遺跡等が周知されている。赤塚古墳群は赤塚西団地建設に伴う発掘調査が行われ、谷津を隔てた東西に群が構成され、前方後円墳3基、円墳12基、方墳1基のほか、方形周溝墓18基が確認されている。現存する前方後円墳は2基で、ともに30mを超える埴輪を伴っている。一方、方形周溝墓は西側の支群に偏在する傾向にあり、赤塚遺跡において前期～中期にかけての集落跡が確認されていることとの関連が指摘されている。大塚新地遺跡でも古墳時代前期～後期にかけ



第3図 坪遺跡周辺の旧地形図



第4図 周辺の遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	遺物	備考
014	高天原遺跡	集落跡	縄文土器（早・中・晚）, 弥生土器（後）, 土師器（古）	S59～60年度発掘調査
015	蛭遺跡	集落跡	縄文土器（中・後）, 土製円錐・石錐・磨石・鐵石・圓石・石皿・砥石・剝片（縄文）, 弥生（後）, 土師器（古）, 青白磁・陶器・カワラケ・内耳土器（中世）, 砥石・硯（近世）	H8・H17～22年度発掘調査
016	若林遺跡	集落跡	縄文土器（中）・石器・打製石斧・磨製石斧・磨石・鐵石・圓石・石皿・台石・剝片（縄文）, 須恵器（奈・平）	H19～21年度発掘調査
017	一本松遺跡	集落跡	尖頭器（縄文草創）縄文土器（早・中）, 土師器・須恵器（古）	
042	赤塚遺跡	集落跡	削器・台形鋸石器・ナイフ形石器・尖頭器・搔器・剝片（先）縄文土器（前～晩）石器（縄文）, 弥生土器（中・後）, 土師器（古・奈・平）, 鐵器（平）, 磁器（近世）	S57・H18・19・21・22年度発掘調査
064	堀遺跡	集落跡	弥生土器（後）, 土師器・須恵器（古・奈・平）	円1
081	坂町西古墳	古墳	縄文土器（中）・敲石・磨製石斧・石錐・土製円錐・土器片錐（縄文）, 土師器・刀子・铁斧（古）, 須恵器・土玉・刀子（奈・平）・錢貨（近世）	H20～21年度発掘調査 円2・方1
082	下荒句古墳群	古墳群		円2(20?)
083	街道端古墳群	古墳群		円0(3) 消滅
084	高天原古墳群	古墳群		方0(2), 円0(7) 消滅
085	赤塚古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・形象埴輪・直刀・長茎鐵	S46年度発掘調査。前方後円3, 円12・方19(そのうち方形埴輪18)
102	河和田城跡	城跡		H17・17～21年度発掘調査
119	飯島町遺跡	集落跡	弥生土器（後）, 土師器（古）	
120	仙光内遺跡	集落跡	弥生土器（後）, 土師器（古前～後・奈・平）	H17・18・20年度発掘調査
121	池上遺跡	集落跡	土師器・須恵器（奈・平）	H19・20年度発掘調査
123	清水遺跡	集落跡	石刃（縄文草創）, 縄文土器（前）, 弥生土器（後）, 土師	H21年度発掘調査
124	久保遺跡	集落跡	弥生土器（後）, 土師器（古前・奈・平）	H17・18・20・21年度発掘調査
132	山田遺跡	集落跡	縄文土器（中）, 弥生土器（後）, 須恵器	
134	金剛寺遺跡	集落跡	縄文土器（中）, 土師器・須恵器（奈・平）, 内耳土器（中	H16・17・18・22年度発掘調査
135	寺山遺跡	集落跡	縄文土器（中）, 土師器・須恵器（古）	
136	峯山古墳	古墳	土師器（古）	消滅
137	向原遺跡	集落跡	尖頭器（先）, 縄文土器（前）, 弥生土器（中・後）, 土師器（古）	S48年度発掘調査
138	北原古墳群	古墳群		円1(2)
139	北原遺跡	集落跡	縄文土器, 土師器（古）, 須恵器	H21年度発掘調査
145	遠見遺跡	集落跡	縄文土器（前・中）, 土師器（古）	消滅
148	山田A古墳群	古墳群		円2(4)
149	全勝権現台遺跡	集落跡	縄文土器（前・中）	消滅
150	大久保遺跡	集落跡	土師器（古）	
153	開江原遺跡	集落跡	土師器・須恵器（奈・平）	
155	小鍋遺跡	集落跡	縄文土器（中・後）, 土師器（古）	
163	大久保古墳群	古墳群		円0(3)
164	毛勝谷原遺跡	集落跡	弥生土器（古）, 土師器（古前）	
166	毛勝谷原古墳群	古墳群		円1(3)
220	松原遺跡	集落跡	打製石斧・石刃・石錐（縄文草創）, 縄文土器（早）, 弥生土器（後）, 土師器（古前・後・奈・平）・石製品・土製品・石製切子玉（古）	S54年度発掘調査
221	稲荷塚古墳群	古墳群	円筒埴輪・勾玉	円3, H20～22年度発掘調査
222	大塚新地遺跡	集落跡	弥生土器（後）, 土師器（古前・奈・平）, 勾玉・石製品・土製品・鉄製品・木製品	S54～55・H17・19～21年度発掘調査
223	飯島町古墳群	古墳群		円3
273	淡島神社経塚	塚	内耳土器・陶磁器・磁器・錢貨（近世）	
274	経塚遺跡	包藏地	カワラケ・陶器・内耳土器（中世）	H17年度発掘調査
280	街道端愛宕神社塚	塚	土師器	

けての堅穴建物跡が多数検出されており、周辺での活発な営みが読み取れる。

奈良・平安時代の遺跡は、大塚池周辺を中心に点在するようである。桜川緑辺においては坪遺跡第1地点で7世紀末～8世紀前半の堅穴建物跡が検出され、赤塚遺跡では当該時期の所産と考えられる火葬墓が調査されている。検出例はあまり多くはないものの、生活の痕跡を捉えることができる。

### 中・近世

中世の遺跡としてまず始めにあげられるのは、桜川を挟んで立地する河和田城跡であろう。その遺存する範囲は広大で、東西約510m、南北約600mに及ぶ。さらに南側に隣接する経塚遺跡では、16世紀代と考えられる堀跡や地下式坑が集中して確認され、対岸の坪遺跡第3地点や若林遺跡第1地点においても中世遺構が検出されるなど、河和田城跡に関連する遺構の範囲はさらに広がっていることが理解された。

近世の遺構には、高天原遺跡で当初2基の古墳として認識されていた高まりが、中世～近世の塚であることが発掘調査によって判明し、当該時期の所産と考えられるかわらけを中心とした土器が出土している。かつては同様の塚状遺構が9基存在したとされており、さらに桜川左岸の台地上にも淡島神社経塚、街道端愛宕神社塚が現存していることから、中世から近世へと継続する民間信仰の場としても利用されていたと考えられる。（米川）

### 第3節 坪遺跡における既往の調査

坪遺跡における調査は、これまでに17地点において行われている（第5図、第2表）。ここでは、本発掘調査に至った第1地点、第3地点、第4地点、第14地点、第16地点を中心に概観したい。

まず、調査の先鞭をきいたのは、平成8年に共同住宅建築に伴い実施された第1地点の発掘調査である。この調査では、面積270m<sup>2</sup>程度の調査区の中において、縄文時代中期の

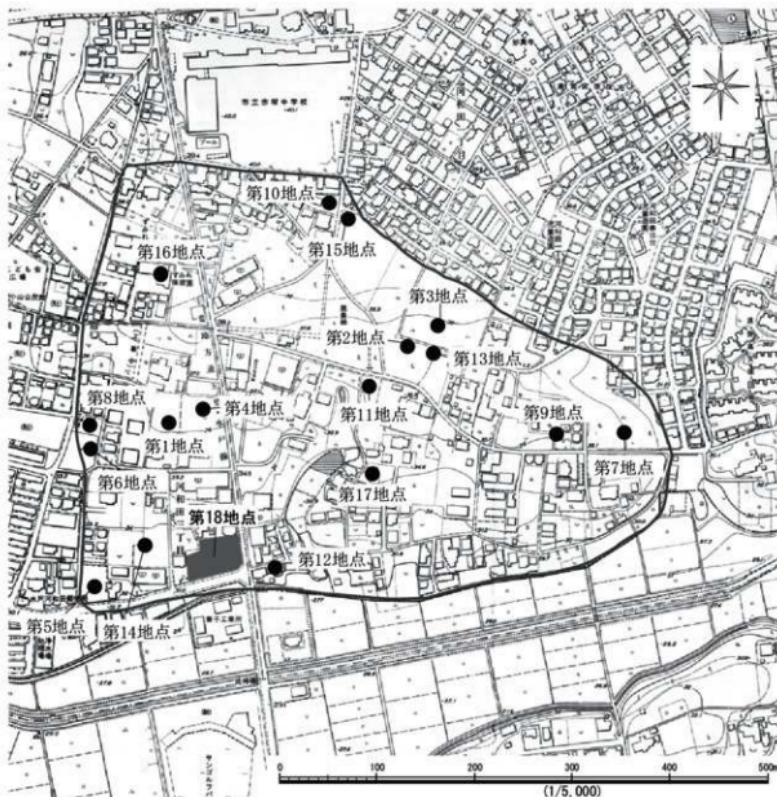
第2表 坪遺跡における既往の調査一覧表

H：平成 本：本調査 試：試掘調査

地点名	調査箇所	調査年度	種別	調査原因	遺構	遺物
第1地点	河和田3丁目2368-7	H7	本	共同住宅建築に伴う	○	○
第2地点	河和田1丁目1639-1	H17	試	共同住宅建築に伴う	—	○
第3地点	河和田町1645-13	H17	本	共同住宅建築に伴う	○	○
第4地点	河和田3丁目2412-5外	H17, 18	試/本	共同住宅建築に伴う	○	○
第5地点	河和田3丁目2381-1外	H18	試	宅地造成に伴う	—	—
第6地点	河和田3丁目2370-1	H18	試	共同住宅建築に伴う	—	○
第7地点	河和田1丁目1610-2	H19	試	個人住宅建築に伴う	—	—
第8地点	河和田3丁目2370-1	H20	試	共同住宅建築に伴う	○	○
第9地点	河和田1丁目1615-1	H20	試	個人住宅建築に伴う	—	○
第10地点	河和田1丁目1707-16	H20	試	個人住宅建築に伴う	—	—
第11地点	河和田1丁目2430-1外	H21	試	賃貸住宅建築に伴う	○	○
第12地点	河和田町2507外	H21	試	共同住宅建築に伴う	—	—
第13地点	河和田1丁目1637-1	H21, 22	試	共同住宅建築に伴う	○	○
第14地点	河和田3丁目2376-1外	H21～23	試/本	宅地造成に伴う 個人住宅建築に伴う	○	○
第15地点	河和田1丁目1645-85外	H22	試	個人住宅建築に伴う	—	—
第16地点	河和田2丁目1713-10外	H23, 24	試/本	宅地造成に伴う	○	○
第17地点	河和田1丁目2449外	H23	試	個人住宅建築に伴う	—	—

堅穴住居跡4軒、土坑11基が検出され、遺構の密集度の高さをうかがわせる。出土した土器は阿玉台Ⅲ～Ⅳ式、加曾利E式を主体として、大木式、綱取式などが認められる。これらと重複して古墳時代後期の堅穴建物跡1棟も確認されている。

第3地点の調査は、平成18年に共同建物建築に伴い実施された。縄文時代の土坑13基が検出され、そのうち8基が袋状の土坑、5基が陥し穴状土坑であった。袋状の土坑は第1地点に比べて密集度が希薄であり、出土した土器の時期も阿玉台I b～II式期が主体であることや、陥し穴状土坑が検出されていることなどから、第1地点とは異なった土地利用の様相がうかがわれる。また、中世の掘立柱建物跡2棟、溝跡3条、土坑20基、地下式坑4基、井戸跡3基などの検出とともに、内耳土鍋を中心とした中世の遺物がまとめて出土している。遺物の時期から15～16世紀にかけて営まれた村落の変遷を推測することができ、桜川対岸に所在する河和田城跡との関連が注目される。



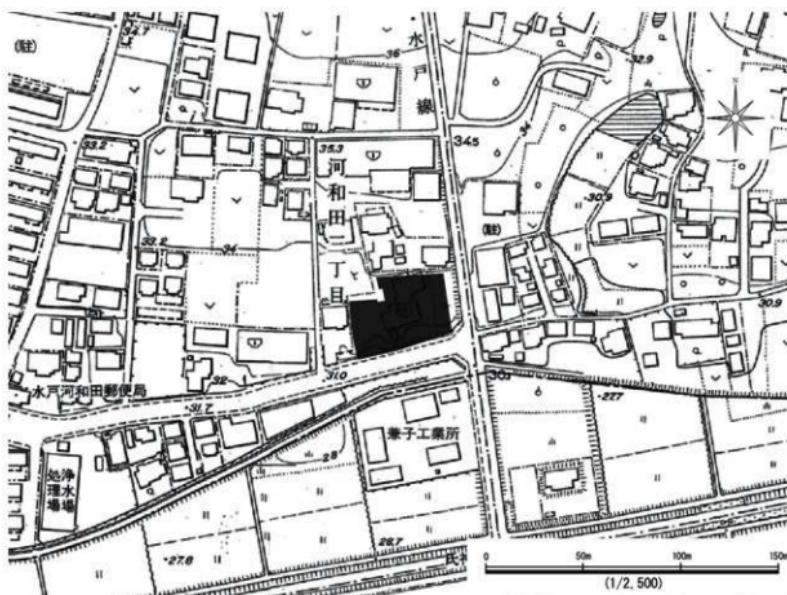
第5図 坑遺跡における既往の調査地点図

第4地点は、第3地点と同年に共同住宅建築に伴って調査が行われ、縄文時代と奈良・平安時代の土坑やピットが検出されている。縄文時代の遺構・遺物の時期は、中期中葉から後葉にかけての阿玉台Ⅲ・Ⅳ式、加曾利E式が中心で、後期前葉の称名寺式、堀之内式のはか網取式も認められ、第1地点同様遺構が密集する可能性がある。

第14地点では、平成23年に、近接する4区画において、個人住宅建築に伴い実施された。区画No.1では、古墳時代の溝跡1条、竪穴建物跡1棟、奈良・平安時代の竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、中世の井戸跡1基など、区画No.2では、古墳時代の竪穴建物跡1棟、中世の土坑8基など、区画No.3では、中世の溝跡1条、掘立柱建物跡2棟、土坑2基、地下式坑1基などが、区画No.4では、中世の掘立柱建物跡1棟、土坑4基などが、それぞれ検出されている。当該地点においては、縄文時代に帰属する遺構は検出されておらず、各区画において縄文土器が出土した程度に留まっている。

第16地点の調査は、平成24年に宅地造成工事に伴い実施され、中世の溝跡1条、ピット2基が検出された。

坪遺跡における主要な発掘調査成果は以上のとおりであり、縄文時代から中世に至るまでの活発な土地利用がみられ、人々の連絡とした活動をうかがうことができる。（米川）



第6図 坪遺跡第18地点調査区域図

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

本地点は、坪遺跡として周知された範囲の南西部に位置し、桜川が一望できる場所にある。調査前の現況は更地で全体には平坦な土地になっていたが、周辺の地形からみると不自然な形状で、盛土されていることは明らかであった。また、北東側の一部は段状に切り込まれ、ローム土が露呈していた。昭和年間の地図で確認したところ、病院が建設されていたことがわかるが、その後は畠地での利用やアパートの建設、分譲宅地としても造成されていたようである。

表土除去を行った後の状況では、南に面した平坦地は全て盛土されたもので、最も高い所では2m以上の盛土が成されていた。それ以外は全体に削平を受け、調査区の中でも最も高い地点にあたる北側は表土直下がハードローム面に達していた。西側は集合住宅が建設されていた部分で、基礎部分がローム土を深く掘り込んでいた。東側は現況からの予想通り、切り土によって平坦に造成されていた。北側の標高は33m、南側の標高が30.5m前後で、元來の地形はかなりの比高差をもつた傾斜地であったと推測される。

調査の結果、検出された遺構は縄文時代後期に帰属する竪穴住居跡5軒、土坑26基、ピット9基、奈良・平安時代の竪穴建物跡1棟、土坑1基、中世の地下式坑2基、中・近世以降の所産と思われる土坑3基、ピット3基であった。その他、風倒木痕と考えられる落ち込みも1ヶ所(SX01)と溝(SD01)を確認するが、溝は埋設管敷設の跡とわかり、風倒木痕とともに遺構外とした。また、調査区を分断して埋没谷が確認され、上層から中層にかけて縄文時代早期から後期までの土器が含まれていた。

遺構を概観すると、縄文時代の竪穴住居跡は、5軒の内2軒(SI01・06)が調査区北側の標高32~33mの傾斜地に重複し、他の3軒(SI02~04)は調査区南側の標高31m前後の地点に密集して検出された。それぞれの集團は埋没谷を挟み、対峙した形で検出されている。SI01は掘り込みも深く、比較的良く残っていたが、他の4軒は削平の影響で半分以下の残存であった。縄文時代の土坑・ピットは、住居跡の周間に展開しているものが多い。奈良・平安時代の竪穴建物跡(SI07)は埋没谷上で検出されており、当該時期には既に谷が埋没していたことが明らかになった。なお、遺構確認当初にSI05とした遺構は、焼土を含む土坑(SK31)を炉と考え、周囲の遺物出土状況から住居跡の痕跡と判断したが、その後の調査で住居跡ではないことが判明したため欠番とした。中世の地下式坑の内、SK20とした地下式坑は天井部が残存しているものの、全体に崩落しているとみられる。SK30とした地下式坑は谷頭付近の非常に軟弱な地盤の上に構築され、天井部が確認されなかったことから中世に用いられた井戸の可能性も考えられる。

出土土器は、総点数10,717点、総重量311,800gで、その内埋没谷からは7,103点・210,515gが出土し、全体の約66%を占める。遺存の良かったSI01では2,716点・75,845gで全体の約25%とかなりの出土量である。遺物の時期は、縄文時代では三戸式期を最古にして、田戸下層式、田戸上層式、鶴ヶ島台式、茅山式など縄文早期の土器が認められる。前期では黒浜式1点、諸穂式1点、浮島式2点が出土するのみである。中期では阿玉台式、



第7図 壊遺跡第18地点全体図

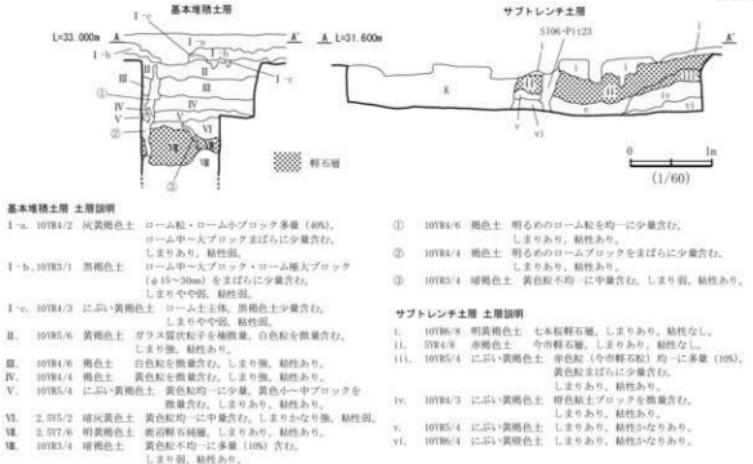
加曾利E式が認められるが、その中でも阿玉台I b式と加曾利E II～III式期が多くを占めている。後期では堀之内1式と加曾利B3式～安行1式期が多く出土し、本地点の主体的な土器となっている。器種別にみると深鉢が最も多く、浅鉢、鉢、台付鉢などは限定的であった。奈良・平安時代は8世紀代後半～10世紀代後半までの須恵器・土師器が認められ、そのほとんどがSI07からの出土であった。中世は地下式坑から出土した内耳土鍋があり、15世紀代後半から16世紀前半に比定される。

出土した石器・剥片は212点で、その内、図示したのは28点・25,592.5 gであった。石鎌、石錐、磨製石斧、磨石、凹石、多孔石などが認められ、磨石類が最も多い。中でもSI01の覆土中から、石棒が2個体出土していることは注目される。  
(高野)

## 第2節 基本層序（第8図）

基本層序の観察は、E1グリッド内の北壁面で行った。本調査区の中で最も標高の高い地点である。I層の表土は3層に分層されたが、盛土が複雑に堆積した状態になっていることがわかった。削平された後の客土とみられ、造成が行われた痕跡と考えられる。このI層上面を除去したII層上面が遺構検出面のローム面となるが、ソフトロームではなくハードローム層であったことから、削平が裏付けられたといえよう。なお、D3グリッドの擾乱に切られた埋没谷際の地層からは、七本桜・今市軽石層が認められたが、他の地点では確認できていない。擾乱が著しい調査区において、削平により消失してしまった可能性が高い。IIのハードローム層はII～V層まで分層が可能で、中程のIII・IV層は色調が若干暗めであった。VI層では鹿沼軽石粒が混入し、鹿沼軽石層の漸移的な層とみられる。VII層は鹿沼軽石層の純層になるが、II～V層が比較的安定した堆積であったのに対し、VI層以下で層位に起伏があり、VII層自体からも、細かい粒状と粗い粒状のものが混在している。

(高野)



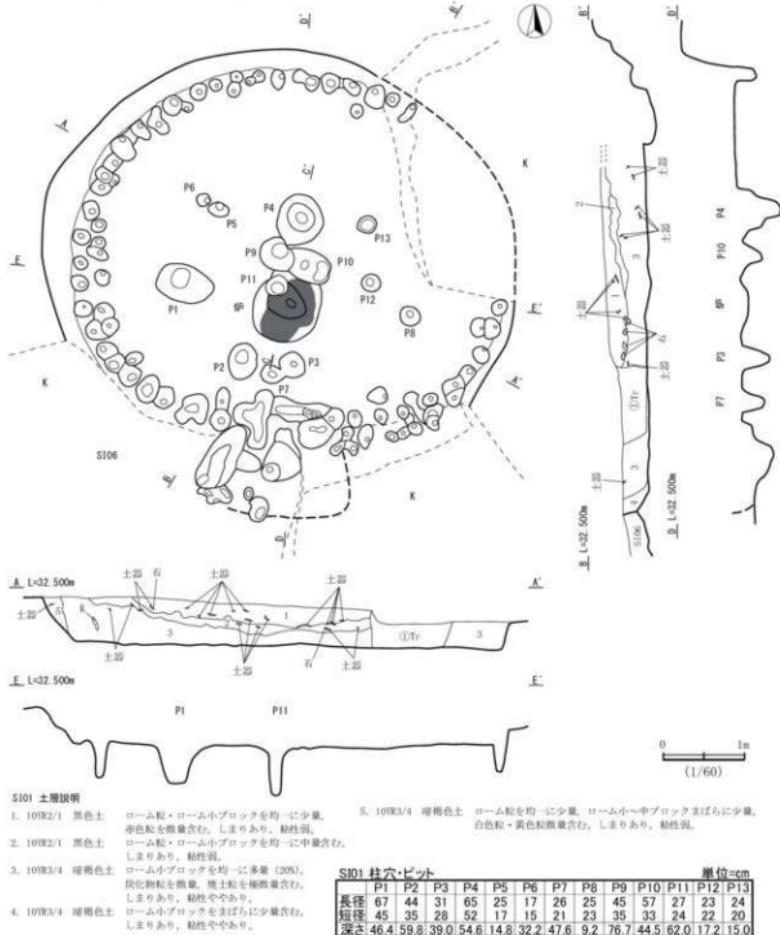
第8図 基本堆積土層図

## 第3節 繩文時代の遺構と遺物

## (1) 壴穴住居跡

## a. S101 (第9~19図)

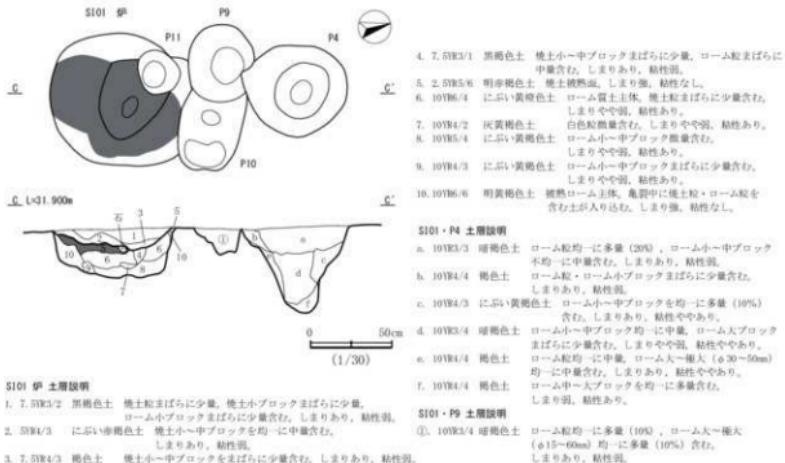
検出位置は、調査区北側のD2グリッドで、南から南西側は埋没谷に近接している。壁面の東側と南東側が擾乱により壊されていた。南側ではS106と重複し、土層から本跡が新しいと判断される。形態はほぼ円形であるが、東西軸が若干広がっている。規模は、東西軸 5.95 m、南北軸 4.75 m、深さは最深で 0.68 m である。出入り口施設と想定される地点



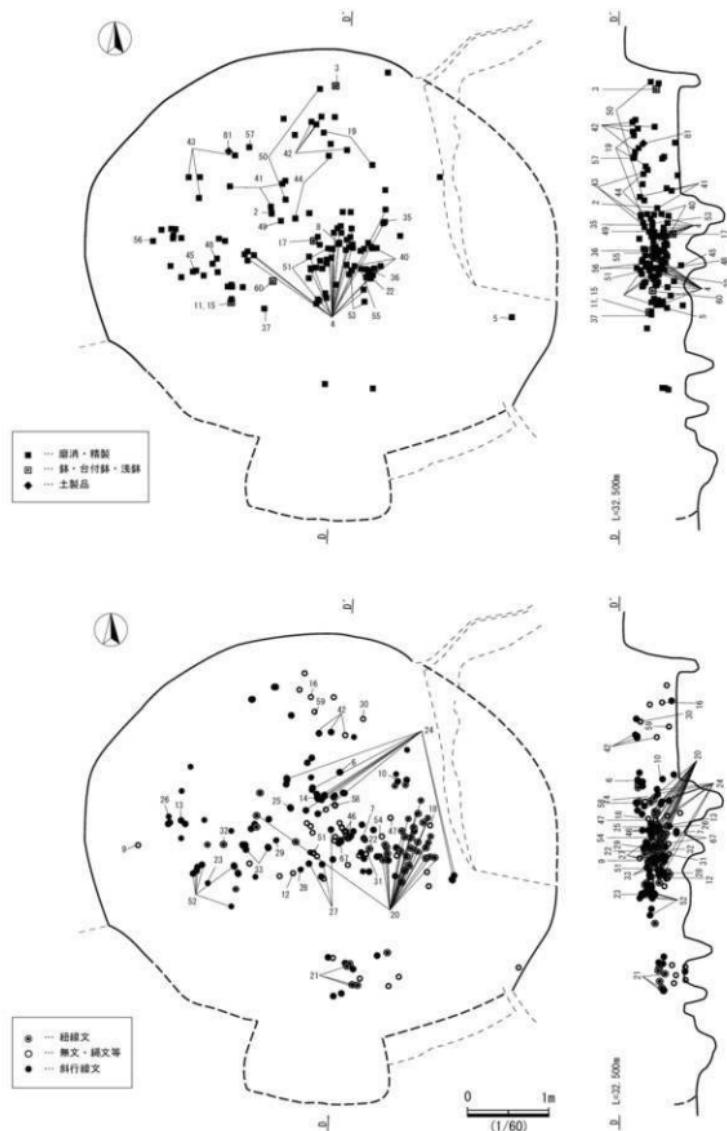
第9図 S101 遺構実測図1

から、炉を通る南北軸線を主軸と見た場合の方向はN・10°・Eを示す。覆土は大きく3層に分けられ、1・2層は黒味の強い土で自然に堆積した層とみられるが、3層はロームブロックを多量に含んだ厚い堆積層で、人為的に埋め戻されたと考えられる。床面は平坦で、ローム面が踏み固められて硬化した直床である。壁はほぼ直立して立ち上がるが、上端部分がやや外側に開いており、若干の崩落があった可能性がある。特に西壁の傾斜が著しい。炉は住居内の中央部からやや南寄りに位置する。形態はほぼ円形で、掘り込みの規模は長軸が現存値で83cm、短軸78cm、深さは最深で13cmであった。強く被熱し、赤変硬化した部分は掘り込みの東側と南側が特に顕著で、6cm程厚く赤色化していた。長軸を主軸とした場合の方向はN・21°・Eを示す。出入り口施設は南側で検出された。東側が攪乱によって消失しているが、溝状の掘り込みが南壁から変形した「コ」の字状になって突出し、外側に向かって開いた形態を呈する。突出部の規模は、長さ96cm、幅は130cm以上になる。ピットは、炉の周囲を巡り主柱穴を中心に構成されたものが13基、壁際に列をなす壁柱穴が67基である。炉周囲のピットは炉の位置にしたがって住居内の南側に寄っており、北側ではほとんど検出されていない。主柱穴になりえるのはP1・P4で、配置からみるとP12も考えられるが、規模が小さくなる。P2・P3・P7とP9・P10は炉を挟んで対峙しており、掘り込みが深く、出入り口施設とはほぼ直線上にある。P5・P8・P13は柱穴にしては浅いピットである。P11は炉の火床面を切り込んでおり、用途については不明である。壁柱穴は全周したものとみられ、南半分はピット同士の重なりが多いことから、柱の付け替えを行っているのであろうか。

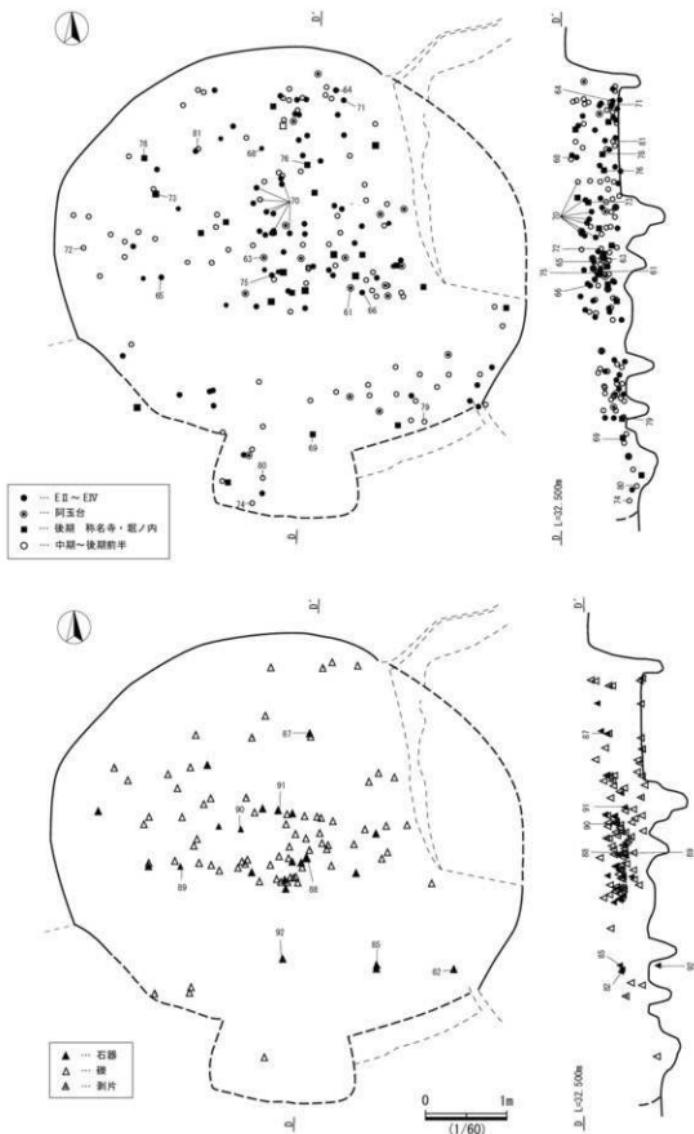
出土した土器は、2716点・75.845gである。層位別では、1・2層からの出土が1,292点・47.860g、3層からの出土が1,365点・26.875gである。1・2層中からの出土では後期後半の土器群が多く、3層中からは後期前半の土器が多い傾向にあった。しかし3層の土器



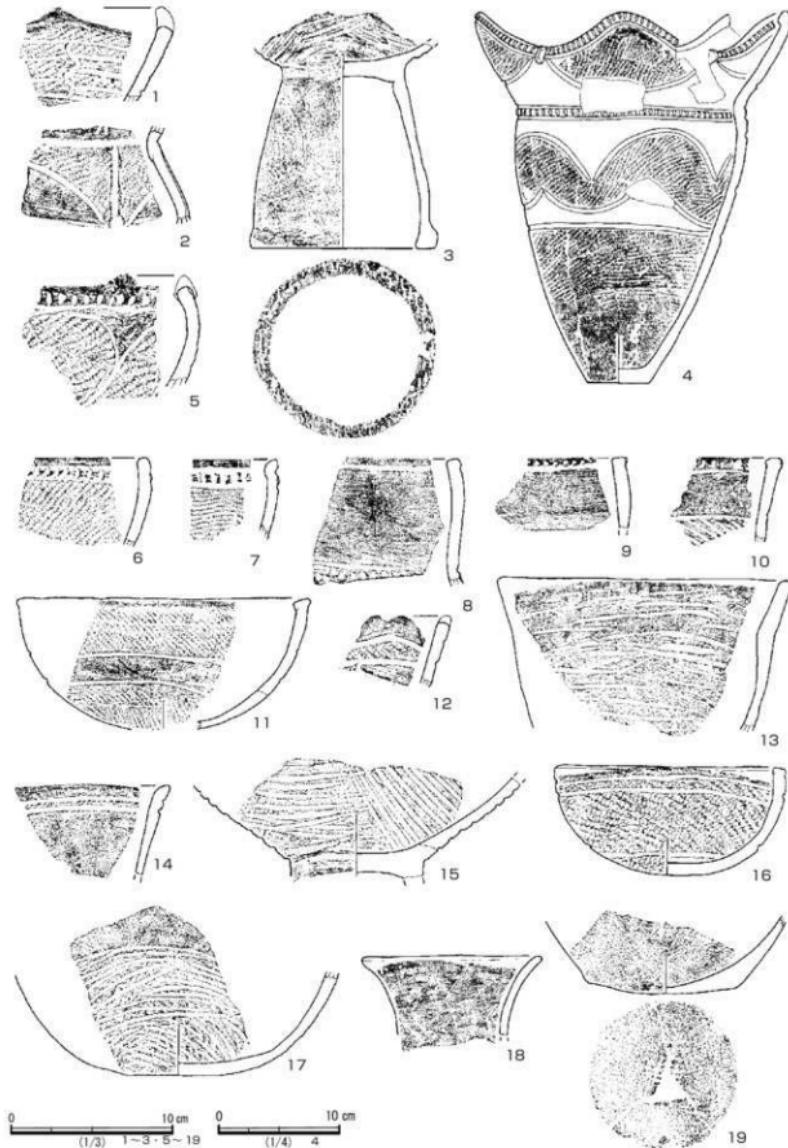
第10図 S101 遺構実測図2



第 11 図 SIO1 遺物分布図 1 (縄文後期後半)



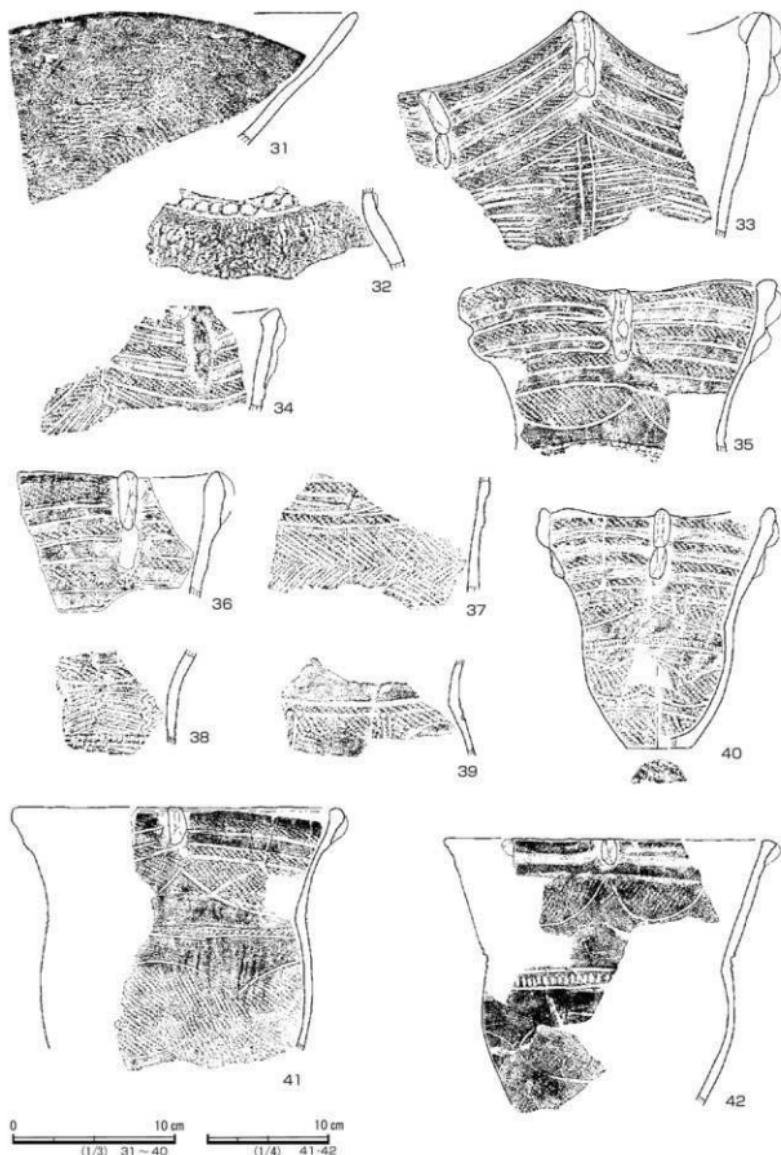
第12図 S101 遺物分布図2（縄文中期～後期前半、石器・縄）



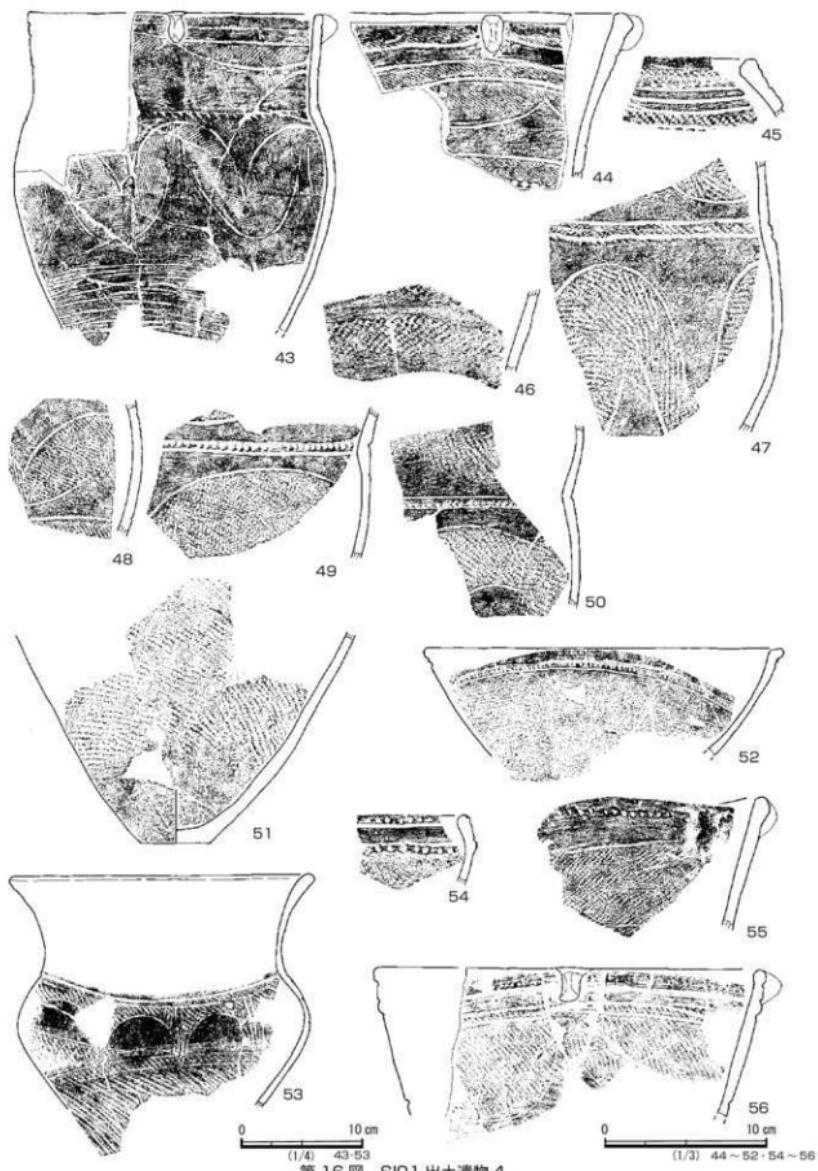
第13図 SIO1 出土遺物 1



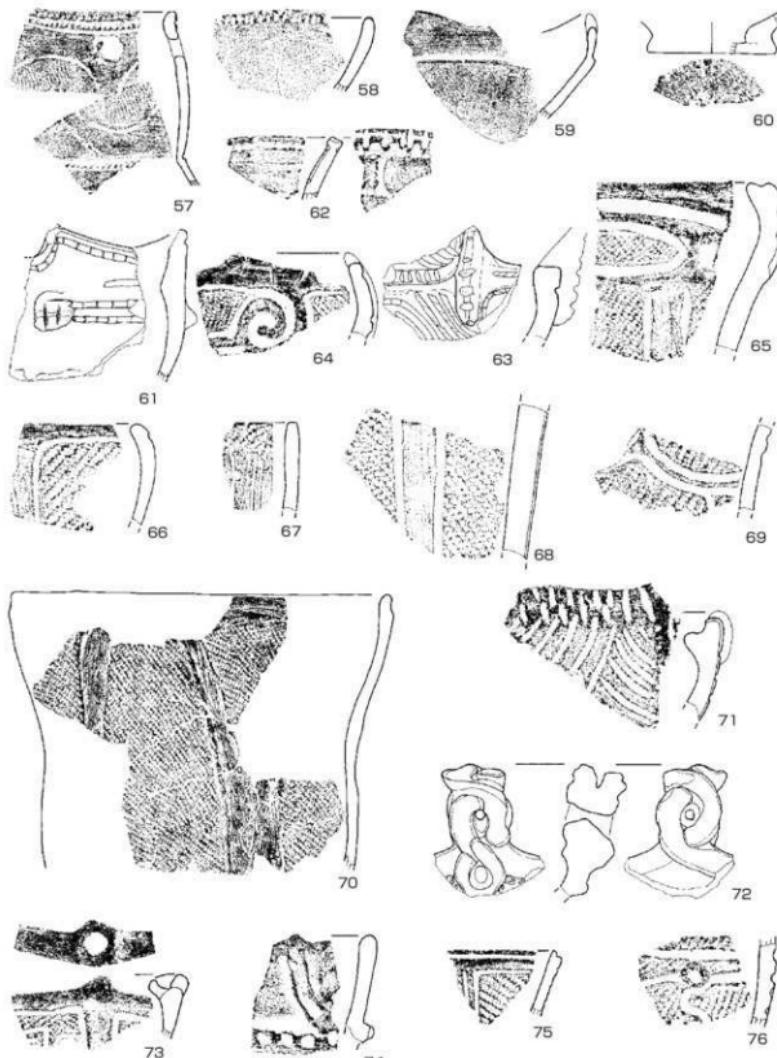
第14図 SIO1出土遺物2



第15図 SIO1 出土遺物3

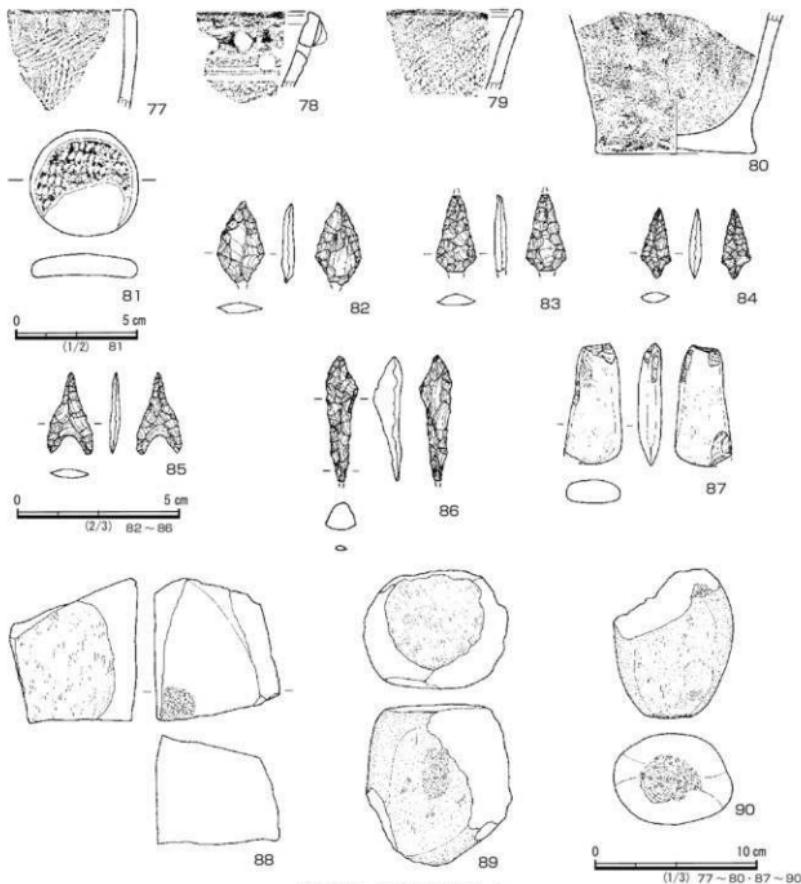


第16図 SIO1 出土遺物 4



0 10 cm 0 10 cm  
(1/3) 57-69-71-76 (1/4) 70

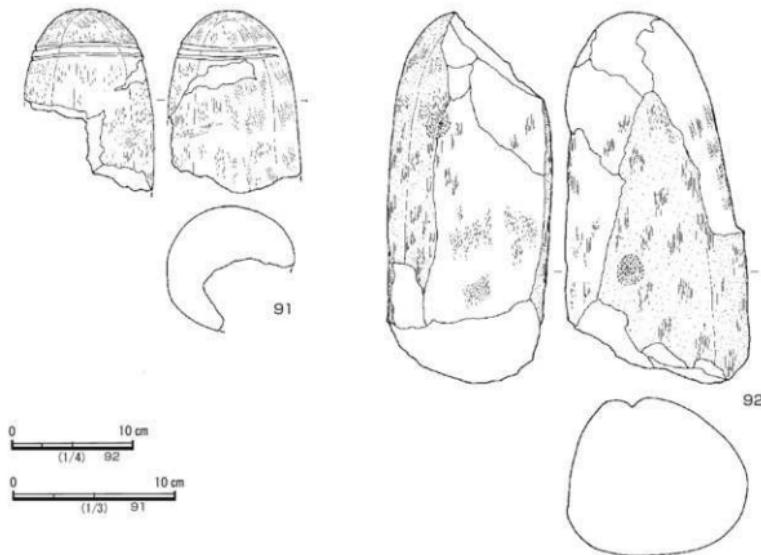
第17図 SIO1 出土遺物5



第18図 SIO1出土遺物6

群は後期後半の土器も相当数が混在しており、さらに古相の土器は磨耗した破片が多いことから、住居廃絶後人為的に埋め戻された際に混入したと考えられる。1・2層の土器群は、その後廃棄されたとみられ、加曾利B3式～安行1式が主体となっている。

1～19は加曾利B式期に比定さる。1は蛇行沈線が垂下して複数列の横沈線を区切っており、加曾利B1式段階の口縁部と考えられる。2は肩部の屈曲が著しく、3は台部が無文の台付鉢である。いずれも加曾利B2～3式と考えられ、本住居跡から出土している加曾利B式の中でも古相である。4～9は加曾利B3式期に相当する。4は大波状を呈する口縁部を持つ深鉢で口縁部及び頸部に刻文帯を施し、5～7も1条の刻文帯を有した口縁部である。10～19は加曾利B式から後続する曾谷式にかけての土器と考えられる。



第19図 S101出土遺物7

11・14・16などは平行沈線の装飾が特徴的である。また13の深鉢口縁部や17の鉢底部は平行沈線を雜に施している。18は無文の口縁部で壺形土器、19は無文の土器で底部が丸みを持っている。

20～57は安行1式に比定される。20～26は斜行沈線・条線文を施文する粗製土器である。その中で20～22は口唇部外端と頸部に紐線文を巡らす紐線文系土器になる。23・24の口唇部外端は刻みを施したものになっているのに対し、25～28の口縁部は何も手が加えられていない。一方頸部をみると、23のように施文がなされていない頸部もあるが、24・27は沈線で区画した無文帯になる。同じ無文帯でも28は沈線区画がない。29は口縁部が欠損しているが、幅の狭い沈線区画内に刺突列を巡らせているなど、変化に富んだ新しい要素を取り入れた手法が認められる。32は紐線文系土器の中でも頸部が屈折する壺形の器形になる。33～38・40～46は口縁部に帶縄文を施した土器群である。33・34は波状を呈する口縁部で波頂部・波底部にそれぞれ無文縦長に押圧を加えて2段にした瘤を貼り付けている。35・36は波状がかなり緩やかになり、貼瘤も波底部にのみ施されている。40は35・36と同じ形態であるが、かなり小型である。41～44は平線になる口縁部で、巡る帶縄文が減少し、貼瘤も短くなっている。45は帶縄文間の無文帯に沈線が加えられ、逆に46は沈線区画が施されていない幅の広い帶縄文も認められた。47～50は前述した41～43も含め、磨消縄文で文様が構成された土器群である。本跡では、互連弧充填縄文、襷掛け状入組文の文様が主体になっている。43・47の互連弧充填縄文は曲率が高く、前段階の曾谷式に近いと考えられる。53は台付鉢になる器形で、連弧状文様の磨消縄文を2本

単位の垂下した沈線で区画するのが特徴的である。57は瓢形の土器で、器壁が非常に薄い作りである。

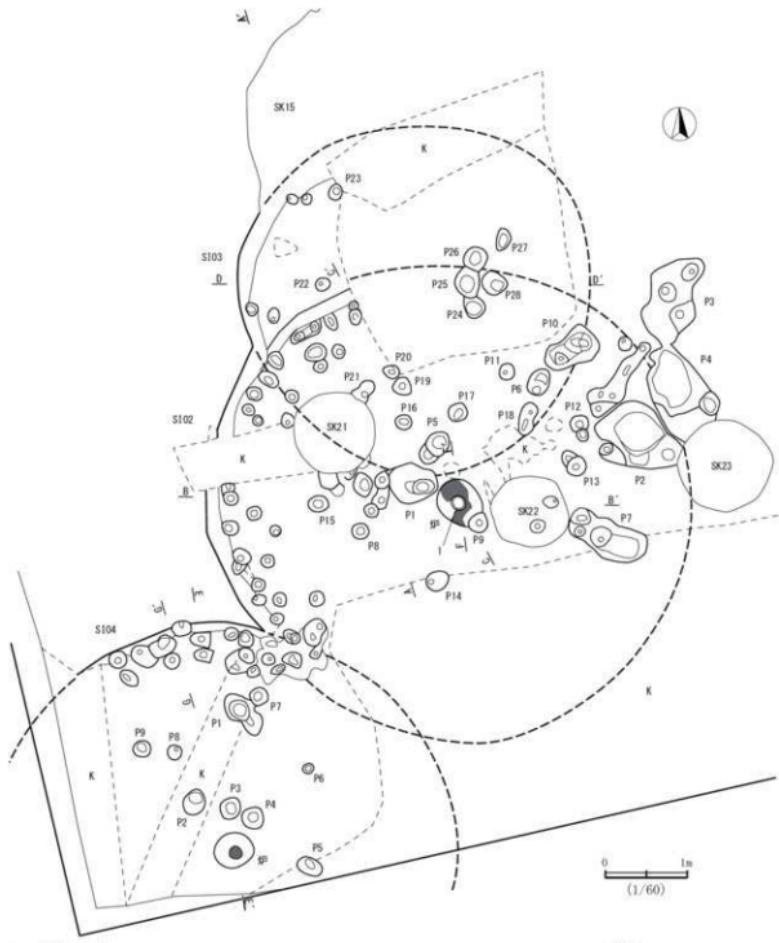
61～80は中期初頭の阿玉台Ⅰb式～後期前半の堀之内2式にかけての土器群である。覆土中の各層で認められるが、磨耗したものが目立ち、時期の分散傾向や接合率も低いことから2次の混入の可能性が高いと考えられる。61～63は有筋沈線を施した阿玉台式Ⅰb～Ⅱ式で、混入した土器の中では最古となる。64～70は加曾利E式の土器群で混入している中で最も多く出土した型式である。この中で64～66といった隆帯と沈線で区画文が成形されたものや、68の2本単位の沈線を垂下させて沈線内を磨り消した懸垂文を構成する加曾利EⅡ～Ⅲ式の破片が特に目立つ。71のような曾利式系の土器もわずかに認められる。後期前半の土器群では、75～80の堀之内1～2式の土器群が、混入する土器の中では加曾利E式に次いで多い。これは重複するSI06の影響と考えられる。

出土した石器・蝶は456点・54,770gである。1・2層中では大型のものが比較的多く、ほとんどが被熱している。3層中では小蝶ばかりで被熱も少ない。その内石器は35点である。器種別にみると磨石が最も多く、石皿の破片も目立つ。その中には石棒91・92が含まれている。ともに石棒の頭部と考えられ、被熱しているが、形態や規模には差異がある。91は頭部に平行した2本の線刻を巡らせ、頭部の一部が被熱後に磨り消された痕跡が認められる。埋没谷C2-1グリッドで採集されたものと接合した。92はかなりの大型で、破碎した面にも磨痕による整形が認められ、2次的に使用されたものであろうか。

本跡の帰属する時期は、遺構形態や出土遺物から繩文時代後期後半の加曾利B3式～安行1式期の範疇と考えられる。

#### b. SI02(第20～22図)

検出位置は、調査区南西端のB5グリッドである。本地点は集合住宅が建設されたことにより、配管や基礎の工事でかなりの搅乱や削平を受けていたため、西側壁の一部と中央部の床面が残存するのみであった。北側ではSI03と重複し、重複部分にはわずかに段差が認められた。土層では本跡が新しいと判断したが、あまり明瞭ではなかった上、出土遺物は本跡が古い時期に帰属することから、SI03より古い住居跡の可能性が高い。形態は炉の位置やピットの配置からほぼ円形であったものと想定され、規模は推定で径6m前後とみられる。西側の残存する壁面から計測した深さは0.3m前後であった。覆土は西壁際のみの観察で単層であった。床面は平坦で、ローム面が踏み固められて硬化した直床である。壁はほぼ直立して立ち上がる。炉は住居内のほぼ中央に位置するものと考えられる。形態はほぼ円形で、掘り込みの規模は長軸が現存値で50cm、短軸47cm、深さは最深で10cmであった。炉の中央部に完形の鉢（1）を埋設していた。炉の内部は強く被熱し、赤変硬化した部分は掘り込みの北側と南側が特に顕著で、3～5cm程厚く赤色化していた。長軸を主軸とした場合の方向はN・40°・Wを示す。出入り口は東側でピット群がハの字状に広がる部分が推測される。ピットは、炉の周囲を巡り主柱穴を中心に構成されたものと、壁際に列をなす壁柱が配置される。炉から北側のピットは極端に多くなり、SI03との重複が関係しているようである。全体に小ピットが多い中で、主柱穴になりえるのはP5・P14と考えられる。P7とP10は連結していることから、柱の付け替えが行われた可能性もある。P1は炉に近接し、覆土内からは時期の新しい土器が含まれていたことからSI03の柱穴とみ



SI02 柱穴・ピット																			単位=cm		
P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19, P20	P21		
長径 57	110	108	110	30	34	99	21	23	66	21	33	35	27	25	19	23	40	22	20	28	
短径 46	75	51	65	26	25	40	19	22	32	18	19	21	22	19	18	21	17	21	16	15	
深さ 84.0	34.9	39.4	38.9	59.1	32.5	38.0	37.0	26.5	29.0	11.8	24.4	23.8	44.0	13.4	26.0	21.7	20.9	7.6	17.9	31.2	

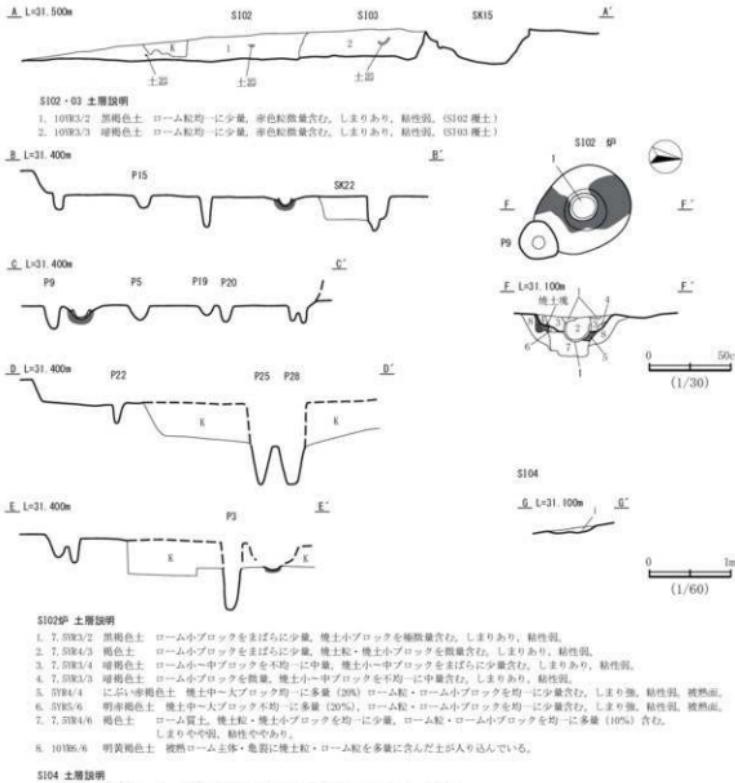
SI03 柱穴・ピット									単位=cm	
P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28				
長径 17	19	28	35	28	26	29				
短径 15	16	22	28	27	16	26				
深さ 21.3	17.7	40.2	41.8	53.2	56.6	44.4				

SI04 柱穴・ピット									単位=cm	
P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9		
長径 58	32	25	26	32	13	21	18	21		
短径 22	26	25	26	19	11	20	17	19		
深さ 78.6	55.0	44.4	54.4	38.2	16.4	11.0	15.4	14.9		

第20図 SI02・03・04遺構実測図1

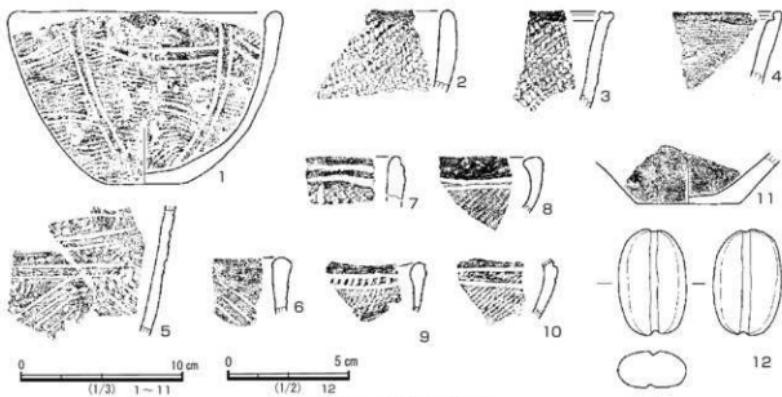
られる。壁柱は全周したとみられる。壁際から 20 ~ 30 cm の距離を置いて巡る内側の列と外側の壁際直下に列をなすものとに分けられることから、壁を拡張した可能性がある。

出土した土器は、121点・2,880 g である。覆土が遺存したのは西壁のみで、それ以外は炉・ピットからの出土である。1~5は堀之内式の土器で本跡の主体をなす。1・2は堀之内1式に比定される。1は鉢形の土器で、地文縄文に2本単位の沈線で文様を描くが、やや雑な施文である。炉内出土のため強く被熱し、器面がかなり荒れている。3~5は堀之内2式に比定される。3・4は口縁部の内面直下に細い沈線を巡らせている。3の文様は地文縄文のみであるが、4・5は細い沈線で幾何状の文様を描いている。7~10は小破片で時期が分散されていることから2次的混入と考えられる土器群である。7は隆帶と沈線で区画文を形成した加曾利E III式。8~10は口縁部直下などに刻文帯を巡らせた加曾利B 3式の土器である。8~10の土器は、重複する SI03 の影響があると考えられる。



第21図 SI02・03・04 遺構実測図2

本跡の帰属する時期は、遺構形態や炉からの出土遺物から縄文時代後期前半の堀之内式期と考えられる。



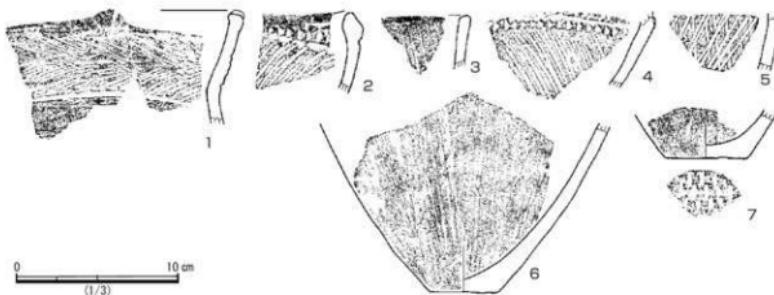
第22図 SiO2出土遺物

### c. SiO3 (第20・21・23図)

検出位置は、調査区南西端のB5グリッドである。本地点は集合住宅が建設されたことにより、基礎の工事でかなりの削平や擾乱を受け、北西側壁の一部と中央部の床面が残存するのみであった。南側ではSiO2と重複し、重複部分にはわずかに段差が認められた。土層では本跡が古いと判断したが、出土遺物は本跡が新しい時期に帰属することから、SiO2より新しい住居跡の可能性が高い。残存率はSiO2よりも低いため、形態や規模、主軸方向、床面の状態などの全容は不明である。北西側の壁面から計測した深さは0.3m前後である。覆土は西壁際でのみの観察で単層であった。壁はほぼ直立して立ち上がる。炉は確認されなかった。ピットは、SiO2と重複する部分で極端に多くなっており、本跡のピットと混在していることは明らかであるが、覆土などからの区別はつきにくい状態であった。主柱穴と考えられるのはSiO2のP1が本跡のものとみられる以外は、擾乱下から検出されたP24～P28がある。5基が密集しており、柱を据え替えた可能性もある。壁柱穴は、残存する壁際で4基のみ確認される。間隔が広くまばらな配置である。内側と外側の列が認められることから拡張された可能性がある。

出土した土器は、58点・1,125gで、ほとんどが西側壁面際に遺存した覆土からのものである。1は口頸部を沈線で区画し、区画内に矢羽根状沈線を充填させている。矢羽根の文様が崩れており、加曾利B2式でも後半段階のものであろうか。2～5は加曾利B3式に比定される。斜線文系の土器群で、2は口縁部直下に刻文帯、4は屈曲部に刻みを加えている。6は無文の底部であるが、底径の小ささから加曾利B式期の所産であろう。

本跡の帰属する時期は、出土遺物から縄文時代後期後半の加曾利B3式期と考えられる。



第23図 S103出土遺物

## d. S104 (第20・21・24図)

検出位置は、調査区南西端のB5グリッドである。全体が南へ向かってスロープ状に削平され、東側では集合住宅の基礎・配管による擾乱で壊されていた。そのため残存率が少なく、形態や規模、主軸方向、床面の状態などの全容は不明である。北東側でS102と重複するが、わずかに接している程度で新旧関係は把握できなかった。覆土は西壁際の一部が単層で観察されたのみである。壁は下端の一部が残存していたに過ぎないため立ち上がりの状態は不明である。炉は調査区で赤変硬化した部分が確認された。掘り方を削平された火床部と考えられる。ただし、壁際に残る床面と比高差があつて確証は得られない。炉の周囲を巡り主柱穴を中心に構成されたものと、壁際に列をなす壁柱が配置される。ピットは、炉の周囲を巡り主柱穴を中心に展開するものが10基、壁際に列をなす壁柱が15基であるが、主柱穴になりえる規模のものは検出されなかった。壁柱は全周したものとみられる。壁際から20cm程の距離を置いて巡る内側の列と、外側の壁際直下に列をなすものとに分けられることから、壁を拡張した可能性がある。

出土した土器は、13点・125gである。ピットからのものであるが、出土量が極端に少ないので、住居跡内の擾乱から採集した土器も関連性を考えて図示している。1・2は加曾利B式で、1はP3から出土している。口縁部直下に刻文帯を施しており、加曾利B3式に比定される。3～5は安行1式に比定され、5はP5からの出土であるが、小片のため不明瞭である。

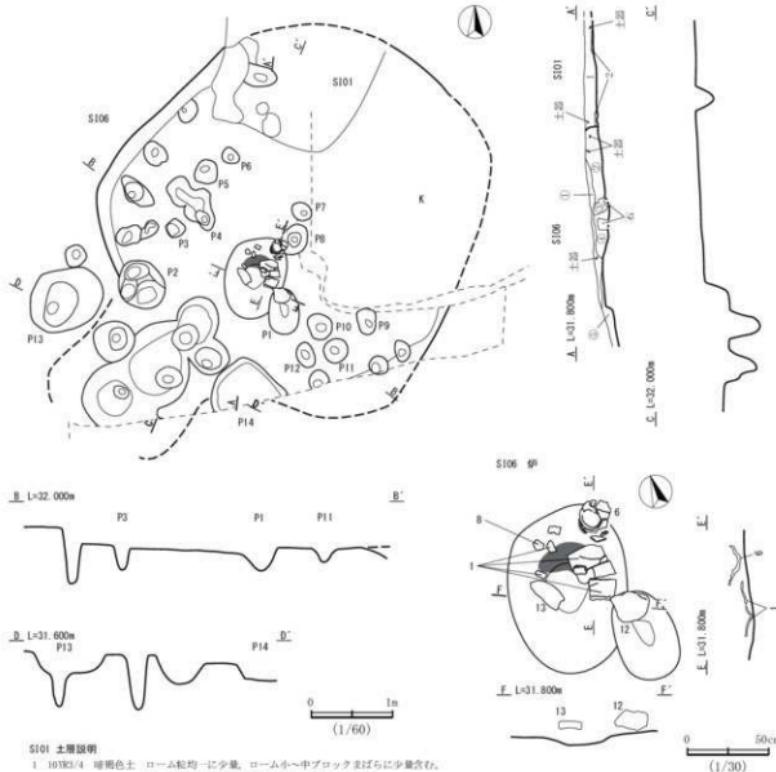
本跡の帰属する時期は、遺構形態や出土遺物から繩文時代後期後半の加曾利B3式～安行1式期の範疇と考えられる。



第24図 S104出土遺物

## e. S106 (第 25・26 図)

検出位置は、調査区北側の D2・3 グリッドにまたがっている。南から南西側は埋没谷にかかるが、削平を受けていたようである。また、壁面の東側と南側は擾乱により壊されていた。北側では S106 と重複するが、遺構自体から新旧関係を把握することはできなかった。形態は炉の位置やピットの配置から、ほぼ円形であったものと想定され、規模は推定で径 4.5 m 前後、深さは 0.33 m 前後とみられる。出入り口施設と想



## S101 土層説明

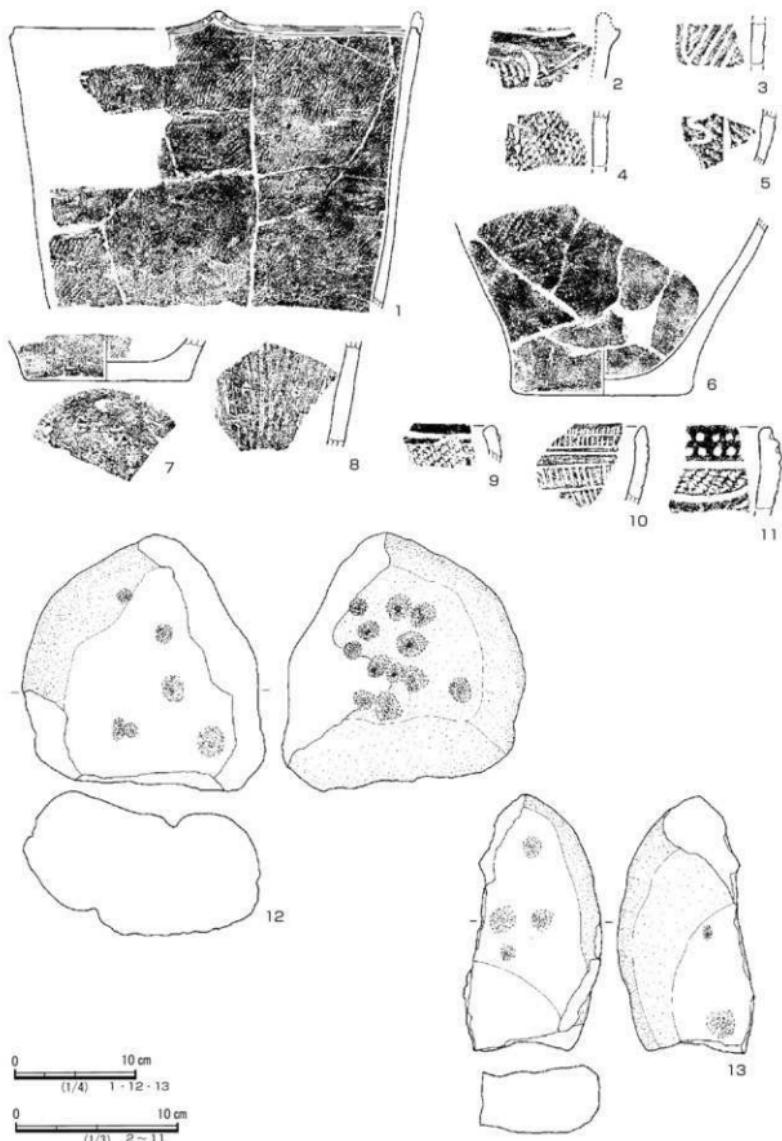
1. 10YC3/4 黒褐色土 ローム粒均一に少數。ローム小～中ブロックまばらに少量含む。  
ローム大ブロック微量含む。しまりあり。粘性弱。
2. 10YC3/4 黑褐色土 ローム中～大ブロックをまばらに少數含む。しまりあり。粘性弱。

## S106 土層説明

- ① 10YC3/2 黑褐色土 ローム粒、ローム小ブロックをまばらに少數含む。しまりあり。粘性弱。
- ② 10YC3/2 黑褐色土 ローム粒、ローム小ブロックをまばらに少數含む。しまりあり。粘性弱。
- ③ 10YC3/2 黑褐色土 ローム粒、ローム小ブロックをまばらに少數。燒土小ブロックを微量含む。しまりあり。粘性弱。
- ④ SV4A/2 に山字形褐色土 桧木。燒土小ブロックをまばらに少數。ローム粒を微量含む。しまりあり。粘性やや弱。
- ⑤ 10YC3/2 黑褐色土 白色粘土。黄色粘土(軽石)を均一に多量(10%)含む。

S106 立穴・ピット														
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
長径	57	60	22	77	30	30	27	40	31	32	30	30	30	30
短径	36	55	21	30	30	17	20	29	21	26	20	21	26	20
±△	26.0	44.6	11.0	35.5	19.5	31.5	67.9	77.3	24.7	20.6	14.0	32.1	10.5	56.9

第 25 図 S106 遺構実測図



第26図 SI06出土遺物

定される地点から、炉を通る軸線を主軸と見た場合の方向はN・47°・Eを示す。覆土は黒褐色土、暗褐色土を主体とする。床面は、壁際から炉に向けて若干の傾斜が認められ、炉を中心に窪んだ面になっている。床面はローム面が踏み固められて硬化した直床であるが、南側の七本桜・今市軽石層の上面にあたる部分では硬化面が認められなかった。壁は外傾して立ち上がる。炉は住居内の南西寄りに位置する。形態は楕円形で、掘り込みの規模は長軸が103cm、短軸74cm、深さは最深で9cmであった。赤変硬化した部分は掘り込みの北東側が特に顕著であったが、赤色化は薄かった。長軸を主軸とした場合の方向はN・24°・Eを示す。出入り口施設は南西側の突出部分が推測され、その規模から柄鏡形を呈した可能性がある。突出部は大型のピットが密集しており、長さ140m、幅126mである。ピットは、炉の周囲を巡り主柱穴を中心に構成されたものが14基、壁際に列をなす壁柱8基が検出されている。炉周囲のピットは炉を中心にして環状に巡る。主柱穴になりえる規模のものはP1・P2であるが、P1は炉に近接し過ぎているため確証を得ない。壁柱は全周したものとみられ、各柱穴が30~40cmの間隔を置いて巡っている。

出土した土器は、219点・6900gである。1~7は堀之内1式に比定されるもので本跡の主体となる。1は炉の火床直上からの潰れた状態で出土した大型の深鉢である。強く被熱し、器面はかなり荒れていた。2~5は地文縄文に沈線で文様が描かれた土器が中心である。2は口縁部に1条の沈線が沿う。3は沈線区画内へさらに集合沈線を施し、5は蛇行沈線が垂下する。6は炉直上で出土した底部片である。

9~11は中期に比定される土器で、2次的混入と考えられる。10は連弧文系の土器であるが、磨り消しが横方向に加えられている。11は連弧文内に縄文を充填した連弧文系土器で、加曾利EⅢ式と考えられる。

出土した石器は、2点・7.890gである。12・13はいずれも炉内から出土した大形の石皿を兼用した多孔石で、強く被熱している。

本跡の帰属する時期は、遺構形態や炉からの出土遺物から、縄文時代後期前半の堀之内1式期と考えられる。

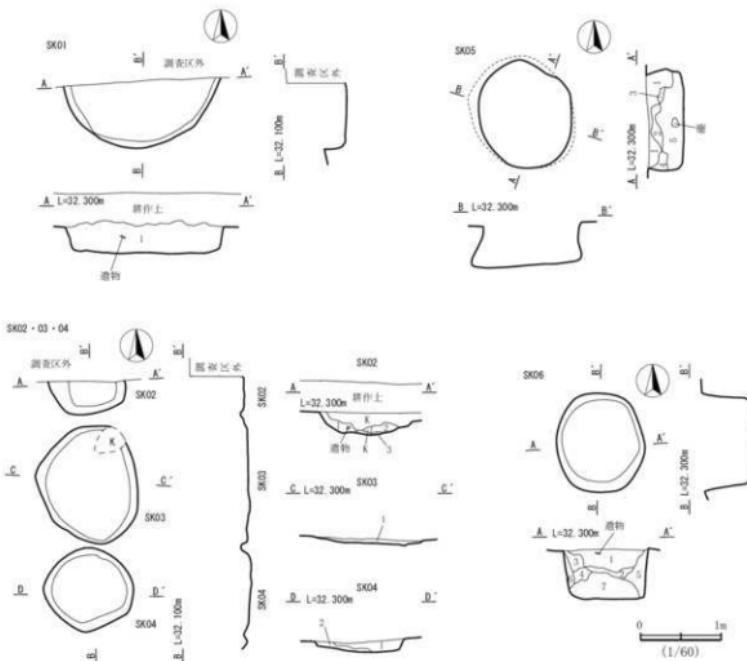
## (2) 土坑(第27~32図、第3表)

縄文時代の土坑は攪乱や削平によって消失したものも多いと考えられるが、概ね4地点に分散している。SK01~12・18は、調査区の中で標高の最も高い調査区北側のC1・2~E1・2グリッド内に散見される。各土坑を比較すると、規模や深さは不揃いであるものの、平面形態は円形で断面タライ状の土坑が主体になっている。その中でSK05・11のように袋状を呈した土坑も認められる。この地点の土坑は北側の調査区外へ広がっていることが推測される。SK13~14は調査区南東側E4・F4グリッドにあって双方が近接し合っており、ともに類似した規模・形態を呈している。SK13中層から16~19が出土し、時期は混在するが、16・18の称名寺1式期が主体である。SK16・17・21~23・27・28は調査区南西端のA5・B5グリッド内に集中している。特にSK21~23・28は規模や形態が近似し、覆土中層からやや大型の土器破片(28・29)や礫が出土するなどの共通点が多い。さらにSK21~23は等間隔に配置する規則性も見出すことができ、SK17・27・28を合わせて見てみると

第3表 土坑一覧表 1

遺構名 (アーチ型)	形状 (平面／断面)	断面(m)			長軸方向	基準 (第Ⅲ)	状態	備考
		正面	側面	頂部				
SH01	E1-F1 円形／ タライ状	—	1.90 (0.80)	0.25	—	—	底面は平底で、壁はほぼ直立。覆土は單層でトサ目的ロームブロックを均一に含む暗褐色土。遺物は加賀利石器が主体。	加賀利EII～III式
SH02	E1	—	—	—	0.24	—	複数できた覆土は暗褐色土が主体。遺物は出土せず。遺構の形態も不明。	中周～後期前半
SH03	E1 丸んだ円形／ 盤状	1.45	1.25	0.07	N-17°～W	—	上面が削平。底面は若干の起伏はあるもののほぼ平底。壁は緩やかに立ち上り。覆土は单層でトサ目的ロームブロックが均一に含まれた暗褐色土。	中周後半～後期前半
SH04	E2 円形／ 盤状	1.10	1.04	0.15	N-2°～W	—	底面は若干の起伏はあるもののほぼ平底。壁は緩やかに立ち上り。覆土は单層に分られる自然堆積層。	中周後半～後期前半
SH05	DH-D2 円形／ 盤状	上端1.35 下端1.38	上端1.37 下端1.25	0.35	N-21°～W	—	底面は若干の起伏はあるもののほぼ平底で、壁は直線的にやや内傾する。覆土は5層に分けられ、レンズ状を呈した自然堆積層。遺物は、加賀利式と同名号石器が混在。	中周末～後期前半
SH06	D2 円形／ 盤状	1.23	1.05	0.62	N-3°～E	—	底面は平底で、壁はほぼ直立。覆土は7層に分けられ、レンズ状を呈した自然堆積層。遺物は加賀利式の土器が主体。	加賀利EIII～作式
SK07	D2 円形又は橢円形 ／タライ状	0.94 (不規)	0.70 (不規)	0.22	N-46°～W	SK07 (不規)	底面は平底で、壁はやや緩やかではあるがほぼ直立した立ち上り。覆土は暗褐色土色の土器が混在。	加賀利EIII式
SK08	D2 円形／ タライ状	1.15 (不規)	0.85 (不規)	0.22	—	SK07 (不規)	南側の一部が削平。底面は平底で壁はほぼ直立。覆土は2層に分ける自然堆積層。遺物は、土器と無文の土器が混在して出土。	加賀利EIII式
SK09	E2 円形／ タライ状	1.03	0.92	0.28	—	—	底面は平底で、壁はやや緩やかではあるが直立した立ち上り。覆土は暗褐色土色の土器を主体とした人為的な堆積層。遺物は、筒瓦を含む土器と無文の土器が混在して出土。	中周後半～後期前半
SK10	E2 円形／ タライ状	1.09	0.97	0.41	N-43°～E	—	南側の一部が削平して底面が削平。底面は平底で、壁はほぼ直立。覆土は土器を主とした人為的な堆積層で西側面裏面の壁に混在。遺物は、縄文時代中期の土器が出土。	加賀利EIII式
SK11	D1 円形／ 盤状	—	—	0.56	—	—	北側の大部分が調査直前に削られたため底面は不明。底面は平底で壁は内傾。遺跡である覆土は5層に分けられる自然堆積層。	中周後半?
SK12	C2-D2 円形／ タライ状	1.22 (0.98)	0.30	N-14°～W	—	—	西側の一部が削平。底面は平底で壁はやや削除した立ち上り。覆土は5層に分けられる自然堆積層。遺物は、土器が2点のみ出土。	加賀利EIII式
SK13	E4 円形／ 盤状	1.30 (1.03)	0.45	N-82°～W	—	—	上面全体が削平。底面は平底で、壁はほぼ直立するが、若干オーバーハングした部分がある。覆土は2層に分けられる自然堆積層。筒瓦等1式又時中部の遺物が出土。	筒瓦等1式
SK14	F4 円形／ タライ状	1.21 (1.15)	0.34	N-8°～W	—	—	東側の大半が削平。底面は平底で壁はほぼ直立。覆土は3層に分ける自然堆積層。遺物は、土器2点のみ出土。	中周後半～後期前半
SK15	B5 円形／ 盤状	—	—	—	—	SB03 (不規)	東側の大半が削平。上端に削り込みがある円形とみられるが、底面は不整で、覆土は2層に分けられるが、直れた堆積層。遺物は、筒瓦等3層から後期前半期まで出でる。	後期後半～風削木痕肌の可能性あり
SK16	A5 円形／ タライ状	0.92 (0.44)	0.27	—	—	—	西側の約半分が調査直後に削除。底面は平底で壁は外傾した立ち上り。覆土は3層に分けられる自然堆積層。遺物は土器の破片1点のみ出土。	中周後半～後期前半
SK17	B5 円形／ タライ状	1.15	1.06	0.40	N-88°～E	—	底面は平底で、壁は外傾した立ち上り。覆土は3層に分けられる自然堆積層。遺物は、筒瓦時代中期の土器が主体で出土。	加賀利EII式
SK18	C2 円形／ レンジ状	1.29	1.31	0.43	N-9°～E	—	底面は平底で、壁は削除した立ち上り。覆土は3層に分けられる自然堆積層。遺物は、筒瓦時代中期から後期前半までが混在。	加賀利EII～III式
SK19	B5 円形／ タライ状	1.02	1.02	0.29	—	SB02 (吉)	西側の一部が削平。S102内で掘出され、横出場が硬さしていることからS102より古いと判断。底面は不整で、覆土は2層に多く含まれる暗褐色土。土器はロームブロックを多く含む暗褐色土色の土器の人が多い。筒瓦等1式又時中部の土器が出土。	筒瓦等1式
SK20	B5 円形／ タライ状	0.48	0.88	0.26	—	SB02 (吉)	S102内で横出し。横出場が硬さしていることからS102より古くと判断。底面は平底で、壁は直立。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土色の土器の人が多い。筒瓦等1式又時中部の土器が1点のみであるが、南寄りの覆土中頃より、大きめの筒瓦が1点出土。	加賀利EIV式
SK21	B5 円形／ タライ状	1.15	1.15	0.29	—	SB02 (吉)	S102内で横出し。横出場が硬さしていることからS102より古くと判断。底面は平底で、壁は直立。土器はロームブロックを多く含む暗褐色土色の土器の人が多い。筒瓦等1式又時中部の土器が出土。	筒瓦等1式
SK22	B5 円形／ タライ状	—	—	—	—	SB02 (吉)	S102内で横出し。横出場が硬さしていることからS102より古くと判断。底面は平底で、壁は直立。土器はロームブロックを多く含む暗褐色土色の土器の人が多い。筒瓦等1式又時中部の土器が出土。	筒瓦等1式
SK23	B5 円形／ タライ状	1.15	1.15	0.29	—	SB02 (吉)	S102内で横出し。横出場が硬さしていることからS102より古くと判断。底面は平底で、壁は直立。土器はロームブロックを多く含む暗褐色土色の土器の人が多い。筒瓦等1式又時中部の土器が出土。	筒瓦等1式
SK24	A1-B1 円形／ 盤状	1.50	1.20	0.12	N-88°～W	—	底面は平底で、壁は緩やかに立ち上り。覆土は暗褐色土の厚層。	後期初期
SK25	B5 やや不整な円形 ／盤状	0.91	0.86	0.12	N-57°～W	—	上部全体が削平。底面は平底で、壁は緩やかに立ち上り。繩跡できだれ土器はローム粒を多量に含む暗褐色土色の土器。遺物は出土せず。	中周
SK26	B5 円形／ タライ状	0.88	0.88	0.29	—	—	底面は平底で、壁は直立。土器はローム粒を多量に含む暗褐色土色の土器。遺物は、筒瓦等が発見されるものと無文の土器が少額出土。	中周後半～後期前半
SK27	B5	—	—	—	—	—	底面はやや丸みを持ち、壁は緩やかに立ち上り。土器はローム粒を多量に含む暗褐色土色の土器。遺物は、筒瓦等が発見されるものと無文の土器が少額出土。	中周
SK28	B5 円形／ タライ状	0.88	0.88	0.29	—	—	底面は平底で、壁は直立。土器はローム粒を多量に含む暗褐色土色の土器。遺物は出土せず。	中周後半～後期前半
SK29	A3 円形／ 盤状	(0.90)	1.05	0.28	N-88°～W	—	底面はやや丸みを持ち、壁は緩やかに立ち上り。土器は暗褐色土色の厚層。	中周後半～後期前半
SK30	B3 円形／ レンジ状	0.95	0.66	0.22	N-53°～E	—	底面はやや丸みを持ち、壁は緩やかに立ち上り。土器は中央部に幾重砂を含み、土色の調調が淡く直線化したS105の特徴と一致していたが、底面は不整で、壁は直立。土器はローム粒を多量に含む暗褐色土色の土器。遺物は出土せず。	中周後半～後期前半

\* ( ) 数値は復元値を表す。 \* ( ) は垂掛する遺構に対してして、時期が新しいか又は古いかを明記した。



#### SK01 土層説明

1. 10Y3/4 黄褐色土 ローム粒均一に多量、ローム小～中ブロック均一に少量(20%)。
2. ローム粒均一に少量(20%)。
3. 不整形なローム塊大ブロック(φ40~60mm)が中央部にややまとめて少量含む。しまりあり、粘性あり。

#### SK02 土層説明

1. 10Y3/3 黄褐色土 ローム粒均一に多量、ローム小～中ブロックまばらに少量含む。しまりあり、粘性やや強。
2. 10Y3/3 黄褐色土 ローム粒均一に多量、ローム小～中ブロックまばらに少量含む。しまりあり、粘性やや弱。
3. 10Y3/6 黄褐色土 ローム質土。1層をまだらに少量含む。しまりあり、粘性やや弱。

#### SK03 土層説明

1. 10Y4/4 黄色土 ローム粒ブロック不均一に多量(10%)含む。しまりやや強、粘性あり。

#### SK04 土層説明

1. 10Y3/2 黄褐色土 ローム粒均一に少量、ローム小～中ブロックまばらに少量含む。しまりあり、粘性やや弱。
2. 10Y4/3 にぶい黄褐色土 ローム小～中ブロック均一に多量(20%)含む。しまりあり。

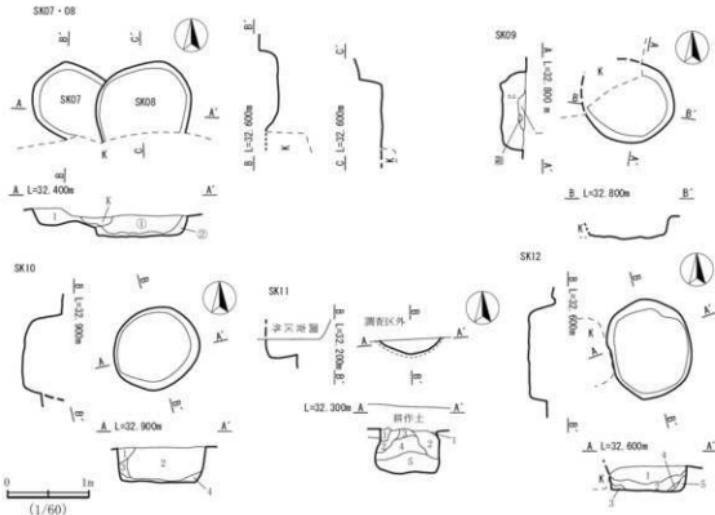
#### SK05 土層説明

1. 10Y3/2 黒褐色土 ローム粒均一に多量(10%)、ローム小～中ブロック均一に中量含む。しまりあり、粘性ややあり。
2. 10Y3/3 にぶい黒褐色土 ローム粒均一に少量、ローム小～中ブロック均一に中量含む。しまりあり、粘性ややあり。
3. 10Y3/6 黑褐色土 ローム粒均一に少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
4. 10Y3/6 黑褐色土 ローム質土。しまりあり、粘性弱。
5. 10Y4/4 黑褐色土 ローム粒均一に多量(20%)、ローム小～中ブロック均一に少量含む。しまりあり、粘性あり。

#### SK06 土層説明

1. 10Y3/2 黒褐色土 ローム粒均一に多量(10%)含む。しまりあり、粘性弱。
2. 10Y3/3 黑褐色土 ローム粒均一に中量、ローム小～中ブロック均一に少量含む。しまりあり、粘性弱。
3. 10Y3/4 黑褐色土 ローム粒均一に少量含む。しまりあり、粘性弱。
4. 10Y3/4 黑褐色土 ローム粒均一に中量、ローム小～中ブロックまばらに少量含む。しまりあり、粘性弱。
5. 10Y3/4 黑褐色土 ローム粒均一に多量(10%)、ローム小～中ブロックまばらに少量含む。しまりあり、粘性弱。
6. 10Y4/4 黄褐色土 ローム土主体。ローム中～大ブロック多量(40%)含む。しまりあり、粘性やや弱。
7. 10Y4/4 黄褐色土 ローム質土。ローム粒均一に多量(10%)含む。しまりあり、粘性弱。

第 27 図 SK01・02・03・04・05・06 遺構実測図



## SK07 土層説明

1. 10TC3/3 塗褐色土 ローム粘少量含む。しまりあり。粘性弱。

## SK08 土層説明

- ① 10TC3/2 黒褐色土 ローム粘均一に多量(10%)、ローム中一大ブロック微量含む。しまりあり。粘性弱。

- ② 10TC3/4 塗褐色土 ローム粘均一に少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

## SK09 土層説明

1. 10TC3/1 黑褐色土 ローム粘均一に少量含む。しまりあり。粘性弱。

2. 10TC3/3 塗褐色土 ブロックを中央部にやまとまとめて少量含む。しまりあり。粘性弱。

## SK10 土層説明

1. 10TC4/4 棕褐色土 ローム小ブロック均一に少量含む。しまりあり。粘性弱。

2. 10TC5/2 黑褐色土 ローム粘均一に多量(10%)、ローム小一中ブロック均一に

多量(10%)含む。しまりあり。粘性弱。

3. 10TC5/3 塗褐色土 ローム粘均一に少量含む。しまりあり。粘性弱。

4. 10TC6/3 にい 黄褐色土 ローム大一極大(15~20mm)ブロック均一に

多量(20%)含む。しまりあり。粘性弱。

## SK11 土層説明

1. 10TR4/3 にい 黄褐色土 ローム土少量(40%)含む。しまりあり。粘性弱。崩落層と思われる。

2. 10TR3/3 塗褐色土 ローム粘均一に多量、ローム小一中ブロック

まばらに少量含む。しまりあり。粘性弱。

3. 10TR3/2 黑褐色土 ローム粘均一に少量含む。しまりあり。粘性弱。

4. 10TR3/2 黑褐色土 ローム粘均一に多量(10%)、ローム小ブロック

まばらに少量含む。しまりあり。粘性弱。

5. 10TR3/1 黑褐色土 ローム粘均一に少量含む。しまりあり。粘性弱。

ローム粘均一に多量(10%)含む。しまりあり。粘性弱。

- SK12 土層説明

1. 10TR3/3 塗褐色土 ローム粘均一に多量(10%)、ローム小ブロック

まばらに少量含む。しまりあり。粘性弱。

2. 10TR3/4 塗褐色土 ローム粘均一に少量、ローム大一中ブロック均一に

多量(10%)、ローム大ブロックまばらに少量含む。

しまりあり。粘性ややあり。

3. 10TR3/3 塗褐色土 ローム粘少量、ローム小一中ブロック均一に多量(10%)含む。しまりあり。粘性弱。

4. 10TR4/4 棕褐色土 ローム土。しまりあり。粘性ややあり。

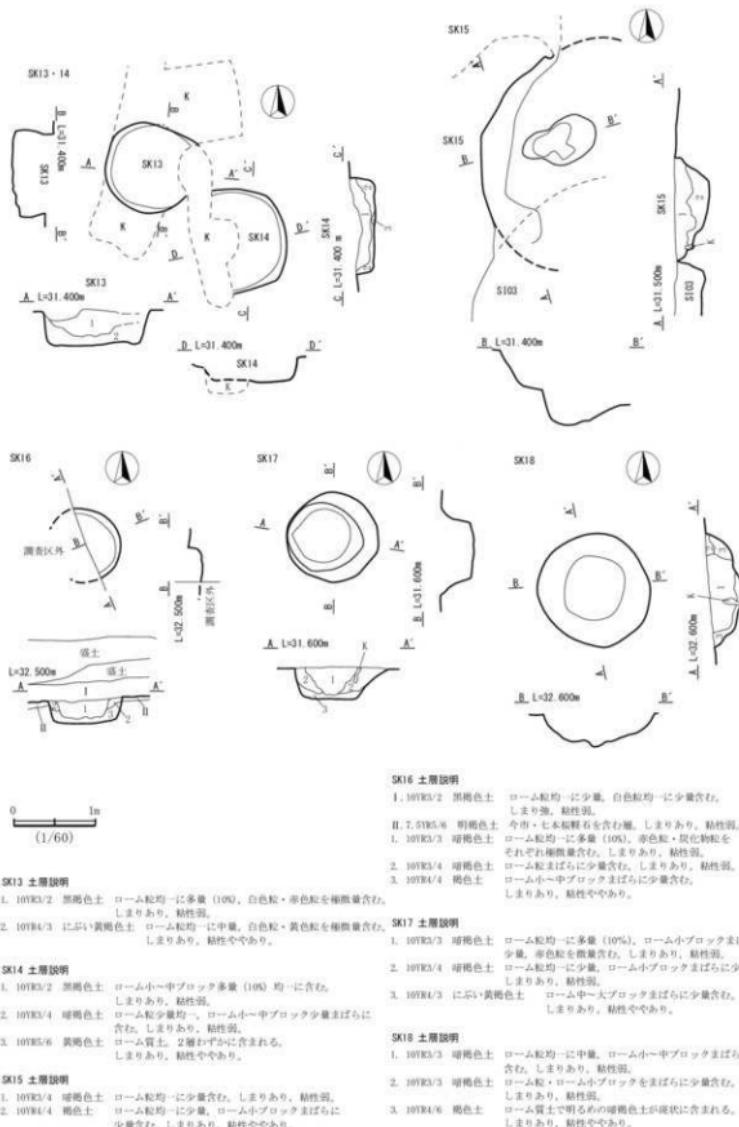
5. 10TR5/6 黄褐色土 ローム土主体。しまりあり。粘性あり。

第28図 SK07・08・09・10・11・12 遺構実測図

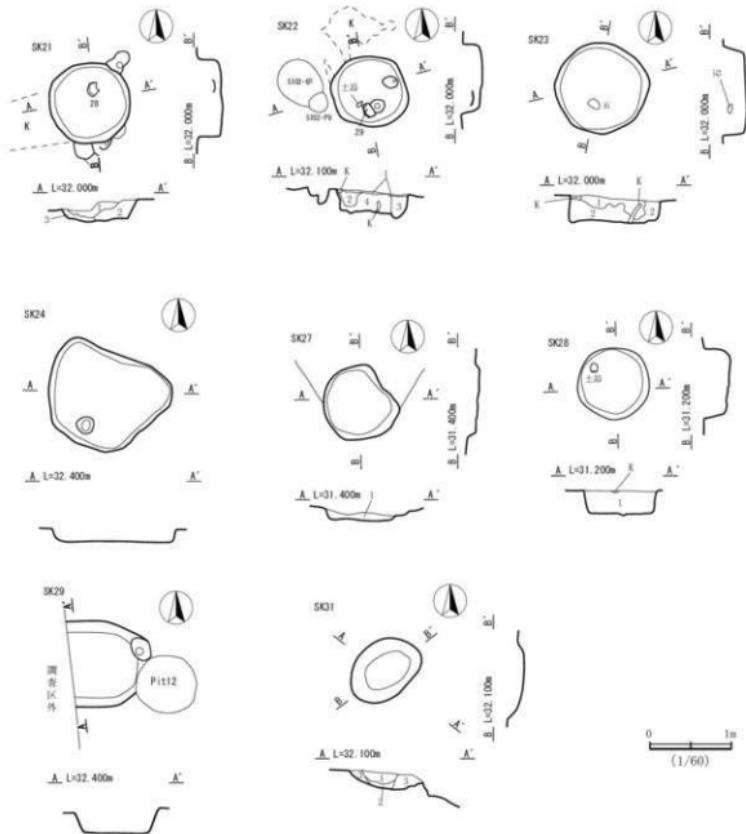
と環状に巡る様相で、前述したSK13・14とも類似している。SK21～23はSI02構築の際に削平されたものと考えられ、堀之内1式に比定されるSI02に先行した加曾利E III・IV式期、称名寺I式期の土器が出土している。

SI03と重複したSK15は形態が不整形で、風倒木痕または植栽痕の可能性が高い。SK24・29・31は調査区西端のA3・B3グリッド内に所在し、規模・形態に統一性は認められず、新しい時期のSK25・26や風倒木痕SX01と近接する。SK31は、焼土を含んだ覆土からSI05の炉としていたが、その後の調査で炉でないことが判明し、土坑として扱った。

各土坑の帰属する時期は繩文時代中期後半から後期前半の範疇に収まる。



第29図 SK13・14・15・16・17・18遺構実測図



## SK21 土層説明

1. 10TR3/3 噴褐色土 ローム粘均・ローム小ブロック均に多量（20%）含む。しまりあり、粘性弱。
2. 10TR3/4 噴褐色土 ローム粘均・ローム小ブロック均に多量（10%）含む。しまりあり、粘性弱。
3. 10TR3/4 噴褐色土 ローム中～大ブロック均に多量（10%）含む。しまりあり、粘性弱。

## SK22 土層説明

1. 10TR3/1 黒褐色土 ローム粘均に少量、ローム小～中ブロック均に少量含む。しまりあり、粘性弱。
2. 10TR3/2 黑褐色土 ローム粘均に多量（20%）、ローム小～中ブロック不均に少量含む。しまりあり、粘性弱。
3. 10TR3/3 噴褐色土 ローム粘均に多量（20%）、ローム小～中ブロック均に少量、ローム大～中ブロック（△ 15～20mm）不均に多量（10%）含む。しまりあり、粘性弱。
4. 10TR3/4 噴褐色土 ローム小～中ブロック均に多量（20%）、ローム中～大ブロックを主に少量含む。しまりあり、粘性弱。

## SK23 土層説明

1. 10TR3/2 黒褐色土 ローム粘均に多量（10%）、ローム小ブロックまばらに少量含む。しまりあり、粘性弱。
2. 10TR3/4 噴褐色土 ローム粘均に多量（10%）、ローム小ブロック微量含む。しまりあり、粘性弱。

## SK24 土層説明

1. 10TR3/4 噴褐色土 ローム粘均に多量（20%）、ローム中～大ブロック多量（10%）含む。しまりあり、粘性弱。

## SK27 土層説明

1. 10TR3/4 噴褐色土 ローム粘均に多量（20%）、

ローム中～大ブロック多量（10%），

赤色砂微量含む。しまりあり。

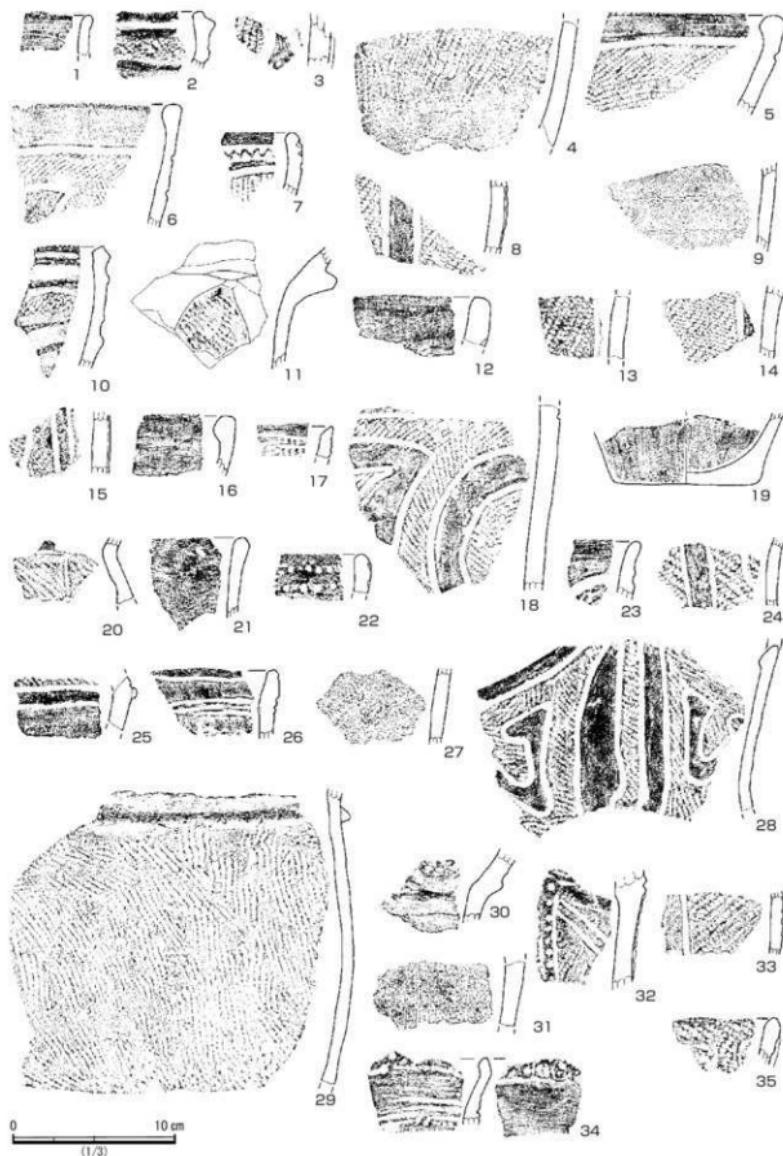
## SK28 土層説明

1. 10TR3/4 噴褐色土 ローム粘均に多量（10%）含む。しまりあり、粘性弱。

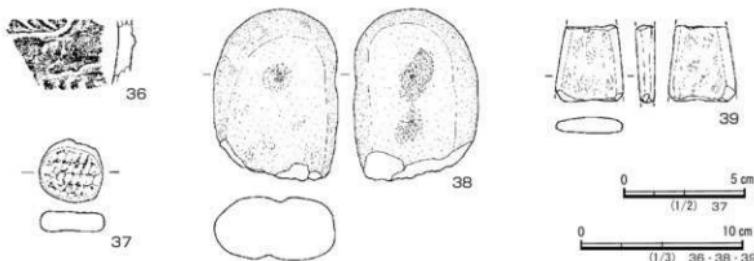
2. 10TR3/5 黑褐色土 地上部均に少量含む。しまりあり、粘性弱。

3. 7TR5/8 噴褐色土 ローム粘均に少量含む。しまりあり、粘性弱。

第30図 SK21・22・23・24・27・28・29・31 遺構実測図



第31図 土坑出土遺物 1



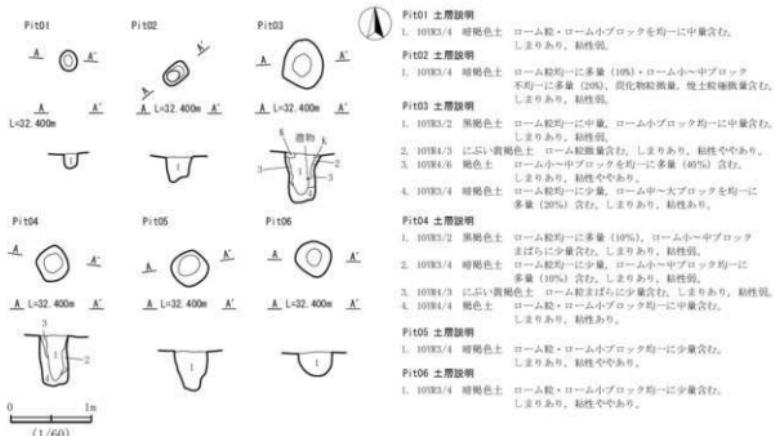
第32図 土坑出土遺物2

## (3) ピット(第33~35図、第4表)

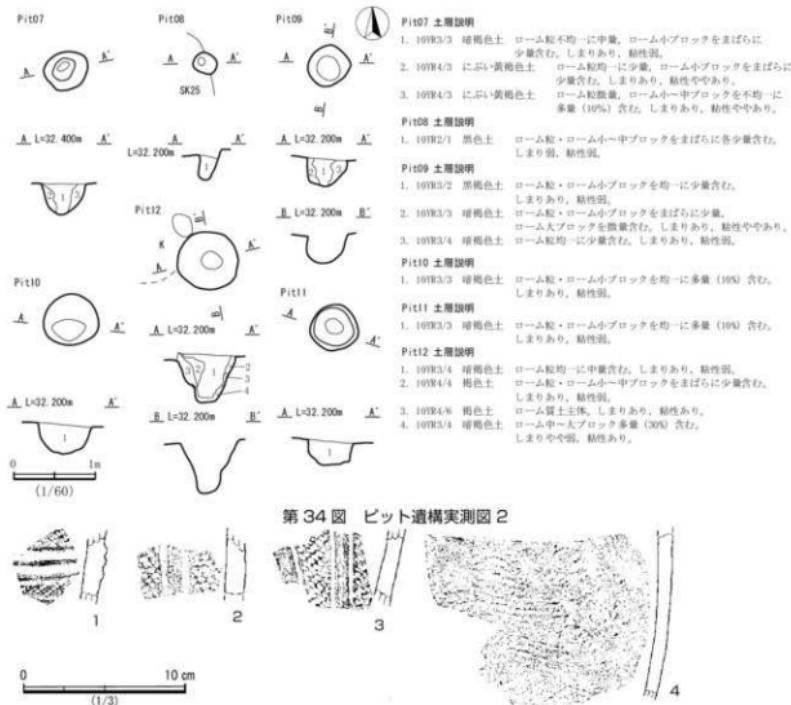
縄文時代のピットは、Pit03~07・09~12の9基である。検出位置はD1・2グリッド及びA3グリッド地点の標高の高い地点に集中している。規模は最大のもので径0.65m、深さ69cm、最小のもので径0.40m、深さ31cmである。配置に規則性は認められないが土坑群に近接して展開している。覆土は暗褐色土を主体とする。遺物は縄文時代中期後半から後期前半の土器が出土しており、各ピットの帰属する時期も同様と考えられる。(高野)

第4表 ピット一覧表

遺構名	※は中世以降												単位=cm
	*Pit01	*Pit02	Pit03	Pit04	Pit05	Pit06	Pit07	*Pit08	Pit09	Pit10	Pit11	Pit12	
位置	E1	E2	D1	D2	D2	D2	D2	A3	A3	A3	A3	A3	A3
形状	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形
長径	25	32	61	40	42	42	55	28	50	65	58	74	
短径	20	22	49	37	42	40	46	22	48	60	55	70	
深さ	19.3	31.4	69.3	64.1	52.4	32.0	44.6	37.5	36.9	36.0	31.2	62.6	



第33図 ピット遺構実測図1



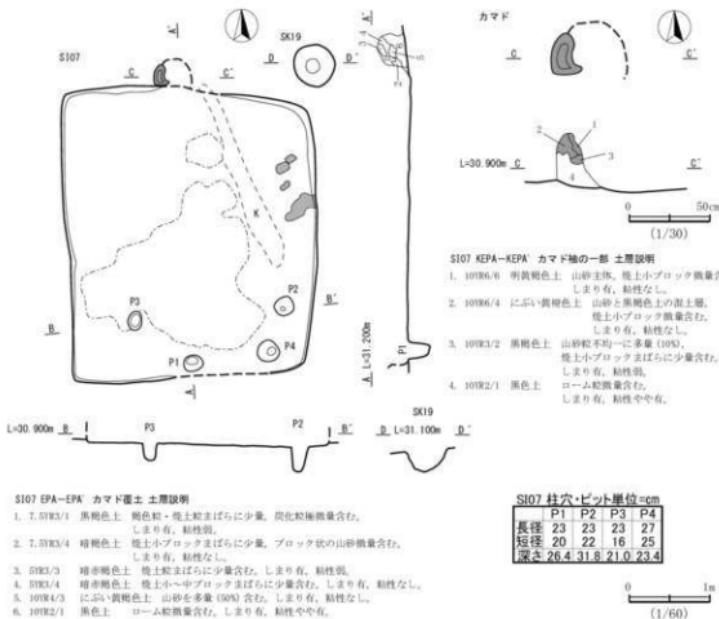
第35図 ピット出土遺物

#### 第4節 奈良・平安時代以降の遺構と遺物

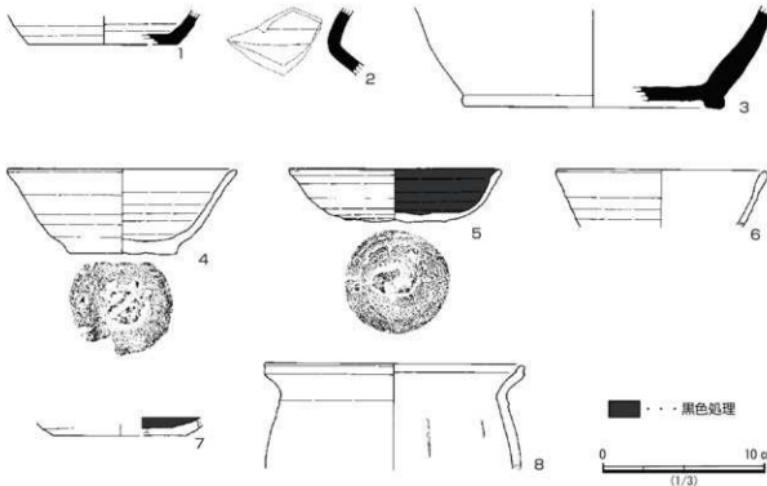
##### (1) 平安時代の竪穴建物跡

a. S107 (第36・37図)

検出位置は、調査区中央部やや西寄りのC3・4グリッドにまたがっている。埋没谷上に構築され、埋没谷の黒色土を掘り込んでいたため、上部の検出は困難であった。覆土の下層部においてカマドを中心に精査したところ、きめ細かい埋没谷の土に対し、やや粗い粒状の土を竪穴建物跡の埋土として確認した。形態は方形で、規模は東西軸が3.13 m、南北軸が3.67 m、検出面からの深さは0.1 mである。カマドの中心線を主軸とした場合の方向はN-0°である。確認できた覆土は黒色土の単層であるが、削平により上部のはほとんどが消失している。床面は平坦で、地山層上に構築された直床で、建物跡南側から中央部にかけてやや硬化している。壁は上部のはほとんどが消失しているため立ち上がりの状態は把握できなかった。カマドは北壁の中央に付設されているが、左袖の構築材のみが検出されるに留まり、規模は不明である。ピットは4基検出されたが、全て南壁面寄りにある。南壁際のP1は出入り口施設のピットと考えられるが、他の3基は主柱穴とするには規模が



第36図 SI07・SK19遺構実測図



小さく、配置も規則性が認められなかった。

出土した土器は、埋没谷に含まれた縄文土器と混在しているが、D4-1 グリッドで集中的に出土した須恵器・土師器を本跡の出土遺物として扱った。出土量としては土師器が多い。1～3は須恵器で、1が壺の口縁部、2は甕の頸部、3は甕の口縁部である。胎土から、木葉下産とみられるが、3は赤みを帯びた発色である。4～9は土師器である。4～7は壺の破片で、5・7は内面全体に黒色処理が施される。8は甕で口唇部がつまみ上げ技法により調整される。

本跡の帰属する時期は、出土遺物から10世紀後半と考えられる。

## (2) 中世の地下式坑

### a. SK20 (第38・39図)

検出位置は、調査区西端のA4・5グリッドにまたがっている。主室側の東側部分は、集合住宅建設時の深い基礎部分によって壊されていた。天井部は0.7～0.75mの厚さで残っており、調査の段階で崩落の危険があったため、主室の調査は天井部を除去してから行った。平面形態は凸形で、堅坑は方形、主室は台形を呈する。規模は全長が250m、幅は堅坑側が0.88m、主室側が1.03m以上。検出面からの深さは堅坑側が最深で1.09m、主室側が1.24mを測る。主室の天井部から床面までの高さは0.6m程しかなく、天井部の断面で堅坑側に亀裂した部分があることをみると、崩落した可能性が高い。堅坑を基点として見た場合の主軸方向はN-175°-Eを示す。覆土は主室側がしまりの弱い黒色土の單層である。主室側でも黒色土を主体としているが、ロームブロックを多量に含み、堅坑側から主室奥へと流れ込んだと考えられる。壁はほぼ直立して立ち上がり、壁面下端から底面にかけては丸みを持つ。

遺物は、1の内耳土鍋の口縁部片1点以外は、2次的混入とみられる縄文土器の小片が出土するのみである。

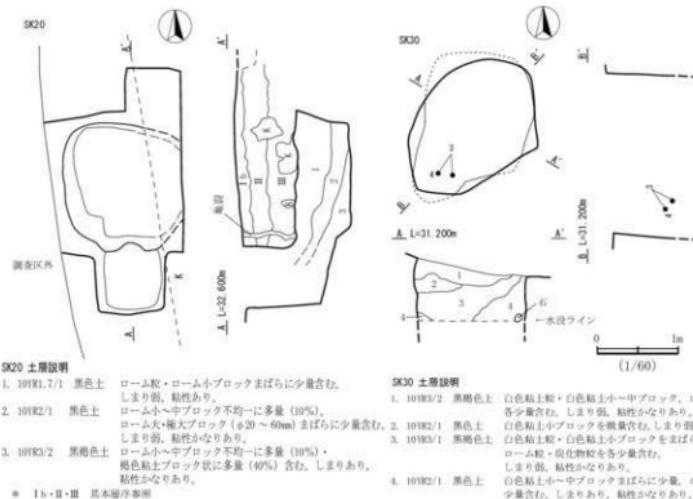
本跡の帰属する時期は、遺構形態や出土遺物から中世と考えられる。

### b. SK30 (第38・39図)

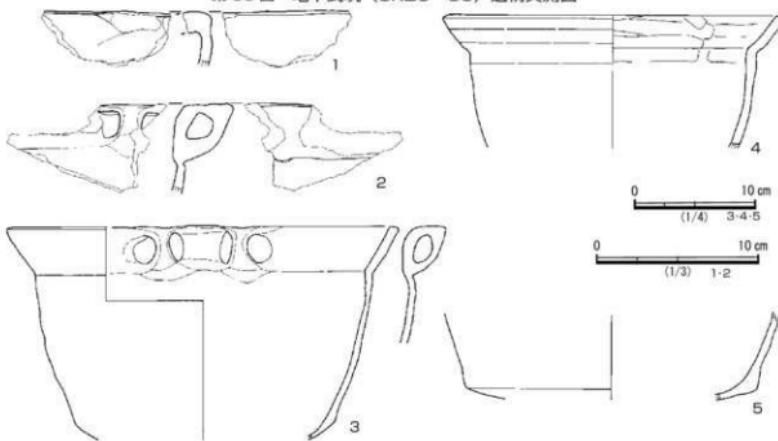
検出位置は、調査区西側のB3グリッドである。埋没谷を切り込んで構築されている。形態は瓢形で、幅の狭い部分を堅坑と見た。規模は全長が2.04m、幅は堅坑側が0.78m、主室側が1.34mを測る。検出面からの深さは0.8m付近で湧水のため全体の底面を確認することができなかった。さらにピンポールによる深度確認でも底面を達することはなく、かなりの深さを有している。堅坑を基点として見た場合の主軸方向はN-138°-Wを示す。覆土は主室側がしまりの弱い黒色土・黒褐色土を主体としている。本跡は地下式坑として扱ったが、検出された位置が埋没谷上であることや、湧水しやすい場所であること、また、規模の面から堅坑部分とも考えられるが、覆土の状態から井戸跡の可能性も考えられる。

遺物は、3層中南西壁寄りの地点から2～5の内耳土鍋がまとめて出土した。3は底部を欠損している。2～4は口縁部片から同一個体の可能性が高い。5は表面に煤の付着が認められない。これにより、少なくとも3個体の内耳土鍋が廃棄されたとみられる。

本跡の帰属する時期は中世で、出土遺物から15世紀後半～16世紀と考えられる。



第38図 地下式坑 (SK20・30) 遺構実測図



第39図 地下式坑 (SK20・30) 出土遺物

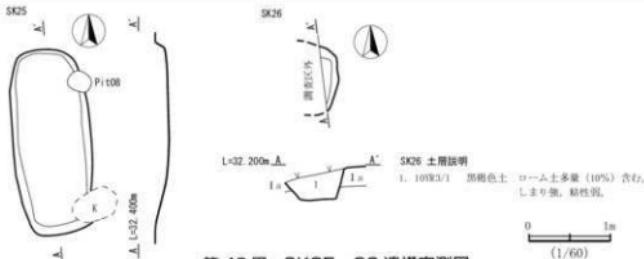
## (3) 奈良・平安時代以降の土坑 (第36・40図、第5表)

奈良・平安時代の土坑はSK19が該当する。SI07に近接し、埋没谷上で検出された。出土した須恵器は壺体部の破片で図示はしなかったが、胎土や色調がSI07-3の壺と類似している。時期は、覆土の状態や出土遺物からSI07とほぼ同時期と考えられる。

中世の土坑はSK25・26が該当する。覆土は黒色土の単層で、覆土の状態から中世以降と判断した。SK26はI層を切り込んでいることから擾乱の可能性もある。

## 第5表 土坑一覧表2

遺構名	位置 (グリッド)	形状 (半周/新曲)	規模(m)			長軸方向	重視 (面図)	状態	備考
			長軸	短軸	深さ				
SK19	C3	円形/ 楕円形	0.50	0.50	0.30	—	—	壁は直線的に外傾する。覆土は褐色土色の单層で、やや赤みを帯びる。 遺物は須恵器の小片が1点、縄文土器2点が出土。	9世紀後半?
SK25	A3	横丸長方形/ 椭円形	2.55	0.97	0.28	N-88°-W	—	壁は緩やかな立ち上がり、覆土は黒色土の单層。遺物は2次的混入の縄文 土器が主体(第31回32~34)。	中世以降
SK26	A4	—	—	—	0.35	—	—	大部分が調査区外にかかるため全容は不明。壁はほぼ直立して立ち上 る。覆土は黒色土の单層。遺物は1点出土地。	中世以降



第40図 SK25・26 遺構実測図

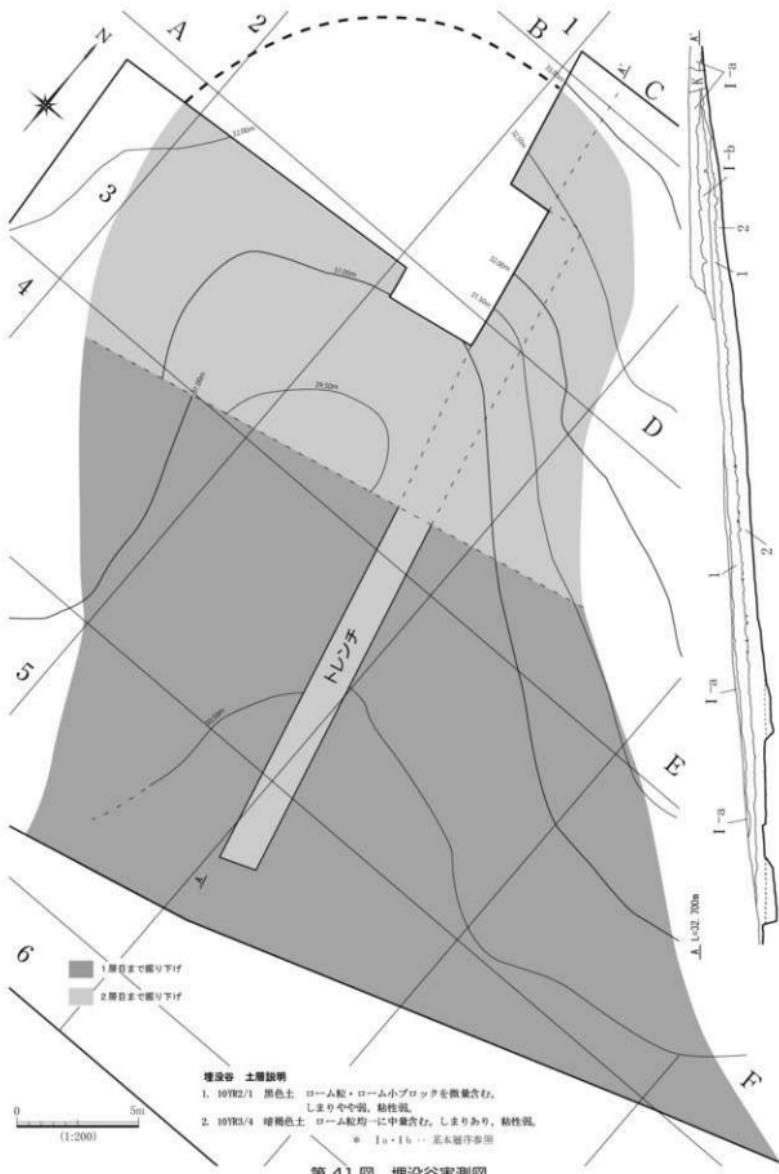
## (4) 中世以降のピット (第33・34図、第4表)

中世のピットは、Pit01・02・08の3基である。検出位置はPit01・02がE2グリッド内、Pit08がA3グリッド内である。規模は径0.22~0.32m、深さ0.19~0.38mである。配置に規則性は認められず、他の遺構との関連性も見出せない。覆土は黒色土及び暗褐色土で、いずれもしまりの弱い状態であった。遺物は出土していない。各ピットの帰属する時期は、Pit08が覆土の状態から、中・近世と考えられるが、Pit01・02は掘り込みの状態が方形状に近いなど、さらに新しい時期となる可能性が高い。(高野)

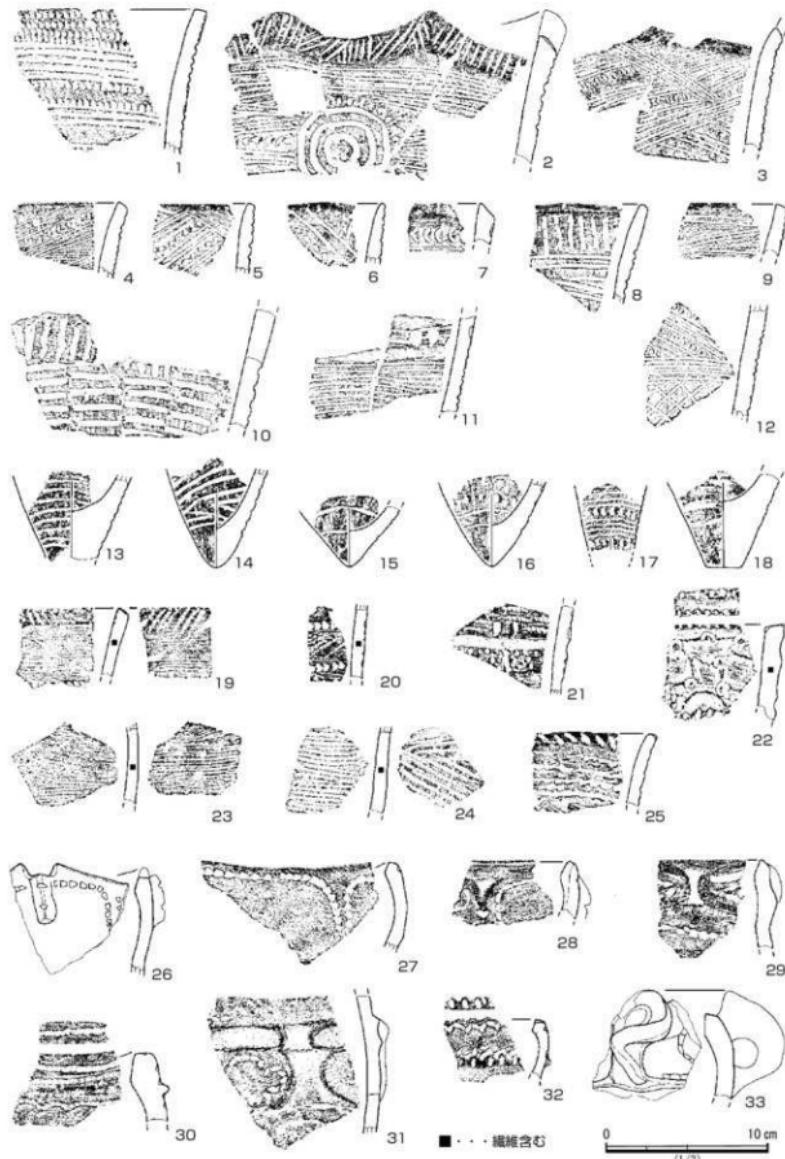
## 第5節 埋没谷

埋没谷は、調査区の中央部から西側に広がり、調査区を東西に分断している(第7図)。調査区内で確認できる規模は全長39m、幅21~25mで、主軸方向はN・28°・Wを示す。埋没谷の西岸は、集合住宅建設時に削平されていたがこの部分を差し引いても東岸とでは約1mの比高差を有している。開削により埋没谷の地形を観察すると、ローム上面の地形で東岸のC2・3グリッド付近がやや急な傾斜を見せ、B3グリッド付近へ回り込んでいることが捉えられる。C3グリッド地点が谷底と考えられ、ここから南側へ向けて傾斜角度が4~9°の緩やかな傾斜になっている。これらの地形から、未調査区のB2グリッド周辺が谷頭にあたると推測され、南方の桜川へ向けて開けた谷が形成されたと理解される。埋没谷の土層は大きく2層に分けられる。上層部分の1層は黒色土、下層部分の2層は暗褐色土を呈し、色調の差異は比較的明瞭であった。いずれの層にも遺物が多く含まれ、特に層の境目に集中していた(第41図)。

遺物は、縄文時代早期の三戸式から後期後半の安行1式にかけての土器片と、磨石を主体とする石器が出土した(第42~46図)。前述した層位と関連付けてみると、各層には多様な型式の土器が混在している。1層では中期から後期後半の土器が比較的多く出土し、2層では1層で認められた型式が減少し、早期の遺物が目立つ。また、1層だけの出土分布をみると、谷頭部分での出土量が南側部分より多い傾向にある。



### 第41図 埋没谷実測図



第42図 埋没谷出土遺物 1

1は三戸式に比定される。本遺跡で出土した中で最古になり、出土したのはこの1点のみである。横位の多重沈線で区画し、区画間に刺突文を横位に巡らす。胎土には石英や白色粒が目立つ。

2～18は田戸下層式に比定される。縦沈線、横沈線、斜沈線を多用しているが、その間に刺突文を施すものが特に目立つ。口縁部は平縁が多くみられ、口唇部は外削ぎ状のものが主体になる。2では、口唇部にも沈線や貝殻復縁で細かく施文している。9は貝殻腹縁文を充填している。13～18の尖底部は先端部近くまで文様を施しているが、18は削りにより整形され、先端部がやや平坦である。

19～21は田戸上層式に比定される。19は表裏両面に擦痕文が認められ、口唇部は外削状となり、口唇部から内面の口縁部直下まで貝殻腹縁文が施文される。20は刺突による押引文の区画内に貝殻腹縁文が充填される。21は貝殻腹縁文や凹線文、刺突文を多用したものである。19には胎土に纖維が含まれている。

22は鶴ヶ島台式に比定される。口唇部の内外端部に刻みを持ち、微隆線で幾何状の文様が描かれ、交点上に円形の捺押文を施している。胎土に纖維を含んでいる。

23・24は茅山式に比定される。表裏両面に条痕文を施し、胎土に纖維を含んでいる。

25は浮島Ⅱ式に比定される。小波状の沈線文を多重に横走させた文様である。

26～42は阿玉台式に比定される。26は阿玉台Ⅰa式に相当する。口縁部は波状を呈し、波頂部に凹みを加え、直下に粘土棒を貼り付けている。27～32は阿玉台Ⅰb式に相当する。出土した阿玉台式の中では最も多く認められた型式である。27は隆帯による区画が形成されていない点では26に近いと思われるが、内湾度が強い。28～32は隆帯による区画文を施し、区画内に有節沈線が沿う手法である。28・29・31は楕円区画になる。30は口唇部に有節沈線が施される。32は有節沈線が齶歯状になり、隆帯には交互刺突文が加えられている。33は橋状把手の口縁部で、蛇行隆帯を貼り付けている。34～38は阿玉台Ⅱ式に相当する。隆帯区画に2列の有節沈線を沿わせた土器群である。38・39は同時期の浅鉢と考えられる。40・41は阿玉台Ⅲ式に相当する。40は楕円区画に幅広の爪形文が沿う。41は区画文に有節沈線が沿うものであるが、地文に繩文が施文されている。41は隆帯に2条の沈線が沿う阿玉台Ⅳ式である。

43～48は大木式に比定される。43は繩文原体圧痕文が施文された大木7b式の口縁部である。44～48は大木8a式に相当する。44は地文繩文に有節沈線で文様が描かれている。45～47は口縁部直下に押圧が加えられた高い隆帯で棒状の区画が施されている一群である。48は羽状繩文が施文されている。

49～58は加曾利E式に比定される。49・50は隆帯により文様を描出した口縁部で、加曾利E I式に相当する。49は渦巻文を施し、頭部は無文帶としている。51～53は加曾利E II式の土器で、51・52は隆帯と沈線で渦巻文を成形している。53は浅鉢の口縁部で内面に太めの沈線による文様が施されている。54は加曾利E III式並行、55～57は加曾利E III式の土器である。54の波状口縁は波頂部直下を穿孔し橋状把手を作出している。55～57は沈線間を磨り消した懸垂文で、55は上端が閉じられ、56は曲線的に垂下し、沈線による区画が認められない。57は地文に撚糸文が施文されている。58は加曾利E IV式で、微隆線により区画がなされている。



第43図 埋没谷出土遺物 2

59は曾利3式に比定される。集合沈線が内面まで施文され、内面口縁部直下に突帯が巡る。

60～65は称名寺式に比定される。60～62は沈線文により文様を描出し、沈線文間に繩文が充填されたもので、称名寺I式に相当する。60は刺突文が加えられ、61はJ字文が描かれる。63～65は端部に円形刺突文を持つ沈線文を口縁部直下に沿わせており、称名寺II式と考えられる。

66～68は堀之内式に比定される。66は2本単位の沈線文で文様を描く堀之内1式、67・68は口縁部直下に刻みを加えた紐線文を巡らせた堀之内2式である。

69～82は加曾利B式に比定される。69・70は押圧が広めに加えられた紐線文、71は内面の文様が発達した浅鉢で加曾利B1式に相当する。72・73は加曾利B2式の土器である。73は無文土器で口縁部に段を持つ。74～82は加曾利B3式の一群である。74・75は口縁部直下に刻文帯を沿わせている。76～82は斜行線文系の粗製土器である。76～78は頸部を磨り消して無文帯を形成している。77は沈線による区画が施されていない。78は磨り消しが弱く、斜行沈線が残っている。なお、72は同様の頸部片であるが、幅が広く区画されていることから、加曾利B2式と考えられる。79は口縁部直下に矢羽根状の沈線が施文されている。80・81は格子目状の沈線が施されたもので、81は地文に繩文が施文され、頸部を沈線区画のない無文帯が形成されている。

83～88は曾谷式に比定される。83・88は口縁部直下及び頸部に刻文帯や刻みをめぐらせた磨消繩文系の土器である。83は刻み目が広く、加曾利B式からの過渡的な様相である。84・85は無文の貼瘤を施している。87は弧線文が貼瘤に向かって集合しているのが特徴的である。

89～94は安行1式に比定される。89は紐線文系粗製土器の口縁部片である。90は紐線文が刻み列に変化したものと考えられる。91から93は帶繩文を巡らせた口縁部で、91は緩い波状を呈した波頂部だが、貼瘤を持たない。94は帶繩文間に横沈線を施している。

95～97は東北系の瘤付土器である。95・96は細い頸部の壺形になるようで、新地式と考えられる。97は口唇部に小突起を有した金剛寺式の土器と思われる。

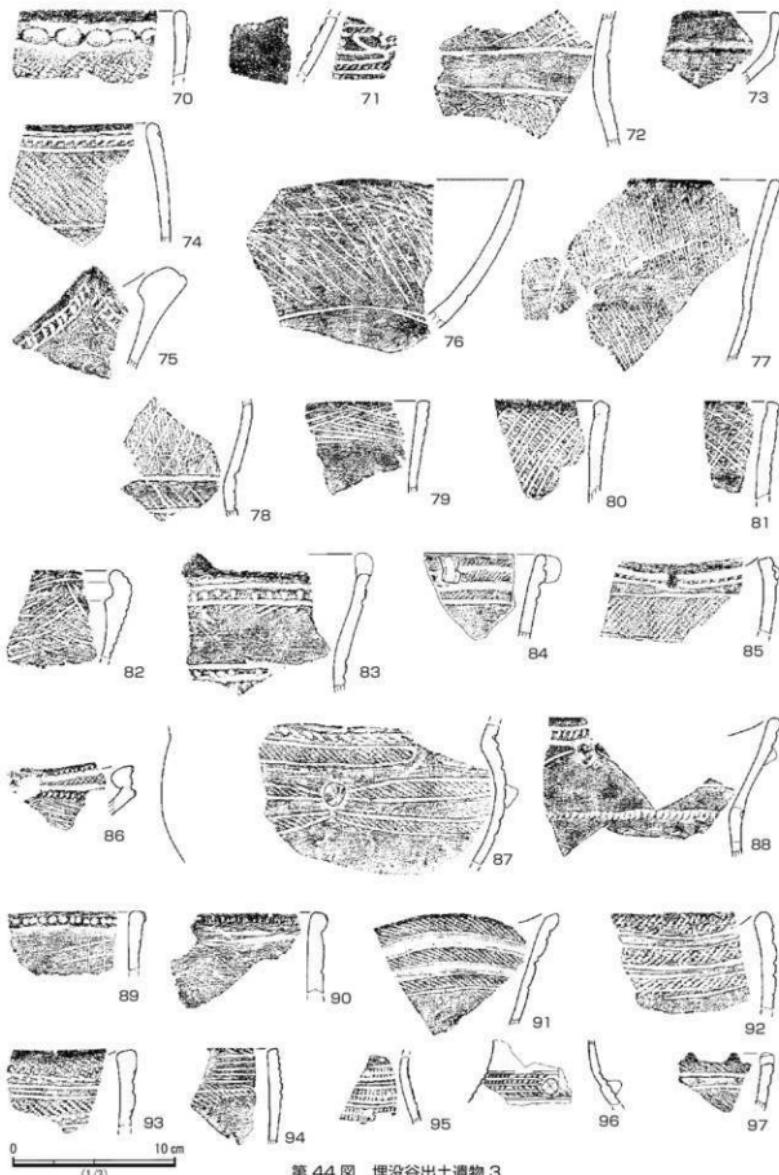
98～101は平底の底部片である。いずれも繩文時代後期の所産と考えられるが、99・100は底径が小さく、後期でも後半段階の底部であろう。

102は鉢形のミニチュアの土器、103～105は土製品である。103・104は有溝土錐で、本調査区から出土した土錐は遺構からのものを含めこの類である。106は土偶の破片で、腹部に相当し、腰部にかけて膨らむ形になる。

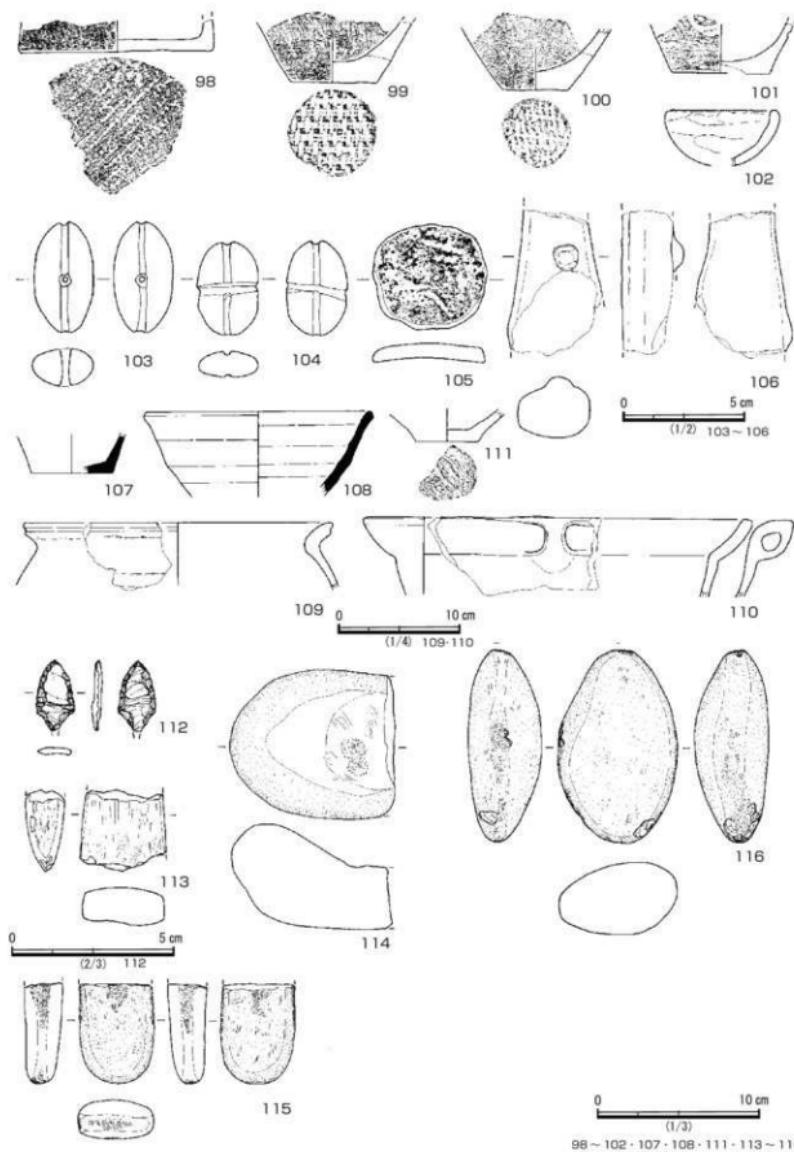
107～109は奈良・平安時代に比定される土器である。107・108は須恵器の底部片で、107は底径が非常に小さく、器形としては壺の類と思われる。チャート、黒色粒が含まれる胎土から木葉下窓産とみられる。109は土師器壺の口縁部片で、口唇部につまみ上げの技法が認められる。いずれもD4グリッドの出土であるが、この時期の土器が隣接するC4グリッドに集中しているのは、SI07との関連性があると考えられる。

110・111は中世の土器である。110は内耳土鍋の口縁部片、111はかわらけの底部片で、回転糸切り痕が認められる。

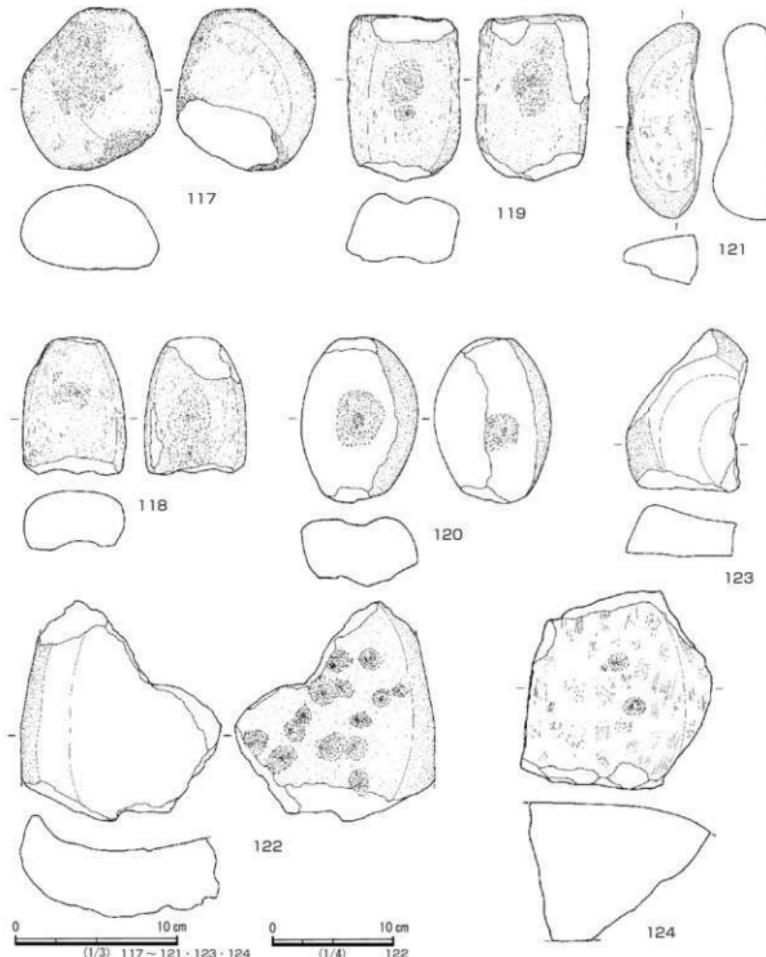
112～124は石器類である。112はチャート製の石錐、113は砂岩製の磨製石斧で、本調査区では石錐や石斧の出土量は多くはない。114～117は磨石類で、最も出土量の多い器



第44図 埋没谷出土遺物3



第45図 埋没谷出土遺物 4



第46図 埋没谷出土遺物5

種である。115～117は磨石であるが側面等に敲打痕が認められる。118～120は凹石で、118・119は磨石としても利用されていたようである。120は破砕面に敲打痕が認められる。121は砾石で、磨耗した状態から使用頻度の高さがうかがわれる。磨石としてあげた114なども同様のものかもしれない。122・123は石皿で、124は裏面に多数の凹みがあり、台石としても利用されている。123は大きさや形状から台石と考えられ、顕著な磨痕が認められる。

(高野)

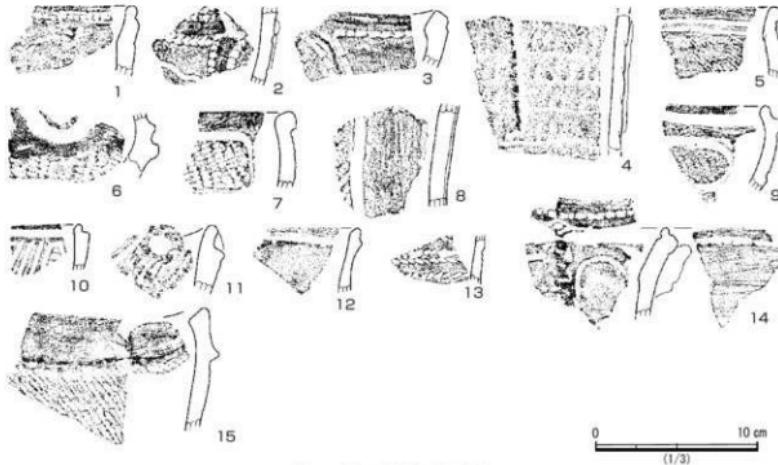
## 第6節 遺構外（第47図）

調査当初、遺構として扱っていたが、その後の調査で遺構とは認定されなかった落ち込みがあった。SX01は、検出状況から大型の土坑または竪穴状遺構と考えられたが、中央部でローム土が隆起していることがわかり、風倒木痕であると判断した。SD01は、調査区の東側では南北に走行する溝状遺構としていたが、埋設管を敷設したものと判明した。

それぞれの落ち込みには縄文時代を主体とする遺物が多く含まれていたので、ここでは縄文の遺物のみを図示する。土器は縄文時代前期から後期後半までが混在しているが、中期の出土量が多い。1～12がSX01、13～15がSD01の出土遺物である。

1～3は有節沈線が施された土器である。阿玉台I b式に比定されるが、2は有節沈線が模状になり勝坂的要素が色濃い。4はヒダ状圧痕文の胴部片で阿玉台I b～II式である。5は2条の沈線を口縁部直下に施した大木8a式の口縁部である。6～9は沈線と隆帯による区画文、沈線間を磨り出す懸垂文など加曾利E III式に帰属するもので、出土した中で最も多い型式である。10～12は口唇部外端に1条の沈線を沿わせる堀之内1式の口縁部片である。13はまばらな撚糸文を施しており、胎土などから縄文時代前期後半の浮島II式土器である。本遺跡で同時期の出土はこの埋没谷の出土を含め2点であった。14は1～3同様、有節沈線を施した阿玉台I b式の口縁部片であるが、口唇部や内面の口縁部直下にも有節沈線を沿わせる。15は口縁部を微隆線で区画した加曾利E IV式の口縁部片である。

(高野)



第47図 遺構外出土遺物

## 第IV章 総括

### 第1節 土地利用の変遷

#### 縄文時代

本地点における縄文時代の遺構は、後期を主体としていることが明らかになった。壁際に柱穴を巡らせた住居跡の形態と出土した遺物から、概ね後期前半の堀之内1式期、後期後半の加曾利B3式～安行1式期に位置付けられる。

後期前半に該当する遺構はSI02・SI06である。ともに攪乱や削平が著しいものの、炉内から良好な土器が出土したことにより該期の住居跡と判断した。ともに堀之内1式期を主体としているが、SI02には後続する堀之内2式期の土器も含まれていたため、両者間に多少の時間差が想定される。一方、後期後半に該当するのはSI01・SI03・SI04である。SI01は加曾利B3～安行1式期、SI03は加曾利B3式期、SI04は安行1式期の土器をそれぞれ主体としていた。その中でもSI01は一部が攪乱を受けている以外は遺存が良く、遺物の出土量も群を抜いている。出土した土器は、中期阿玉台Ib式から安行1式までが幅広く混在していたが、壁柱穴を伴った遺構形態から考えて、加曾利B3～安行1式の住居跡と判断される。一方、SI03・04は遺物の出土量はさほど多くはないものの、SI01同様の壁柱列を伴う形態から、本時期の住居跡とみて大過ないと考えられる。

土坑・ピットの時期は、住居跡と対比するとやや遅いようである。土坑の形態は、袋状からタライ状・円筒状へ移行する様相で、出土した土器は縄文中期後半から後期前半の加曾利E式～称名寺式期を主体としている。調査区北側の各土坑は住居跡周辺に展開しているものの、中期後半以降に台地部から桜川沿岸に広がってきたと想定され、住居跡群とは別の時期に営まれた集落跡の一部と捉えるのが適切である。一方、調査区南西側の土坑群SK21～23・28は、規模や形態、配置に規則性が認められ、大型の土器破片や礫を伴っていることから、装飾品類は出土していないものの、土坑墓であった可能性も考えられる。

これら遺構群の中にあって、調査区内では埋没谷が中央部分を占地していた。埋没土中には縄文時代の遺物が多量に含まれていたが、そのほとんどが磨耗したものばかりで、台地の上部から流入した遺物とする見方ができる。包含される遺物の時期は、縄文早期沈線文系の田戸下層式から後期安行式期までが混在し、長期間に及び徐々に堆積していった様相がうかがえる。さらに下層ほど古相の土器が主体になってくることから、縄文早期段階では比較的顕著な比高差を持った地形であったことが理解され、縄文前期～中期にかけての埋没していく過程で、周辺集落からの廃棄物が流入していったのであろう。住居跡の配置から見て、おそらくは縄文後期になども谷の名残があったため、縄文時代の居住域は埋没谷を避けるようにして展開していったことが推測される。

以上の検出状況から本地点における縄文時代の変遷過程を見ると、縄文早期には北方の台地上部にあった活動拠点から本地点の谷部分へ遺物が流れ込み、中期には2層目まで堆積が進む。その後中期後半から後期初頭にかけて台地部の土坑群が桜川流路付近まで及んできたが、後期前半になって居住域に取って代わり、後期後半に継続されていったとみられる。後期に該当する住居跡の変遷を帰属する時期からたどってみると、堀之内1式期

にSI06が出現し、SI02があまり時間を置かずに谷の対岸に現れる。その後、若干の空白時期を経て加曾利B式期後半になり、再びSI01・SI03がほぼ同時期に構築される。そしてSI04が後続していったと考えられる。

#### 奈良・平安時代以降

奈良・平安時代になって、本地点では堅穴建物跡SI07が1棟構築された。SI07の時期は、出土遺物からみると、8世紀代後半から9世紀代の須恵器も認められるが、出土した土師器坏(SI07-4・5)から10世紀後半以降に營まれていたと考えられる。建物跡は埋没谷上に構築されており、これによって少なくともこの時期には既に谷が埋没していたことが理解された。

中世には地下式坑2基が構築されている。出土した遺物から、坪遺跡第3地点で確認された遺構・遺物と様相がほぼ類似し、15世紀後半から16世紀前半にかけてのものと考えられる。本地点での中世遺構の検出数はわずかで、第3地点とはかなりの距離を有しているものの、中世における土地利用がかなり広範囲に波及したことを示唆している。(高野)

### 第2節　まとめ

坪遺跡の調査は、試掘・確認調査を合わせると今回で18地点となった。過去の調査で得られた成果から概観すると、主体となる時期は縄文時代と中世の2時期に集約され、特に縄文時代においては「縄文中期の大集落」とした評価が与えられてきた。しかし、今回行われた本地点の調査成果は、縄文時代における新たな情報を提供することになった。そのひとつは、埋没谷下層部から田戸下層式を主体とした早期の土器が出土し、坪遺跡での早期の存在が濃厚となったこと、もうひとつは坪遺跡内で空白期であった後期堀之内式期から安行1式期にかけての集落が検出されたことである。早期の遺構については今後の成果を待たなければならないが、埋没谷に流れ込んだ遺物から見て、北側の台地上部に炉穴等が存在する可能性を示唆している。一方、後期の集落はこれまで中期集落の検出地が主に標高の高い台地の上部であったのに対して、台地上部から桜川へ向けて下る傾斜地に展開していくことがわかった。これは時期が下るとともに河川近くへ移行したことを物語っている。調査区の中央部に埋没谷が検出されたこともあり、外見より複雑な地形を呈した谷部の制約を織うように營まれていたのであろう。今後の調査が進展していく中で集落形成と立地との関係も注意深く見守る必要がある。

(高野)

#### 【引用・参考文献】

- |            |      |                                                                            |
|------------|------|----------------------------------------------------------------------------|
| 井上義安       | 1985 | 『高天原』水戸市河和田町地内团地造成工事に伴う古墳および住居址・土壤の発掘調査記録<br>水戸市高天原古墳発掘調査会                 |
| 井上義安・鈴木浩子  | 1996 | 『水戸市坪遺跡』共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書<br>水戸市教育委員会・株木建設株式会社                         |
| 齋藤弘道       | 2006 | 『茨城県立歴史館書9 茨城の縄文土器』茨城県立歴史館                                                 |
| 小川将之・間口慶久他 | 2007 | 『坪遺跡(第3地点)』 <sup>2</sup> アソシエート環境建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書<br>水戸市埋蔵文化財調査報告第8集    |
| 菅谷通保       | 2008 | 水戸市教育委員会・㈱グリーンハウジング・㈱地域文化財コンサルタント<br>『曾谷式・後期安行式土器』総覽 縄文土器と小林達雄編 総アムプロモーション |
| 菅谷通保       | 2012 | 『東関東から見た西関東・中部の後期後土器の位置付け』<br>『第25回縄文セミナー』縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会          |
| 三輪孝幸・新垣清貴他 | 2007 | 『坪遺跡(第4地点)』アソシエートⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書<br>水戸市埋蔵文化財調査報告第9集水戸市教育委員会           |

第6表 出土遺物觀察表

遺構 番号	遺物 番号	種類 器種	口縁部 高さ	部位、技術、文様の特徴	断土	色調 (表面/内面)	焼成	備考	
1	圓文土器 深鉢	（6.1）	口縁部片。口唇部に小突起を有する。椎文単屈LII圓文に横縞文を施文。軽行沈縫を差し立てて横沈縫を区切る。	石英 角閃石 骨状付物少	SYB6.6 粉 SYK3/2 黒褐色	良好	加曾利B 1式		
2	圓文土器 深鉢	（5.9）	-	横縞片。頭縫は扭曲し、沈縫を巡らす。脚部文様帶は椎文圓文で、やや太めの沈縫で文様を描く。椎文圓文は单屈LII圓文。潜消部及び内面にはミガキが顕著。	白色粘 長石粒 少	SYK2/3 植理牽延/ SYK2/1 黒褐色	良好	加曾利B 2～ B 3式	
3	圓文土器 台付鉢	（12.3） （11.5）	-	台付縁の台面。残存する脚部下端には模様化して沈縫を充填。台面は無文で内面はミガキが顕著。内面はベタ状で其によるナメ圓文。能登地帯は脚部から。	長石 角閃石 白色粘	SYK4/3 にぶい赤褐色 SYK3/1 植理牽延	良好	加曾利B 2～ B 3式	
4	圓文土器 深鉢	（5.5） （5.0）	90%存。5重構の波状を有する。口唇部外縁と脚部に刻文帶。脚部には小突起の無い脚部。脚部は椎文圓文による椎文化。脚部の文様帶は单屈LII圓文で、椎文圓文は单屈LII圓文。潜消部及び内面にはミガキが顕著。	砂粒 長石粒 石英少	SYK4/3 にぶい赤褐色 SYK3/1 黑褐色	普通	加曾利B 3式		
5	圓文土器 深鉢	（6.7）	-	口縁部片。口唇部に小突起を有し、外縁に刻文帯を抱む。文様帶は椎文圓文により細出し。椎文圓文は单屈LII圓文。潜消部及び内面にはミガキが顕著。	白色粘多 石英	10Y2/1 黒/ 10Y2/1 黑	良好	加曾利B 3式	
6	圓文土器 深鉢	（5.4）	-	口縁部片。口縁部直下に刻文帯を巡らす。以下單屈LII圓文を施文。内面にはミガキが顕著。	砂粒 白色粘	7.5SYK4/2 水褐色/ 7.5SYK4/2 水褐色	良好	加曾利B 3式	
7	圓文土器 深鉢	（4.8）	-	口縁部片。口縁部直下に刻文帯を巡らす。以下單屈LII圓文を斜位に施文。	白色粘 白雲母 少	7.5SYK4/2 水褐色/ 7.5SYK4/2 水褐色	良好	加曾利B 3式	
8	圓文土器 深鉢	（2.6）	-	口縁部片。口縁部直下及び脚部に浅い沈縫を這らせる区画。口縁部は全体に無文でミガキが顕著。脚部にはキズ2例。	砂粒多 白色 長石粒	SYK4/6 赤褐色/ 7.5SYK1/1 黑褐色	良好	加曾利B 3式	
9	圓文土器 深鉢	（4.3）	-	口縁部片。口唇部は曲取りし、外縁に丸い片足を加える。無文で内外ともにミガキが顕著。	白色粘多 長石 石英	7.5SYK2/1 黑/ 7.5SYK2/1 黑	良好	加曾利B 3式	
10	圓文土器 （深鉢）	（5.2）	-	口縁部片。口唇部外縁に刻文帯。脚部に潜消部を巡らせて区画する。区画内は無文。以下斜行沈縫を充填。内面にはミガキが顕著。	石英 長石粒	7.5SYK1/1 黑褐色/ 10Y2/1 黑	良好	加曾利B 3～ 曾谷式	
11	圓文土器 鉢	（18.0） （8.0）	-	口縁部～脚部。脚部直位に2条の沈縫を併走させ。沈縫間に窓割を消す。地文は单屈LII圓文。	石英 砂粒 長 石粒	SYK3/1 黑褐色/ SYK2/1 黑褐色	良好	加曾利B 3～ 曾谷式	
12	圓文土器 深鉢	（4.5）	-	口縁部～脚部片。被覆を厚する口縁部の表面部に凹凸と複数突起を作り、脚部は刻文として椎文圓文を施す。脚部側に单屈LII圓文を充填。内面にはミガキが顕著。	砂粒 長石粒	7.5SYK4/2 水褐色/ 7.5SYK4/1 黑	良好	加曾利B 3式	
SI01	圓文土器 深鉢	（18.0） （9.2）	-	口縁部片。椎文圓文に大目的丸棒状工具側面により、横位の沈縫を充填。脚部にいたる部分で先端削除状工具で格子目状の沈縫を施す。口縁部から内面までミガキが顕著。	石英 黑小穢	7.5SYK2/1 水褐色/ 10Y3/3 墓褐色	普通	加曾利B 3～ 曾谷式	
14	圓文土器 深鉢	（8.5）	-	口縁部片。口縁部直下に2条の沈縫を巡らす。幅の狭い沈縫間に圓文が刻まれる。地文として椎文を施後方に磨り消した。	砂粒 長石粒	7.5SYK2/1 黑/ 7.5SYK2/1 黑	良好	加曾利B 3～ 曾谷式	
15	圓文土器 台付鉢	（3.5）	-	台付縁の脚部下端。地文無文で丸棒状工具側面に上る斜行沈縫を充填。	白色粘多 砂粒 石英少	7.5SYK3/2 黑褐色/ 7.5SYK3/1 黑褐色	良好	加曾利B 3～ 曾谷式	
16	圓文土器 鉢	14.0 6.6	-	丸棒。口縁部直下に2条の沈縫を巡らす。脚部下端にも1条の沈縫を巡らす。地文は單屈LII圓文で、外面全体に施文。内面にはミガキが顕著。	砂粒 小穢 角閃石小	7.5SYK4/2 水褐色/ 7.5SYK2/1 黑	普通	加曾利B 3～ 曾谷式	
17	圓文土器 深鉢	（6.6）	-	脚部～底部。脚部下端から底面にかけて、地文圓文に丸棒状工具側面による沈縫を充填。	長石 白色粘	10Y3/3 黑褐色/ 10Y4/2 水黃褐色	中性 良好	加曾利B 3～ 曾谷式	
18	圓文土器 （深鉢）	（11.0） （4.8）	-	口縁部片。無文。外反して立ち上がる。	砂粒 長石粒	7.5SYK4/1 植理/ 7.5SYK1/1 植理	中性 良好	加曾利B 3～ 曾谷式	
19	圓文土器 深鉢	（4.5） 9.4	-	底部。外縁はケズリ調整。底面は丸底状で中央に網代痕が認められる。外縁はケズリが施される。	砂粒多 白色 粘	SYK6.5 明赤褐色/ 7.5SYK3/1 黑褐色	良好	曾谷～安行I 式	
20	圓文土器 深鉢	（28.6） （29.7）	-	口縁部～脚部。口唇部外縁及び脚部にかい凹凸を加えた絆縫文を巡らす。地文は無文で斜行沈縫を斜位に施す。脚部は斜位～縦位に絆縫文を施文。	砂粒多 石英	7.5SYK4/4 にぶい黒/ 7.5SYK5/3 にぶい黒	中性 良好	安行I式	
21	圓文土器 深鉢	（30.0） （8.2）	-	口縁部片。脚部に斜位～縦位に刻文を加えた絆縫文を巡らす。地文圓文に丸棒状工具側面に横位の沈縫を充填。	石英 砂粒	SYK4/6 植理/ SYK5/4 にぶい赤褐色	良好	安行I式	
22	圓文土器 深鉢	（18.0）	-	口縁部～脚部。口唇部外縁に刻文を施す。地文は無文で斜位に施文。	長石 砂粒	7.5SYK2/1 植理/ 7.5SYK3/3 植理	良好	安行I式	
23	圓文土器 深鉢	（18.0）	-	口縁部片。口唇部外縁にミガキ跡を巡らす。地文は無文で斜位に施文。	砂粒多 白色 粘 石英少	7.5SYK3/1 黑褐色/ SYK3/2 植理牽延	良好	安行I式	
24	圓文土器 深鉢	（27.0） 4.2	-	90%存。口縁部は丸棒状工具斜位押縫によるキズ2個を有する。頭部は丸底で充填し、区画内を窓割とする。地文は無文で口縁部側はケズリ調整で斜位の細い沈縫。脚部側は斜位～縦位の絆縫文を施す。底面には施文で網代痕がある。	砂粒多 石英	7.5SYK5/4 にぶい黒/ 10Y3/3 黑褐色	普通	安行I式	
25	圓文土器 深鉢	（3.9）	-	口縁部片。地文は無文で横沈縫をまばらに施す。	石英 砂粒 白 色粘	SYK2/1 黑褐色/ 7.5SYK4/2 水褐色	良好	安行I式	

機器番号	回路番号	種類 器種	目標 高さ 底面	部品-技術-文様の特徴	加工士	色調 (外面/内面)	他成	備考
26	調文土器 深鉢	口縁部。地文は無文で横位の波線を施文。斜位の条文模を不均一に施文。	<7.0	白色粒 多 石井 砂粒	2.5YR3/1 黒樹/ 10YR4/2 灰黄樹	良好	安行 1式	
27	調文土器 深鉢	-	(16.8)	口縁部へ胴部。地文は無文で、細い枝状工具の側面を削り付いた浅い斜行沈痕。表面には口縁部から剥離した皮膚で、底面へ一度に施す。斜行沈痕は底面に楕位化部で面部を剥離する。	白色粒 多 石井 砂粒	2.5YR3/2 黑樹/ 10YR4/2 灰黄樹	やや 良好	安行 1式
28	調文土器 深鉢	(6.5)	-	口縁部。地文は無文で、丸棒状工具と側面の筋節が節たった工具を用いた平行波線を施す。斜行沈痕は底面に施す。表面には楕位のミミガがある。	白色粒 多 石井 砂粒	2.5YR3/4 布赤樹/ 2.5YR3/3 布赤樹	良好	安行 1式
29	調文土器 深鉢	(14.6)	-	胴部。頭部に楕位と斜行沈痕を施す。地文は無文でケリ調整後に楕位状工具側面によく波線を楕位に施す。	白色粒 石井少 砂粒	5YR3/2 布赤樹/ 5YR4/3 にぶい赤樹	やや 良好	安行 1式
30	調文土器 深鉢	(34.0) (15.0)	-	口縁部へ胴部。底面の広く削り立てる上からなる器形。口縁部底面では浅い波線を造らせて口縁に施す。斜行沈痕は底面に施す。	長石 麻粒少 砂粒	2.5YR4/2/灰樹/ 2.5YR3/1 黑樹	良好	安行 1式
31	調文土器 深鉢	(8.2)	-	口縁部。全体には単屈折調文を施す。内面は横位のミガキ。	粗砂粒 多 石井 微小砂	2.5YR6/4 にぶい赤樹/ 2.5YR6/2 灰樹	やや 良好	安行 1式
32	調文土器 深鉢	(5.1)	-	胴部。頭部は楕位削立を加えた絆縫文を施す。胴部は削らみ。地文は原形の物。地文を残す。	白色粒 多 石井 長石粒	2.5YR4/2 灰樹/ 10YR4/2 にぶい黒樹	普通	安行 1式
33	調文土器 深鉢	(14.3)	-	口縁部。底面を削り立てる。底面直下に4枚の条文を施す。器形は開口部で底面直下に2本單屈の底面へ下さり斜行沈痕を削り立てる。	白色粒	5YR4/2 灰樹/ 5YR3/4 布赤樹	良好	安行 1式
34	調文土器 深鉢	(6.30)	-	口縁部。底面を削り立てる器の底面。底面に斜行沈痕を削り立てる。底面直下に無文底長で底部に凹みを削り立てる。斜行沈痕は底面へ下さり斜行沈痕を削り立てる。斜行沈痕は底面へ下さり削立てる。	白色粒 長石粒	5YR3/3 布赤樹/ 5YR3/1 黑樹	良好	安行 1式
35	調文土器 深鉢	(20.0) (10.5)	-	口縁部。底面を削り立てる。底面直下に4枚の条文を施す。器形は開口部で底面直下に4枚の条文を削り立てる。頭部は削立調文で、通透文間に斜行工具側面を用いた楕位の削立を施す。	白色粒 長石粒 石英少	2.5YR3/1 黑樹/ 2.5YR3/2 黑樹	良好	安行 1式
36	調文土器 深鉢	(7.7)	-	口縁部。底面を削り立てる器の底面。底面に複列の帶文を施す。底面直下に無文底長で底部に凹みを削り立てる。斜行沈痕は底面へ下さり削立てる。	長石粒 麻粒少 砂粒	2.5YR3/3 布赤樹/ 2.5YR3/1 黑樹	良好	安行 1式
37	調文土器 深鉢	(7.1)	-	胴部。頭部に複列の削立調文を施す。胴部には矢羽根状斜彎文を充填。土面上には削立調文を施す。	白色粒 長石粒 粗砂粒	5YR3/3 布赤樹/ 5YR3/3 にぶい赤樹	やや 良好	安行 1式
38	調文土器 深鉢	(5.7)	-	頭部延。口縁部に削立調文を施す。以下、弦状の条文を先に削立。底面を削る。頭部に2列の斜行削立を施す。土面上には单屈調文を施す。	長石粒 多 砂粒	2.5YR2/2 布赤樹/ 5YR3/1 黑樹	良好	安行 1式
39	調文土器 深鉢	(5.8)	-	頭部延。頭部に2本單屈の底面を削立。同じ頭部へ胴部へ下さす。削立の交点上には円形削立を施す。頭部は削立調文で単屈調文を施す。	角閃石 長石粒 砂粒少	2.5YR2/2 灰樹/ 2.5YR3/3 布赤樹	普通	安行 1式
40	調文土器 深鉢	(14.0) (14.6) (3.8)	90%削立。口縁部を削立し、底面に無文底長の削立を上へ削す。頭部は2本單屈の底面を削立。頭部に削立後には斜行削立を削り立てる。文様部は削立調文で横位の削立。頭部には削立させた後は削立。頭部は削立調文で上半部は通透斜彎文。下半部は2枚のみの文様。底文調文は単屈調文。底文は削立調文を削り立てる。	白色粒 多 砂粒 石英少	2.5YR4/6 明赤樹/ 2.5YR4/4 にぶい赤樹	良好	安行 1式	
41	調文土器 深鉢	(27.4) (19.9)	-	口縁部へ胴部。口縁部直下に2枚单屈を削立。無文底長の削立を削り付ける。頭部にやや削立の条文を削立す。文様部は削立調文で斜縫部は削立調文。頭部は削立で人字文を削立。頭部の斜縫部を削立。頭部には削立させた後は削立。頭部は削立調文で上半部は通透斜彎文。下半部は2枚のみの文様。底文調文は単屈調文。	白色粒 砂粒 石英少	2.5YR4/6 布赤樹/ 2.5YR4/4 にぶい赤樹	良好	安行 1式
42	調文土器 深鉢	(27.2) (21.8)	-	口縫へ胴部。口縫部直下に2枚单屈を削立。無文底長の削立を削り付ける。頭部にやや削立の条文を削立す。文様部は削立調文で斜縫部は削立調文。頭部は削立で人字文を削立。頭部の斜縫部を削立。頭部には削立させた後は削立。頭部は削立調文で上半部は通透斜彎文。下半部は2枚のみの文様。底文調文は単屈調文。	白色粒 砂粒	5YR5/6 明赤樹/ 5YR5/4 にぶい赤樹	普通	安行 1式
43	調文土器 深鉢	(24.0) (26.9)	-	口縫へ胴部。口縫部直下に2枚单屈を削立。削立後は斜行削立を削り立てる。削立調文は削立調文で横位の削立。頭部には削立させた後は削立。頭部は削立調文で上半部は通透斜彎文。下半部は2枚のみの文様。底文調文は削立調文で上半部は通透斜彎文。	白色粒 砂粒	2.5YR4/2 灰樹/ 10YR4/2 灰黃樹	普通	安行 1式
44	調文土器 深鉢	(10.1)	-	口縫へ胴部。口縫部直下に2枚单屈を削立。無文底長の削立を削り立てる。削立調文は削立調文で横位の削立。頭部には削立させた後は削立。頭部は削立調文で上半部は通透斜彎文。下半部は2枚のみの文様。底文調文は削立調文で上半部は通透斜彎文。	白色粒 長石粒 骨状伏物質微	2.5YR3/2 黑樹/ 5YR3/4 布赤樹	良好	安行 1式
45	調文土器 深鉢	(3.6)	-	口縫部。口縫部に削立調文を施す。削立直下に剥離剝離を加える。削立調文間は3枚の削立を先に削立。削立調文は单屈調文。	長石 石英	5YR3/6 布赤樹/ 5YR3/4 布赤樹	良好	安行 1式
46	調文土器 深鉢	(5.6)	-	胴部延。削立を下さる。削立部の裏面は無文底長の削立が認められるが、削立による区画はない。無文底長は单屈調文。	粗砂粒 多 砂粒 微小砂	10YR3/1 黑樹/ 10YR3/2 黑樹	普通	安行 1式
47	調文土器 深鉢	(16.6)	-	頭部延。頭部に幅の狭い削立調文を施す。文様は削立調文により底度率の高い互通孔斜彎文。	白色粒 白雲母 骨状伏物質	2.5YR2/2 灰樹/ 2.5YR3/1 黑樹	やや 良好	安行 1式
48	調文土器 深鉢	(8.3)	-	頭部延。削立文で互通孔斜彎文を傾く。底文調文は单屈調文。	砂粒 長石粒	2.5YR3/2 布赤樹/ 2.5YR3/1 黑樹	良好	安行 1式
49	調文土器 深鉢	(9.4)	-	頭部延。削立に削立文を削立す。文様部は削立調文で文様を描く。底文調文は单屈調文。	白色粒 砂粒	5YR4/4 布赤樹/ 5YR4/4 にぶい赤樹	良好	安行 1式

品種番号	固有番号	種類 器種	器體 器高 底座	部位・技術・文様の特徴	断土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
50	調文土器 深鉢	—	(11.1)	胴部底。胴部に刻文帯を沿らす。胴部文様は唐消調文で捺印状入組文を描出す。箋文調文は單面印調文。	白色粘 粗砂粒	7.5W3/3 墨黒/ 10TR3/2 黒鶴	良好	安行1式
51	調文土器 深鉢	(2.8)	4.2	胴部底。底文は单面印調文を施す。胴部下端は無文とし、細位のミガキ。底面は無文。	粗砂粒 長石粒	SYB5/6 明赤鶴/ SYB5/3 墨赤鶴	良好	安行1式
52	調文土器 深鉢	(6.5)	—	口縁部底。口縁部外端は無文の隆筋が走り、下端に細かい刻文帯を沿わせる。以下、深い朱墨文を認める。	石英 白色粘 長石粒	7.5W2/2 黒鶴/ 10TR3/2 黑鶴	良好	安行1式
53	調文土器 台付鉢	(25.2)	(19.1)	口縁部～胴部。外縁の口縁部底は無文で、ケズリ調整後えギヤ。頭部は2本4枚の波状文を寄せ、大きく張り出す脚部は、最長径を持つ部分に調文を添付する。頭部から脚部間には唐消調文で、2本4枚の沈文が並ぶ。以下、底文は单面印調文を施す。頭部下は斜状の条文充文と、箋文調文は单面印調文。	白色粘 長石粒 石英少	7.5W3/2 黒鶴/ 7.5W3/3 墨黒	普通	安行1式
54	調文土器 鉢	(4.15)	—	口縁部底。口縁部底は内傾し、沈墨の区画で、区画内には無文とする。外縁は星彌足にキザキを加える。以下、単面印JER調文を施す。	長石 白色粘	SYB6/6 橙/ SYB5/4 ぶい赤鶴	普通	安行1式
55	調文土器 深鉢	(8.2)	—	口縁部底。横1字を引する。口縁部底には無文とし、口縁部底上には取り出るより無文部が認める。以下、底文は单面印調文を施す。	白絹多 砂粒 角閃石少	SYB3/3 墨赤鶴/ 7.5W3/2 黒鶴	やや 良好	安行1式
56	調文土器 深鉢	(23.5)	(9.0)	口縁部底。口縁部底には無文とし、口縁部底上には有筋状沈文。下端には沈線を沿わせる。文様は单面印調文で、單題印調文を施す。	砂粒 白色粘少	7.5W3/2 黒鶴/ 7.5W3/4 墨黒	良好	安行1式
57	調文土器 深鉢	(10.7)	—	口縁部底。瓶形を呈する認定。口縁部外端にはギヤを刻み、口縁部底上に刻文帯を添付。文様は唐消調文で五連飾充填文を施す。箋文調文は单面印調文を施す。穿孔有り。	砂粒 長石粒 白色粘少	7.5W4/3 橙/ 7.5W3/2 黑鶴	良好	安行1式
58	調文土器 鉢	(4.5)	—	口縁部底。口縁部に細くギヤを加える。底文は細い原体を用いた單題印調文。	角閃石 白色粘	7.5W3/6 橙/ 7.5W3/3 ぶい赤鶴	普通	後期後半
59	調文土器 深鉢	(6.5)	—	口縁部底。口縁部底直下に段を持つ。段以下はケズリによる調整。口縁部底直下から内面はミガキが顕著。	白色粘 粗砂粒	7.5W3/2 黒鶴/ 7.5W2/2 黑鶴	良好	加曾利B 2式
60	調文土器 台付鉢?	(1.9) (7.6)	—	底部片。台付鉢・台部の底部か、底面に調刻痕。	砂粒多 石英少 微小繊少	10TR4/2 深黄鶴/ 10TR4/1 黒鶴	普通	後期後半
61	調文土器 深鉢	(9.3)	—	口縁部底片。口縁部底直下に双頭丸か、口縁底には有筋状沈線が応じる。砂粒付粘土から揉混がされ、表面には有筋状沈線を認める。	砂粒 白色粘 長石粒	7.5W3/4 ぶい赤鶴/ 7.5W3/4 暗赤鶴	普通	阿玉台1b
62	調文土器 深鉢	(4.0)	—	口縁部底。口縁部は棒状工具による押捺。口縁部底直下の内外面ともに有筋状沈線で区画す。	白色粘 長石粒 黑雲母少	7.5W4/2 暗鶴/ SYB5/6 明赤鶴	普通	阿玉台1b
63	調文土器 深鉢	(6.6)	—	口縁部底。片状把手が施された部分をギザミを加えた捺帶で区画し、区画内には有筋状沈線を形成。区画内部分は单題印調文を施す。口縁部底直下に單題印調文を施す。	長石 石英 砂 粘 熟小繊	SYB3/3 墨赤鶴/ SYB4/3 ぶい赤鶴	普通	阿玉台1b~ II
64	調文土器 深鉢	(5.5)	—	口縁部片。口縁部には小突起を持ち、口縁部は捺帶と沈線による単題印文と(4)調文を施す。区画内には单題印調文を施す。表面には有筋状沈線が模様化し、左側に段位に施す。	長石 石英 金 雲母	7.5W3/2 黒鶴/ 7.5W4/3 橙	良好	加曾利E B式
65	調文土器 深鉢	(16.3)	—	口縁部片。口縁部底にはギヤを施す。口縁部は捺帶と沈線で区画文を作成。捺帶は本の沈線を走らした結果で沈線間を繋ぎ通す。捺帶は單題印調文で区画化する。捺帶は段位に施す。	石英 角閃石 微小繊	7.5W3/6 橙/ 7.5W3/4 ぶい赤鶴	やや 良好	加曾利E 直B式
66	調文土器 深鉢	(6.1)	—	口縁部底片。沈墨による区画文を施す。口縁部底直下と沈線間は擦り消す。区画内調文は单題印調文を複数に施す。	長石 角閃石 砂粒	7.5W3/3 ぶい赤鶴/ 7.5W4/4 ぶい赤鶴	やや 良好	加曾利E 直B式
67	調文土器 深鉢	(5.5)	—	口縁部底片。口縁部底直下は單題印調文を複数に施す。以下捺壓状工具による捺壓文を施す。内面は墨が跡を残す。	白色粘多 砂粒	7.5W3/4 ぶい赤鶴/ 10TR4/2 深黄鶴	良好	加曾利E 直B式
68	調文土器 深鉢	(9.0)	—	胴部片。2本の沈線を垂下させた點状文で、沈線間に擦り消す。地文は段位の單題印調文を施す。	長石粒 石英少 骨針条物質少	7.5W3/4 深黄鶴/ 7.5W3/4 ぶい赤鶴	やや 良好	加曾利E 直B式
69	調文土器 深鉢	(3.0)	—	胴部片。2本の沈線で曲線で曲線的な文様を描く。地文はやや太目の原体で、单題印調文を複数に施す。	石英 白色粘少	7.5W3/2 深黄鶴/ 10TR4/4 ぶい黄鶴	やや 良好	加曾利E 直B式
70	調文土器 深鉢	(22.7)	—	口縁部～胴部。胴部に捺壓痕で曲線的な区画文を描く。地文は单題印調文を複数に施す。	石英多 白色粘	SYB4/3 ぶい赤鶴/ 7.5W4/2 暗赤鶴	普通	加曾利E 直B式
71	調文土器 深鉢	(6.3)	—	口縁部片。口縁部内面から外面向にかけて、集合沈線による連弧文を充填した後に捺帶を走らせる。内部の口縁部底直下には突窓を認める。	石英多 砂粒 白色粘 熟小繊	2.5W4/4 ぶい赤鶴/ 2.5W5/6 明赤鶴	普通	曾利II式
72	調文土器 深鉢	(6.1)	—	口縁部片。口縁部に円筒文を型取る突出部。凸縁で文様を描き、沈線内に单題印調文を充填。	白色粘少 黑色 砂粒	7.5W2/6 橙/ 7.5W2/6 橙	普通	(続)加曾利E IV式
73	調文土器 深鉢	(4.0)	—	口縁部片。口縁部底直下に押捺を加えた捺帶を認むせ区画する。区画内には扁平の捺帶を貼り付ける。	砂粒 白色粘 長石粒	7.5W2/6 橙/ 7.5W3/3 ぶい赤鶴	普通	称名寺I式
74	調文土器 深鉢	(6.6)	—	口縁部片。口縁部底直下に押捺を加えた捺帶を認むせ区画する。区画内には扁平の捺帶を貼り付ける。	角閃石 砂粒 白色粘	10TR6/3 ぶい黄鶴/ 10TR4/2 深黄鶴	普通	鋼取I式

遺構番号	図版番号	種類 器種	口縁 部高さ 延長	断面・技法・文様の特徴	施土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
	75	圓文土器 (深鉢)	(4.1)	口縁部片。口縁部外端に沈線を沿わせる。地文單題LH圓文に沈線で文様を描く。	石英 白色粘	10YR6/4 に赤褐色 /7.5YR5/4 黄褐色	普通	腹之内1式
	76	圓文土器 (深鉢)	(5.5)	口縁部片。地文單題LH圓文に沈線を施させせる。	粗砂粒 白色粘	5YR5.6 明赤褐色 /7.5YR5/4 に赤褐色	普通	腹之内1式
	77	圓文土器 (深鉢)	(6.1)	口縁部片。半載竹管状工具による細い沈線で弧線状の文様を描く。地文は無題圓文。	白砂多 石英	7.5YR5/4 に赤褐色 /7.5YR5/4 黄褐色	普通	腹之内1~2式
	78	圓文土器 (深鉢)	(4.6)	口縁部片。口縁部底面に、指頭押捺を加えた太目の粗縞文を落す。地文は半載竹管状工具による平行沈線を横走させる。内面の口縁部底面には太目の沈線を落す。穿孔有り。	粗砂粒多 白色粘	7.5YR5/4 に赤褐色 /7.5YR5/4 黄褐色	良好	腹之内2式
	79	圓文土器 (深鉢)	(5.0)	口縁部片。外側には單題LH圓文を全体に施す。内面口縁部底面には沈線を落す。	白色粘 多 粗砂粒	10YR3/1 黑褐色 /10YR5/3 に赤褐色	普通	腹之内2式
	80	圓文土器 (深鉢)	(8.5) 9.8	底盤片。脚部下端は張り出す。底面は周縁をナゲ調整。	石英 白色粘 長石粒	7.5YR4/2 灰褐色 /10YR1/7 黑	普通	腹之内1~2式
S101	81	土製品 円盤	長さ：4.3 幅：4.4 厚さ：1.0 重量：20.1g	表面半分削除。單題LH圓文。	砂砂多	10YR3/1 黑褐色 /10YR5/2 黄褐色	普通	後期後半？
	82	石器 石器	長さ：2.5 幅：1.4 厚さ：0.4 重量：1.3g	石材：メノウ 凸基有茎石器。舌部欠損。側縁は若干丸味を伴つ。				
	83	石器 石器	長さ：2.3 幅：0.1 厚さ：0.3 重量：1.0g	石材：真目 凸基有茎石器。先端部及び舌部欠損。舌部両端は浅い凹入り。				
	84	石器 石器	長さ：2.1 幅：0.9 厚さ：0.3 重量：0.6g	石材：チャート 充形、凸基有茎石器。舌部両側を削り出す。				
	85	石器 石器	長さ：2.5 幅：1.4 厚さ：0.3 重量：0.7g	石材：チャート 凸基無茎石器。鋭利な先端に向て側縁がむしむ。舌部は深い凹入り。				
	86	石器 石器	長さ：3.8 幅：1.0 厚さ：0.8 重量：2.2g	石材：真目 先端の舌部欠損。脚部を長く作出す。				
	87	石器 磨製石斧	長さ：7.4 幅：3.5 厚さ：1.4 重量：56.1g	石材：砂岩 刃部の一端が欠損。頭部には敲打による剝離。全体によく磨かれ。刃部は锐利に作出。				
	88	石器 石器	長さ：8.7 幅：7.6 厚さ：6.7 重量：723.9g	石材：砂岩 底部は浅い磨り面。側面には敲打による凹み有。被熱。				
	89	石器 磨石	長さ：9.9 幅：8.9 厚さ：7.2 重量：786.6g	石材：砂岩 両端部及び側面一部に磨り面。両端の磨り顕著。側面(注)ほぼ全面に磨打痕。被熱。				
	90	石器 石器	長さ：9.1 幅：7.3 厚さ：5.6 重量：435.9g	石材：砂岩 端部磨り顕著。全体によく磨かれる。被熱。				
	91	石器 石器	長さ：11.1 幅：8.2 厚さ：7.9 重量：611.6g	石材：安山岩 鋸削形の石棒底部。全体に被熱するが先端部の一部のみ被熱が認められない。先端部に2本の剝離を平行に造らすが、一部が擦り落される。				埋設SC2-1 出土接合
	92	石器 石器	長さ：31.0 幅：15.2 厚さ：13.0 重量：7,770.0g	石材：砂岩 彈性形した大型の石棒底部。滑沢面にも磨痕有り。凹み2つ所が認められる。被熱強。				
S102	1	圓文土器 (鉢)	15.8 10.6 5.2	ほぼ完形。2条単位の平行沈線により直線的な文様を抽出。地文は単題LH圓文を真方向へ施す。側面に凹なり見れている。	石英 無小繊多 砂砂多	7.5YR6/6 黑褐色 /7.5YR5/4 に赤褐色	普通	腹之内1式
	2	圓文土器 (深鉢)	(5.0)	口縁部片。外側全体に太い脚部の単題LH圓文を施す。	石英 長石 白色粘	7.5YR6/4 に赤褐色 /7.5YR5/4 に赤褐色	やや 良好	腹之内1式
	3	圓文土器 (深鉢)	(6.0)	口縁部片。外側に太い脚部の単題LH圓文を施す。口唇部及び内側の口縁部底面には沈線を落す。	長石 白色粘 回向6微	7.5YR6/4 に赤褐色 /7.5YR5/4 に赤褐色	やや 良好	腹之内2式
	4	圓文土器 (深鉢)	(4.5)	口縁部片。口縁部底面に楕円の細い沈線を密に集す。内面口縁部底面には滑りの沈線を落す。	白色粘 無小繊少	7.5YR1/7.1 黑褐色 /7.5YR4/2 灰褐色	良好	腹之内2式
	5	圓文土器 (深鉢)	(7.9)	脚部片。半載竹管状工具により幾何状の文様を描出。地文は粗い原体の圓文。	粗砂粒 白色粘	5YR4/2 黑褐色 /5YR4/3 に赤褐色	普通	腹之内2式
	6	圓文土器 (深鉢)	(3.5)	口縁部片。口縁部底面に粗縞文。以下斜行沈線を施す。地文は不明。	砂砂粒 白色粘少 長石散	10YR6/3 に赤褐色 /10YR4/1 黑褐色	普通	加曾利B 1式 前段
	7	圓文土器 (深鉢)	(2.8)	口縁部片。内溝気味の口縁部底面に太い沈線を落す。以下單題LH圓文を施す。	粗砂粒 白色粘	5YR4/3 に赤褐色	良好	加曾利C 1式
	8	圓文土器 (深鉢)	(3.4)	口縁部片。口縁部底面に2条の沈線を落らせ。以下單題LH圓文を施す。内面はよくミガキがかかる。	砂砂粒 無小繊少	10YR1/3 黑褐色 /10YR1/7 黑褐色	良好	加曾利B 3式
	9	圓文土器 (深鉢)	(3.1)	口縁部片。やや状態を呈する。口縁部底面に刻文部を落す。以下單題LH圓文を施す。	粗砂粒 白色粘	10YR3/1 黑褐色 /10YR3/1 黑褐色	良好	加曾利B 3式

登録 番号	画面 番号	種類 器種	目録 器高 度	部位・技法・文様の特徴	断土	色調 (外面/内面)	地成	備考
SI02	10	圓文土器 深鉢	(3.6) -	銅部片。沿曲部に幅狭の沈線区画を施し、上部は磨り消す。区画文以下は單題LE調文を施す。	細砂粒 微小織 少 良石粒	7.5W4/2 黄褐色 10H2/1 黑	良好	加曾利B3式
	11	圓文土器 深鉢	(2.6) (6.4)	底部片。内外面ともにミガキがかかる。	粗砂粒 多 白色 粒	5W3/3 青赤褐色 5W3/2 増赤褐色	良好	後期前半
	12	土製品 有底土鉢	長さ: 4.4 幅: 2.8 厚さ: 1.5 重さ: 18.4g	表面全面に斜方方向に溝を施す。	石英多 長石 石英多	7.5S6/6 細 7.5S3/3 増褐色	普通	後期?
SI03	1	圓文土器 深鉢	(7.1) -	口縁部。口縁部に小突起を有する。文様は矢羽根状沈線を充填するが単題文。頭部は沈線で区画し、無文帶とする。	粗砂粒 長石粒	10W5/2 黄褐色 10W4/1 黑灰	やや 良好	加曾利B2式
	2	圓文土器 深鉢	(5.0) -	口縁部、底部を呈する口縁部。口縁部底面に刻文帯をむかす。以下地文無文に斜行沈線を施す。	白色粒 砂粒 石英少	10W1/1 黑 10W1/1 黑	良好	加曾利B3式
	3	圓文土器 深鉢	(3.0) -	口縁部片。地文無文に細い沈線を斜方に施す。	長石 細砂粒	10W3/1 黑褐色 10H2/2 黑褐色	やや 良好	加曾利B3式
SI03	4	圓文土器 台付鉢	(4.6) -	銅部片。屈曲部にサザミを加え、地文無文に斜行沈線を充填する。	砂粒 白色粒	7.5W3/1 増褐色 5W3/1 増褐色	良好	加曾利B3式
	5	圓文土器 深鉢	(3.5) -	銅部片。地文無文に左上→右下→右上→左下の船形格子目状の沈線を施す。	砂粒多	5W3/3 増赤褐色 5W2/1 黑褐色	良好	加曾利B3式
	6	圓文土器 深鉢	(10.3) 4.2	銅部→底部、外表面は巻位のミガキがかかる。	砂粒多 白色粒	7.5W3/7 にぶい黒 7.5W1/1 黑褐色	良好	加曾利B2式?
SI04	7	圓文土器 深鉢	(2.7) (3.0)	底部片。底面に銅代板。	長石 細砂粒	7.5W4/2 黄褐色 10H3/1 黑褐色	良好	後期後半
	1	圓文土器 深鉢	(2.4) -	口縁部片。口縁部底面に刻文帯を施す。以下單題LE調文を施す。	長石 角閃石 白色粒	7.5W4/2 黄褐色 7.4W3/3 増褐色	良好	P3出土 加曾利B3式
	2	圓文土器 深鉢	(3.9) -	銅部片。地文單題LE調文に横沈線を施す。	石英多 砂粒	5W3/1 黑褐色 7.5W1/1 黑褐色	やや 良好	加曾利B2式
SI04	3	圓文土器 深鉢	(6.1) -	銅部片。底部を呈する口縁部に沿って横沈線を施したものとみられる。单題調文には底面をむかせ、頭部下から2本の沈線を垂下させる。地文調文は單題組。	石英 砂粒	5W2/1 黑褐色 5W3/1 黑褐色	良好	安行1式
	4	圓文土器 深鉢	(5.1) -	銅部片。条状列を斜位に施す。垂下させた2条の沈線を垂り消す。	白色粒 細砂粒	7.5W3/2 黑褐色 10H3/2 黑褐色	良好	安行1式
	5	圓文土器 深鉢	(2.9) -	銅部片。刻文列を垂らせ、丸棒状工具による斜行沈線を施す。刻文列を境に異方向に施す文。	砂粒多	7.5W4/2 黄褐色 10H3/2 黑褐色	良好	P5出土 安行1式
SI06	1	圓文土器 深鉢	(3.8) (24.3)	口縁部へ銅部。口縁部外縁から沈線化のむき、円周刻定文を施した小突起を有する。地文は圓文。伊の被熱により崩くなっている。	石英多 微小織 長石	10W6/4 にぶい黄褐色 7.5H7/6 棕	普通	縦之内1式
	2	圓文土器 深鉢	(3.2) -	口縁部片。口縁部外縁に沈線をむかせ小突起を有する。地文は單題組調文に沈線で文様を描出す。	白色粒多 石英	10H4/1 黑褐色 -/	普通	縦之内1式
	3	圓文土器 深鉢	(2.5) -	銅部片。沈線による圓文。区画内は斜位の集合沈線。地文は圓文。	長石 細砂粒	10H3/1 黑褐色 10H2/6 明黃褐色	普通	縦之内1式
	4	圓文土器 深鉢	(3.9) -	銅部片。刺突列を垂下させる。地文は横位の單題LE調文。	粗砂粒 微小織 少	10H3/2 黑褐色 10H6/4 にぶい黄褐色	普通	縦之内1式
	5	圓文土器 深鉢	(3.5) -	銅部片。沈線及び蛇行沈線を垂下させる。地文は單題LE調文。	白色粒多 石英 粗砂粒	7.5H4/6 細 10H5/4 にぶい黄褐色	普通	縦之内1式
	6	圓文土器 深鉢	(10.5) 11.2	銅部→底部。器面全体にミガキがかかる。	粗砂粒多	10H4/2 黄褐色 10H2/1 黑褐色	普通	縦之内1式
	7	圓文土器 深鉢	(2.5) (10.2)	底部片。外縁はミガキ。内縁はヘラ状工具による調整。底面は銅代板。掌割跡有。	粗砂粒多 長石 赤色スコリア	5W4/6 青褐色 5W5/6 明赤褐色	普通	縦之内1式
	8	圓文土器 深鉢	(6.6) -	銅部片。4本単位の彌衝工具による条縞文を施す。	石英 微小織 白色粒 角閃石	7.5W7/6 細 10H5/2 黄褐色	普通	後期前半
	9	圓文土器 深鉢	(2.3) -	口縁部片。縫合継帶を貼り付け文様を描出す。地文は横位の單題LE調文。	粗砂粒多	7.5H3/4 にぶい黄褐色 7.5W6/4 にぶい黄褐色	普通	大木B4式
	10	圓文土器 深鉢	(4.7) -	G縫合部片。横調文を連ねさせた後、横位の沈線を密に施す。連弧文系土器。	白色粒 細砂粒	10H6/4 にぶい黄褐色 10H6/6 明黃褐色	良好	中期後半
	11	圓文土器 深鉢	(5.1) -	G縫合部片。沈線による圓文。口縁部底面は円形刺突文を充填。区画内には展位の單題組調文。連弧文系土器。	粗砂粒多 白色 粒	10H6/4 にぶい黄褐色 10H2/1 黑	普通	加曾利B2式
	12	石器 多孔石	長さ: 21.1 幅: 16.0 厚さ: 11.9 重さ: 6,110.0g 石材: 砂岩 室内出土。被熱強。孔の数が少ない面の回みは浅く、使用頻度が少ないとみられる。	-	-	-	-	-

造構 番号	図版 番号	種類 器種	口径 高さ 直径	断面・技法・文様の特徴	出土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
S106	13	石皿・多孔 石	長さ：21.2 幅：11.35 厚さ：5.5 重さ：1,780.0g 石材：砂岩 6cm内外。被熱強。表面両面に底部があるが、磨削は既者ではない。敲打による凹みも浅めのもの。	—	—	—	—	—
S107	1	直底器 片	(1.8) (9.0)	底盤片。ロクロ成形。底面下端は無調整。底面は回転へラケズりか。	チャート 背斜 物質	2.5V5/1 黄灰／ 2.5V5/2 青灰	焼成未 定	9世紀代？
	2	直底器 片	(3.3)	底盤片。ヨコナナ。外面底盤及び内面白縁部に自然釉付着。	チャート	5V4/1 黄／ 5V4/1 黄	焼成未 定	9世紀代？
	3	直底器 片	(6.0) (16.0)	底部片。編み成形底ナナ調整。高台は貼り付け後ナナ調整。	石英 チャート 骨質物質	2.5V5/4 にぶい赤 鉛／5V4/2 黄灰	焼成未 定	9世紀代後半
	4	土師器 片	(14.0) 5.2 6.4	40%存。ロクロ成形。底部下端は無調整。底面は回転へ切り後無調	チャート 背斜 物質	10V4/4 にぶい黄鉛 鉛／7.5V6/4 にぶい 鉛	焼成未 定	10世紀代後半
	5	土師器 片	13.9 3.2 —	70%存。ロクロ成形。内面へラナナ。底面回転へ切り。内面黒色化	石英多 黒色和 長石	5V4/6 黑褐色 2.5V2/1 黑	焼成未 定	10世紀代後半
	6	土師器 片	(13.0) (3.5)	口縁部片。ロクロ成形。	長石 黒色化	10V4/2 反黄鉛 鉛／10V4/3 にぶい黄鉛	焼成未 定	10世紀代？
	7	土師器 片	(0.7) (8.0)	底盤片。底盤下端及び底面ともに回転へラケズリ調整。内面黒色処理。	長石 石英少	10V6/4 にぶい黄鉛 鉛／7.5V2/1 黑	焼成未 定	9世紀代？
	8	土師器 片	(16.0) (6.5)	口縁部片。口唇部をつまみ上げ調整。口縁部及び内面ナナ。	石英 角閃石	10V6/6 暗 10V7/4 にぶい黄鉛	焼成未 定	9世紀代？
SK01	1	画文土器 底盤	(2.5)	口縁部片。口縁部底面に手轍竹管状工具による押引で爪形文を施す。	長石 角閃石	2.5V0/7 暗 2.5V5/6 明鉛	やや 良好	諸説あり
	2	画文土器 底盤	(3.5)	口縁部片。口縁部底面に陰帯でIC画。区画内は縦線の單屈B調文。	長石 砂較少	10V4/2 反黄鉛 鉛／10V6/4 にぶい黄鉛	普通	加曾利E II～ III式
	3	画文土器 底盤	(3.3)	脚部片。脚筋による区画文。区画内は横模の單屈B調文を施す。	石英多 砂粘	10V3/1 黑鐵 2.5V4/3 黑	普通	加曾利E III式
	4	画文土器 底盤	(7.7)	脚部片。地文は縦筋の單屈B調文で下半をナナ消す。	長石 金雲母 砂紅	10V6/4 にぶい黄鉛 鉛／10V3/1 黑鐵	普通	加曾利E III式
SK05	5	画文土器 底盤	(6.1)	口縁部片。口縁部に沈線を這らせる区画し。口縁部底面は無文。区画下は單屈B調文を横位へ斜位に施す。	砂粘多 熟小纖 少	7.5V4/2 反鉛 鉛／7.5V6/4 にぶい	普通	件名寺 I 式
	6	画文土器 底盤	(7.5)	口縁部片。沈線による区画文で文様を描出。口縁部底面は無文とし。区 画下には單屈B調文を施す。	石英少 熟小纖 少	7.5V5/4 にぶい 鉛／7.5V6/6 暗	普通	件名寺 I 式
	7	画文土器 底盤	(3.8)	口縁部片。沈線による区画文を施す。口縁部底面は反互刻文。以下底 盤上には單屈B調文を施す。	石英 砂	10V4/2 反黄 鉛／10V5/4 にぶい黄鉛	普通	加曾利E III式
	8	画文土器 底盤	(4.5)	口縁部片。沈線を2本垂下させ。沈線間に懸垂消す點彫。地文は縦筋 の單屈B調文。	砂粘 長石粘 微小纖少	7.5V4/2 暗鉛 鉛／10V5/5 にぶい黄鉛	普通	加曾利E III式
SK06	9	脊生土器 底	(5.4)	脚部片。筋肋を持つ無頭B調文を間隔を空けて横位に施す。	砂粘多 熟小纖 少	7.5V5/3 にぶい 鉛／7.5V5/4 にぶい 黄鉛	やや 良好	脊生後期
	10	画文土器 底盤	(7.5)	口縁部片。曲線的な捺差えで文様を描出。地文は單屈組調文で捺差施す 間に一滴頭消す。	石英多 熟母 長石	10V4/1 黑鐵 鉛／10V6/3 にぶい黄鉛	普通	加曾利E III式
SK08	11	画文土器 底盤	(6.2)	脚部片。沈線による区画文。区画内には单屈組調文を充填。微細複文 点線上に突出部を設ける。	石英多 熟母 長石	5V4/6 熟母 2.5V6/4 にぶい 鉛	普通	加曾利E IV式
	12	画文土器 底盤	(3.0)	口縁部片。沈線による区画文。口縁部底面は無文となる。	砂粘 長石	10V4/2 反黄鉛 鉛／2.5V5/4 にぶい 鉛	普通	加曾利E III式
SK10	13	画文土器 底盤	(3.8)	脚部片。沈線を垂下させる點彫。沈線区画内に潜り消す。地文は縦筋 の單屈B調文。	長石 石英 細 砂粘	10V4/2 反黄鉛 鉛／10V5/2 黑鐵	普通	加曾利E III式
	14	画文土器 底盤	(4.5)	脚部片。沈線を垂下させる點彫。沈線区画内に潜り消す。地文は縦筋 の單屈B調文。	砂粘少 白色粘 少	10V6/4 にぶい黄鉛 鉛／10V7/4 にぶい 黄鉛	普通	加曾利E III式
SK12	15	画文土器 底盤	(3.7)	脚部片。複数の沈線を垂下させ。沈線の沈線間に潜り消す。	長石 拼砂粘多 母	10V6/4 にぶい黄 鉛／10V2/1 黑	普通	加曾利E III式
	16	画文土器 底盤	(3.6)	口縁部片。無文。外面は横位のミガキ。	砂粘 石英少 長石少	7.5V6/6 暗 鉛／10V5/3 にぶい黄鉛	やや 良好	件名寺 I 式
SK13	17	画文土器 底盤	(2.0)	口縁部片。口唇部内削ぎ状。口縁部底面に別列の沈線を落らせ。沈線間 にカギを充填。	砂粘 長石 磨 母	10V3/2 黑鐵 鉛／10V5/3 にぶい黄鉛	普通	五領ヶ台式

遺構番号	画面番号	種類 器種	口縁 器高 底径	部位・技法・文様の特徴	騎士	色調 (外面/内面)	地成	備考
SK13	18	圓文土器 深鉢	(11.4) -	胴部片。曲線的な沈線で文様を抽出。沈線間に単題IK文を充填。	砂粒 白色粒 有黄少	107E3/3 にぶい黄斑 /518E6 稲	やや 良好	称名寺Ⅰ式
	19	圓文土器 深鉢	(4.5) 9.0	底盤片。底面はミガキ。胴部も羅位のミガキ。	砂粒 白色粒 9.0	7.518E6 稲/ 7.518E5/4 にぶい黄	普通	駆之内1式
SK15	20	圓文土器 深鉢	(4.1) -	胴部片。筋曲線に沈線を沿らせ区画する。沈線の交点に円形刺突文。地文は單題IK文。	砂粒 有黄少 角閃石微	7.518E3/4 にぶい黄 /518E5/1 黒斑	普通	加曾利BⅡ式
	21	圓文土器 深鉢	(5.0) -	口縁部片。無文。横位のナガ調整。	石英 砂粒 -	7.518E4/4 にぶい黄 /7.518E6 稲	普通	称名寺Ⅱ式
SK17	22	圓文土器 深鉢	(2.4) -	口縁部片。口縁部底下に2列の円形刺突文を添す。	砂粒 黑小穢 -	7.518E6 稲/ 7.518E5/3 にぶい黄	普通	加曾利EⅡ式
	23	圓文土器 深鉢	(3.5) -	口縁部片。沈線文で文様を抽出。地文は圓文。	砂粒 黑小穢	518E6 明赤褐 /7.518E6 稲	普通	駆之内1式
SK18	24	圓文土器 深鉢	(4.2) -	胴部片。沈線文を底下させる懸垂文。沈線間を晒り消す。地文は羅位の単題IK文。	長石 金雲母 -	7.518E3/3 にぶい黄 /7.518E2/4 灰褐	普通	加曾利EⅢ式
	25	圓文土器 深鉢	(3.3) -	胴部片。沈線文を底ねた捺帯で区画し、区画内には圓文、区画外は無文とする。	角閃石少 微小 -	518E4/4 にぶい黄 /7.518E6 稲	やや 良好	加曾利EⅣ式
	26	圓文土器 深鉢	(4.2) -	口縁部片。口縁部底下を2条の沈線で区画。下部の沈線には複数の沈線を重ねる。	石英 長石 金 雲母少	518E4/6 布施/ 金 雲母少	やや 良好	称名寺Ⅱ式
SK21	27	圓文土器 深鉢	(4.7) -	胴部片。單題IK文を主張に施す。	砂粒多 微小 少	518E2/2 黑褐/ 518E4/4 にぶい赤褐	やや 良好	駆之内1式
	28	圓文土器 深鉢	(10.1) -	口縁部片。底状を呈する口縁部。沈線によりJ字状の文様を抽出。沈線文間に単題IK文を充填。	長石多 石英 -	7.518E3/3 布施/ 7.518E2/1 黑褐	普通	称名寺Ⅰ式
SK22	29	圓文土器 深鉢	(18.0) -	胴部片。胴部の膨らむ部分。頭部に捺帶を添す。捺帶上部は無文。下部は無題IK文で区画し、捺帶に施す。	石英 白色粒 -	7.518E3/3 布施/ 7.518E4/4 にぶい黄	普通	加曾利EⅣ式
	30	圓文土器 深鉢	(4.9) -	胴部片。捺帶による区画文。区画内は羅位の単題IK文。	石英多 粗砂粒 -	107E4/2 灰黄褐/ 107E7/4 にぶい黄斑	普通	加曾利EⅢ式
SK24	31	圓文土器 深鉢	(4.0) -	胴部片。やや開闊を空けた本單位の条線文を底下させる。	石英 粗砂粒 -	7.518E3/1 黑褐/ 7.518E4/4 にぶい黄	普通	称名寺Ⅱ式
	32	圓文土器 深鉢	(7.3) -	口縁部片。口縁部に施された小沈線からキザミを加えた捺帶を底下せしる。沈線文で文様を抽出。地文は単題IK文。	砂粒多 石英 微小 -	2.518E4/3 にぶい赤 褐/ 2.518E4/6 灰褐	普通	駆之内1式
SK25	33	圓文土器 深鉢	(3.9) -	胴部片。沈線を底下させる懸垂文。沈線間を晒り消す。地文が残る。	砂粒多 白色粒 -	7.518E3/3 にぶい黄 /7.518E4/4 にぶい赤 褐	やや 良好	駆之内1式
	34	圓文土器 深鉢	(4.0) -	口縁部片。小沈線を有する。口縁部外端に沈線を底下す。沈線外端に円形刺突文。尖端部内端に丸頭状工具側によるキザミと円形刺突文を施す。	砂粒多 -	7.518E3/1 黑褐/ 7.518E2/1 黑	やや 良好	駆之内2式
SK29	35	圓文土器 深鉢	(2.9) -	口縁部片。捺帶による区画文。捺帶上に単題IK文を口縁部底下は横位で、下部は羅位に施す。	砂粒多 -	518E3/3 布施褐/ 7.518E2/2 灰褐	普通	阿玉台1h式
	36	圓文土器 深鉢	(4.0) -	胴部片。有題沈線による区画文。区画内を同様の有題沈線で充填。	金雲母 長石 微小 -	518E5/4 にぶい赤褐 /7.518E5/4 にぶい黄 褐	良好	阿玉台1h式
SK31	37	土製品 円盤	長さ: 2.6cm 幅: 2.6cm 厚さ: 0.8cm 重さ: 6.7g 小瓶、表面質感IK文。	砂粒多 -	107E6/3 にぶい黄 褐/107E5/4 にぶい黄 褐	普通	後期?	
	38	石器 圓石	長さ: 10.4 幅: 7.6 厚さ: 3.9 重量: 446.3g 石材: 砂岩 表裏・側面全体によく磨かれる。表の面には長軸側の瘤状突起に1ヶ所、裏の面には2ヶ所の瘤状突起による凹みがある。	-	-	-	-	
SK35	39	石器 壓製石斧	長さ: 4.7cm 幅: 4.1cm 厚さ: 1.1cm 重さ: 36.1g 石材: 砂岩 刃部及び基部欠損、全体によく研磨される。	-	-	-	-	
P1101	1	圓文土器 深鉢	(4.4) -	胴部片。3条の捺帶を横走させる。地文は羅位の単題IK文。	長石 有黄少 金雲母少	107E4/2 黑褐/ 107E2/2 黄褐	良好	加曾利EⅠ式
P1106	2	圓文土器 深鉢	(4.0) -	胴部片。2本羅位の沈線を底下させ。沈線間を晒り消す懸垂文。地文は羅位の単題IK文。	砂粒多 長石 -	7.518E6 稲/ 107E6/4 にぶい黄斑	普通	加曾利EⅢ式
P1110	3	圓文土器 深鉢	(4.7) -	胴部片。2本羅位の沈線を底下させ。沈線間を晒り消す懸垂文。地文は羅位の単題IK文。	角閃石 砂粒 -	7.518E6 西黃褐/ 107E5/2 黑褐	普通	加曾利EⅢ式
P1112	4	圓文土器 深鉢	(16.2) -	胴部片。無題IK文を斜位に施す。	長石 黑小穢 砂粒 -	7.518E5/3 にぶい黄 /518E6 稲	普通	駆之内1式

造構 番号	画面 番号	種類 器種	口部 器部 遮断	部位・技法・文様の特徴	施土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
SK29	1	土器 内耳上端	(3.4) —	口縁部分。口部は面取り、外面ナダ調整。耳部欠損、焼付着。	白色粘 石質 物質 石少	T.5YR5.7/1 黒/ T.5YR5.3/にぶい 褐色	やや 良好	16世紀後半～ 16世紀前半
	2	土器 内耳上端	(4.5) —	口縁部分。耳は側面に貼り付け、外間に強く張り出る。口唇部は広く平坦表面形成。	白色粘 石英燒 角閃石微	10YR3/1 黑褐色/ 10YR7.4/にぶい 黃褐色	やや 良好	16世紀後半～ 16世紀前半
	3	土器 内耳上端	32.2 (17.5) —	99%左。口脣部は面取り、口部底面から内面口縁部はヘラで彫刻。耳は張りで口縁部から貼り付けで外間に張り出し、2つ接合して施されるものと1つのみ貼り付けたもののが対峙する。底無欠損。	石英 角閃石 青鉄物質	5IR2/1 黑褐色/ 10YR7.4/にぶい 黃褐色	やや 良好	16世紀後半～ 16世紀前半
	4	土器 内耳上端	(28.0) (10.9) —	口縁部・体部。口縁部は面取り、口縁部底面から内面口縁部はヘラ状工具によるナダ調整。耳部は張りで口縁部底面によらず。	白色粘 長石質 青鉄物質	5IR2/1 黑褐色/ T.5YR6.4/にぶい 褐色	普通	16世紀後半～ 16世紀前半
	5	土器 内耳上端	(7.0) —	体部～底部。内外面ともにヘラナダ調整。体部下端から底部にかけて丸みを持つ。表面に保村材。	長石 角閃石 青鉄物質	T.5YR7.4/にぶい 褐色/ 7.10YR7.4/にぶい 褐色	やや 良好	16世紀後半～ 16世紀前半
座没谷	1	圓文土器 深鉢	(8.7) —	口縁部分。多重の模倣沈継を施さる。口縁部底面及び沈継間に刺突文を充填。	石英多 熟小繊 多 白色粘	5IR5/3/にぶい 褐色/ 5IR5/4/にぶい 褐色	やや 良好	三戸式
	2	圓文土器 浅鉢	(9.5) —	口縁部分。波状を呈する。外削ぎ状の口脣部で、斜位・斜位の沈継によりキリギリを加える。文様は模倣の沈継を主として、太目の沈継をより濃墨書きで施し、圓文には刺突文を施す。横位沈継間で僅かに貝殻模様文を施す部分あり。	長石 角閃石 白色粘	5IR5/4/にぶい 褐色/ 5IR4/3/にぶい 褐色	良好	田戸下層式
	3	圓文土器 深鉢	(7.5) —	口縁部分。波状を呈する。口脣部は外削ぎ状。文様は斜位の沈継を多用し、刺突文を施す部分あり。	長石 角閃石 白色粘	5IR6.6 黑/ 5IR5/3/にぶい 褐色	良好	田戸下層式
	4	圓文土器 深鉢	(4.6) —	口縁部分。口脣部は外削ぎ状。文様は細目の沈継を斜位に施す。刺突文を斜位の沈継間に施す。	砂粒 白色粘	5IR4/2 黑褐色/ 10YR7.3/にぶい 黃褐色	普通	田戸下層式
	5	圓文土器 深鉢	(4.2) —	口縁部分。口脣部はやや外削ぎ状。文様は斜位の沈継を多用し、刺突文を施す。	砂粒 白色粘	10YR5/3/にぶい 褐色/ 7.10YR2/灰褐色	やや 良好	田戸下層式
	6	圓文土器 深鉢	(3.7) —	口縁部分。口脣部は先削りで先端は尖錐を持つ。文様は斜位の沈継と刺突文。	砂粒 白色粘 角閃石少	5IR5/3/にぶい 褐色/ 7.5IR6/4/にぶい 褐色	普通	田戸下層式
	7	圓文土器 深鉢	(2.5) —	口縁部分。口脣部は外削ぎ状。文様は半載竹管状工具先端部により、連続刺突文を模倣させる。	相砂粒	5IR3/3 増赤褐色/ 5IR4/6 増褐色	良好	田戸下層式
	8	圓文土器 深鉢	(6.1) —	口縁部分。口脣部は丸錐状。文様は太目の沈継で口縁部底面は板状。以下は横位に施す。	長石 熟小繊 多 白色粘	5IR6/3/にぶい 褐色/ 5IR6/4/にぶい 褐色	良好	田戸下層式
	9	圓文土器 深鉢	(3.1) —	口縁部分。横位・斜位の沈継間に貝殻模様文を充填。	白色粘多 石英 角閃石少	5IR3/3 増褐色/ 5IR3/3 増褐色	良好	田戸下層式
	10	圓文土器 深鉢	(7.0) —	脚部。脚部下半分。太い沈継で磁位・横位に施す。	微小繊多 白色 粘	5IR5/3/にぶい 褐色/ 7.5IR4/1 黑褐色	やや 良好	田戸下層式
	11	圓文土器 深鉢	(7.3) —	脚部。太い沈継と細い沈継を横走させる。太い沈継間に幅を持つ、刺突文を施す。	細砂粒	10YR6/3/にぶい 黃褐色/ 7.5IR4/2 灰褐色	良好	田戸下層式
	12	圓文土器 深鉢	(7.3) —	脚部。多量の横位沈継で区画し、区画上部は斜位式線文を刺突文と交差に配し、下部は斜位目字文。	長石 白色粘 微小繊少	5IR3/2 黑褐色/ 5IR4/3 褐	良好	田戸下層式
	13	圓文土器 深鉢	(5.0) —	実底部。横位沈継を多量に施す。	砂粒多 熟小繊 多 石英 白色 粘	5IR6/6 黑/ 7.5IR3/1 黑褐色	普通	田戸下層式
	14	圓文土器 深鉢	(6.0) —	実底部。斜位沈継を多量に施す。	細砂粒	5IR4/6 増赤褐色/ 5IR3/1 黑褐色	良好	田戸下層式
	15	圓文土器 深鉢	(3.5) —	実底部。斜位のケズリ彫刻後、横位沈継を施す。	長石 石英	5IR6/4/にぶい 褐色/ 10YR5/2 灰褐色	普通	田戸下層式
	16	圓文土器 深鉢	(5.2) —	実底部。斜位のケズリ彫刻後、横位沈継を追せし刺突文を充填。	長石 熟小繊 砂粒少	10YR7/4/にぶい 黃褐色/ 10YR4/2 灰褐色	良好	田戸下層式
	17	圓文土器 深鉢	(4.0) —	実底部。多量の沈継と刺突文を横位に施す。	砂粒多 石英 微小繊少	5IR5/4/にぶい 赤褐色/ —	やや 良好	田戸下層式
	18	圓文土器 深鉢	(5.3) 2.0	尖底部。ケズリ彫刻後、太い斜位線を施す。底部もケズリを施し、斜位による調整。尖錐は塔部は平坦。	長石 砂粒 白 色粘	10YR6/4/にぶい 黃褐色/ 10YR4/2 灰褐色	やや 良好	田戸下層式
	19	圓文土器 深鉢	(4.2) —	口縁部分。内外面ともに横位の条筋文を施す。口脣部はやや外削ぎ状となり、内面口縁部底面に施す貝殻模様文を充填。	磁鐵 長石 角 閃石	10YR6/3/にぶい 黃褐色/ 7.5IR6/4/にぶい 褐色	普通	田戸上層式
	20	圓文土器 深鉢	(4.5) —	脚部。刺突列を平行に横走させた区画。区画内に貝殻模様文を矢羽根状に施す。	砂粒 長石粘 角閃石少	10YR5/2 灰褐色/ 5IR3/6 明褐色	普通	田戸上層式
	21	圓文土器 深鉢	(5.3) —	脚部。回線文間に貝殻模様文。刺突文を充填。	砂粒 長石粘 角閃石少	5IR3/2 増赤褐色/ 5IR5/3/にぶい 褐色	普通	田戸上層式

登録 番号	国宝 登録番号	種類 器種	目録 器高 底座	部段・技術・文様の特徴	断土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
22	調文土器 深鉢	(5.9) —	口縁部分。口唇部両端にキザミを施す。細狭起線文により幾何状の区画文を描き、区画交点上に円形押抜文。区画内には朝雲文を充填。	長石 砂粒 織 織	SYR4/6 青褐色/ SYR4/4 にぶい青褐色	普通	鶴ヶ島台式	
23	調文土器 深鉢	(4.8) —	胸部。内外面ともに条痕文を施文。	長石 砂粒 織 織	T. SYR4/4 にぶい黒褐色/ SYR3/6 明赤褐色	普通	翠山式	
24	調文土器 深鉢	(5.2) —	胸部。内外面ともに条痕文を施文。	砂粒多 織 織	10YS5/3 にぶい黄褐色/ 10YS6/4 にぶい黄褐色	普通	翠山式	
25	調文土器 深鉢	(4.3) —	口縁部分。口唇部は細い排疊工具を斜めから刺してミガキを加える。口縁部底面は江戸型かく壺底状沈継文多段式を施文。	石英多 微小織 白色粒	T. SYR5/4 にぶい黒褐色/ SYR6/6 青褐色	やや 良好	浮舟II式	
26	調文土器 深鉢	(6.6) —	口縁部分。口縁部に反羽の小突起を有し、突起直下に棒土拂を引む三叉文。口縁部底面に有筋沈継による文様。	砂粒 白色粒	T. SYR3/2 黒褐色/ T. SYR3/5 嫌褐色	やや 良好	阿玉台Ia式	
27	調文土器 深鉢	(5.3) —	口縁部分。細い模状文を呈する口縁部底面。口縁部直下に有筋沈継を沿わせる。	砂粒 白色粒少	T. SYR3/1 黒褐色/ SYR3/1 嫌褐色	良好	阿玉台Ib式	
28	調文土器 深鉢	(3.5) —	口縁部分。捺壓による横円区画文。区画接点部分V字状文。区画に沿って有筋沈継を施文。	長石 金雲母 白色粒	SYR3/1 黒褐色/ SYR4/4 にぶい青褐色	普通	阿玉台Ib式	
29	調文土器 深鉢	(5.5) —	口縁部分。捺壓による幅の狭い横円区画文。区画に沿って有筋沈継を施文。	長石 砂粒	T. SYR3/2 黒褐色/ T. SYR3/1 黒褐色	やや 良好	阿玉台Ib式	
30	調文土器 深鉢	(4.1) —	口縁部分。波状を呈する。捺壓による区画文を施し、口唇部・口縁部直下・捺壓間に網状の有筋沈継を施文。	白色粒 微小織	SYR4/4 にぶい青褐色/ SYR4/6 青褐色	良好	阿玉台Ib式	
31	調文土器 深鉢	(8.3) —	胸部。傾斜中位に捺帶による横円区画文を作出。区画内には皮状の有筋沈継。	金雲母多 砂粒 長石長	SYR4/3 にぶい青褐色/ SYR5/4 にぶい青褐色	普通	阿玉台Ib式	
32	調文土器 深鉢	(3.5) —	口縁部分。口縁部及び捺帶上に、先修工具製によるキザミを施す。口縁部底面と捺壓部には、耐衝撃の有筋沈継を沿わせる。	砂粒少	T. SYR4/2 暗褐色/ 10YS3/2 黒褐色	やや 良好	阿玉台Ib式	
33	調文土器 深鉢	(6.7) —	口縁部分。口縁部を捺壓で区画し、有筋沈継を沿わせる。横状把手を作り出し、逆S字形状の捺帶を貼り下ろせる。	石英多 白色粒 白英少	SYR3/1 黑褐色/ 7. SYR3/2 黑褐色	普通	阿玉台Ib~ II式	
34	調文土器 深鉢	(7.8) —	口縁部分。横状把手を施し、2列の有筋沈継を沿わせる。口縁部底面は捺壓による横円区画文。捺する捺帶には傾斜による押印を加える。区画内には2列の有筋沈継で横状の捺帶を構成。	金雲母多 長石 長石長	T. SYR5/4 にぶい黒褐色/ 7. SYR5/3 にぶい黒褐色	やや 良好	阿玉台II式	
35	調文土器 深鉢	(7.2) —	口縁部分。波状を呈する。捺壓部に横筋を貼り付ける。口縁部底面は2列の有筋沈継。捺壓部底面は円形状の捺帶文。	長石 金雲母	7. SYR6/6 棕褐色/ SYR6/6 棕	普通	阿玉台II式	
36	調文土器 深鉢	(4.5) —	口縁部分。捺壓による区画文。口唇部は平坦面を作出し、細かいキザミを施す。区画内には2列の有筋沈継を沿わせる。	石英 金雲母	2. SYR5/4 明赤褐色/ 7. SYR3/1 黑褐色	良好	阿玉台II式	
37	調文土器 深鉢	(4.5) —	口縁部分。キザミを加えた断面三脚構造による区画文。	金雲母多 粗 砂粒	SYR4/6 青褐色/ 7. SYR5/6 棕	やや 良好	阿玉台II式	
38	調文土器 深鉢	(5.1) —	口縁部分。波状を呈する口縁の底面。口唇部は面取りされ、細かいキザミを加える。	金雲母多 長石	SYR4/4 にぶい青褐色/ SYR5/2 嫌褐色	良好	阿玉台II式	
39	調文土器 深鉢	(4.6) —	口縁底面に細い捺帶で、幅の狭い横円区画文を作出。	長石 石英	SYR5/6 明赤褐色/ SYR4/2 暗褐色	良好	阿玉台II式	
40	調文土器 深鉢	(5.0) —	口縁部分。捺壓による横円区画文。区画に沿って幅広の帯状文を施文。	金雲母 白色粒 細砂粒	7. SYR2/2 暗褐色/ 7. SYR3/4 にぶい黒褐色	やや 良好	阿玉台III式	
41	調文土器 深鉢	(4.4) —	口縁部分。小突起を有し、捺壓部に伸縮工具による押印を加える。口縁部と捺帶部により区画内に有筋沈継を沿わせる。区画内には波状の有筋沈継を施す。	石英 金雲母	7. SYR4/2 暗褐色/ 7. SYR3/3 にぶい黒褐色	やや 良好	阿玉台IV式	
42	調文土器 深鉢	(6.2) —	口縁部分。細い模状文を呈する口縁の底面。捺壓部区画文に沿って2列の沈継。地文は單苞紅葉文で捺帶上まで延びる。	石英 白色粒少	SYR5/6 明赤褐色/ SYR5/4 にぶい青褐色	良好	阿玉台IV式	
43	調文土器 深鉢	(4.3) —	口縁部分。口縁部底面に3条の横文原体直底(單苞UR文)を這らす。	砂粒 石英少 長石少	T. SYR3/3 にぶい黒褐色/ 7. SYR6/4 にぶい黒褐色	普通	大木7b式	
44	調文土器 深鉢	(6.0) —	有筋沈継を捺壓部に沿わせ、巻折状の文様を描出す。地文は横筋の单苞紅葉文。	石英多 砂粒 長石少	10YS7/4 にぶい黒褐色/ 10YS5/2 暗褐色	普通	大木8a式	
45	調文土器 深鉢	(5.3) —	口縁部分。口唇部は外周に高い捺帶を用いて厚壁させ、平坦面を作出。口縁部底面上にも捺帶を沿わせ、幅狭の区画文を施す。区画内には太い沈継を加え、地文は横筋の单苞紅葉文。	長石 石英 砂 粒	T. SYR5/3 にぶい黒褐色/ 7. SYR6/4 にぶい黒褐色	普通	大木8a式	
46	調文土器 深鉢	(5.5) —	口縁部分。口縁部直下に横円状の衿を設け、外周は丸棒状工具側面による押印。その内側には有筋沈継を沿わせる。	石英 金雲母	7. SYR4/2 暗褐色/ 7. SYR2/2 黒	普通	大木8a式	
47	調文土器 深鉢	(4.2) —	口縁部分。口縁部直下に横筋押印を加えた捺帶を2列差せる。	長石 石英	10YS7/4 にぶい黒褐色/ 10YS6/4 にぶい黒褐色	普通	大木8a式	

造構番号	図版番号	種類 器種	口縁 高さ 延長	断面・技法・文様の特徴	施土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
48	圓文土器 深鉢	—	(3.8) —	脚部片。縦肋の圓文で羽衣構成をとる。	石英 金雲母 白色粘	10YR6/4 にぶい根 /10YR4/1 黒鉢	普通	大木36式
49	圓文土器 深鉢	—	(4.4) —	口縁部片。小型土器。口縁部底下は脚部による渦巻文。脚部は無文。	石英多 砂粒 白色粘	7.5YR6/4 にぶい根 /7.5YR4/2 黑鉢	普通	加賀利E I式
50	圓文土器 深鉢	—	(4.3) —	底状を呈する口縁部片。縦肋により文様を傾く。口筋部に沿う脚部は比較によって分けられる。地文は單列E形圓文を模倣にとる。	石英 多 白色粘	2.5YR5/6 明歩陶 2.5YR5/6 明歩陶	普通	加賀利E I式
51	圓文土器 深鉢	—	(3.8) —	口縁部片。縁帶による渦巻文と区画文を作成。区画に沿って太日の沈継を施す。区画内には横筋の単脚E形圓文を施す。	石英 黑雲母 砂粒 長石少	7.5YR6/4 にぶい根 /5YR5/6 明歩陶	普通	加賀利E II式
52	圓文土器 深鉢	—	(4.8) —	口縁部片。縁帶による渦巻文と区画文を作成。区画に沿って太日の沈継を施す。区画内には横筋の単脚E形圓文を施す。	石英 金雲母 白色粘	7.5YR6/4 にぶい根 /7.5YR4/3 にぶい根	やや 良好	加賀利E II式
53	圓文土器 浅鉢	—	(4.5) —	口縁部片。外面は無文。内面は口縁部底下に太い沈継で文様を描出。	長石 金雲母少 砂粒	5YR4/6 布施 5YR4/6 明歩陶	良好	加賀利E II式
54	圓文土器 深鉢	—	(7.5) —	口縁部片。縁帶及び沈継を用いて小突起及び区画文を作成。小突起直下には頸状把手と穿孔を施す。区画内には擬似の単脚E形圓文を施す。	石英 砂粒 黑 白色粘	7.5YR5/4 にぶい根 /5YR5/4 にぶい根	普通	加賀利E III式 or 大木9式?
55	圓文土器 深鉢	—	(3.2) —	口縁部片。沈継により縦の長いE形圓文を施す。区画内には磨り消す。	長石 白色粘	7.5YR4/1 沈継 7.5YR4/2 沈継	普通	加賀利E III式
56	圓文土器 深鉢	—	(4.3) —	脚部片。曲線的な浅い沈継間を磨り消す。地文は擬似の単脚E形圓文。	白色粘 長石粗	2.5YR5/6 明歩陶 7.5YR3/3 沈継	やや 良好	加賀利E III式
57	圓文土器 深鉢	—	(4.6) —	口縁部片。2本の沈継を垂下させた張垂文。沈継間を磨り消す。地文は擬似の張垂文E形圓文を施す。	石英 小細 白色粘	7.5YR7/4 にぶい根 /5YR4/2 黑鉢	普通	加賀利E III式
58	圓文土器 深鉢	—	(6.0) —	口縁部片。微刻文による区画。口縁部側は無文とし、以下擬似の単脚E形圓文を施す。	灰白色粘多 石 英	2.5YR5/6 明歩陶 7.5YR6/6 黒	普通	加賀利E IV式
59	圓文土器 深鉢	—	(4.0) —	口縁部片。内面折の口縁部から外面全体に波立水状の集合沈継を施す。沈継の流れに沿って把手を施す。内面の口縁部底下に穿孔を巡らす。	灰白色粘多 石 英少	5YR6/6 黒 7.5YR6/4 にぶい根	普通	舟利3式
60	圓文土器 深鉢	—	(4.1) —	脚部片。沈継間に縦目原体による単脚E形圓文を施す。さらに刺突文を加える。	石英多 長石 砂粒	5YR3/1 黑鉢 5YR5/4 にぶい根	やや 良好	舟利1式
61	圓文土器 深鉢	—	(9.5) —	脚部片。沈継によるJ字型の文様を描出。沈継間に単脚E形圓文を充填。内面はよくミガキがかかる。	長石 角閃石	7.5YR6/4 にぶい根 /10YR7/4 にぶい根	普通	舟利1式
62	圓文土器 深鉢	—	(7.5) —	脚部片。曲線的な沈継で文様を描き。沈継間に単脚E形圓文を充填。無文部はミガキがかかる。	白色粘 長石粗	7.5YR5/3 にぶい根 /2.5YR5/6 明歩陶	普通	舟利1式
63	圓文土器 深鉢	—	(5.3) —	口縁部片。小波状を呈する。波立部底下には穿孔が施され。端部に円形刺突文を持つ沈継で埋む。口縁に沿って沈継を施す。内面に保付孔。	粗砂粒 多	10YR6/4 にぶい根 /7.5YR1 黑鉢	普通	舟毛寺II式
64	圓文土器 深鉢	—	(6.2) —	口縁部片。底状を呈する。底頭部には穿孔が施され。端部に円形刺突文を持つ沈継で埋む。口縁に沿って沈継を施す。	砂粒 白色粘 石英少	7.5YR6/4 にぶい根 /7.5YR7/4 にぶい根	普通	舟毛寺II式
65	圓文土器 深鉢	—	(6.6) —	口縁部片。口縁部底下に押印を加えた組織文を施す。文様は7本単位の横筋状工具による幾何文を施す。	砂粒 白色粘	5YR4/6 幸施 5YR4/3 にぶい根	やや 良好	舟毛寺II式
66	圓文土器 深鉢	—	(12.2) —	脚部片。2本単位の沈継を用いて文様を描出。地文は単脚E形圓文。	砂粒 白色粘	7.5YR4/2 灰黒 10YR5/2 灰黒	普通	駿之内1式
67	圓文土器 深鉢	—	(2.7) —	口縁部片。口縁部底下にキザミを加えた組織文を施す。内面の口縁部底下には穿孔が施す。	白色粘多 砂粒 長石少	10YR6/3 にぶい根 /7.5YR3/1 にぶい根	普通	駿之内2式
68	圓文土器 深鉢	—	(3.1) —	口縁部片。口縁部底下に押印押印を加えた組織文を施す。地文は単脚E形圓文。	砂粒多 長石少 長石少	5YR4/6 幸施 5YR4/6 幸施	やや 良好	駿之内2式
69	圓文土器 深鉢	—	(9.0) —	口縁部片。口縁部底下に指印押印を加えた組織文を2条施す。地文圓文に丸状孔工具側による斜行沈継を充填。内面の口縁部底下には2条の凹状沈継を施す。	砂粒多 白色粘 長石少	5YR4/2 黑 7.5YR5/2 黑	良好	加賀利B I式
70	圓文土器 深鉢	—	(4.0) —	口縁部片。口縁部底下に指印押印を加えた組織文を施す。地文は単脚E形圓文。	石英 砂粒	10YR4/2 灰黒 10YR5/2 にぶい根	良好	加賀利B I式
71	圓文土器 浅鉢	—	(3.6) —	口切部片。外面は無文。内面は多段の伏筋間に斜行斜肋の単位文。	砂粒 白色粘	10YR5/3 にぶい根 /10YR4/3 にぶい根	普通	加賀利B I式
72	圓文土器 深鉢	—	(8.3) —	脚部片。地文は無文に脚部から上は斜行沈継を、左上→右下→左上→左下の順で格子目状に施す。下は左上→右下のみを施す。脚部は沈継区画なし。区画内には磨り消す。	角閃石 砂粒	7.5YR5/4 にぶい根 /7.5YR4/3 黑	良好	加賀利B 2式
73	圓文土器 浅鉢	—	(4.1) —	口縁部片。口縁部に段落ち。段以下はケヌリ彫刻。口縁部底下から内面にはミガキがかかる。	砂粒 白色粘 長石少	5YR4/1 黑 7.5YR5/2 黑	良好	加賀利B 2式

埋没

登録 番号	画面 番号	種類 器種	口縁 器高 底径	部位・技法・文様の特徴	断土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
74	7	圓文土器 深鉢	(7.3)	口縁部。口縁部直下は刻文帯を施らせる。以下幅広の圓文帯を施す。圓文帯上の施文は單題紅羅文。	石英 白色粒	SB4/6 明赤褐色/ SB5/6 明赤褐色	良好	加曾利B3式
75	6	圓文土器 深鉢	(6.3)	口縁部。直状口縁の底面部。口縁に沿って刻文帯を施す。	砂粒 石英 長 石粒	7.5W2/2 黒褐色/ 7.5W2/2 灰褐色	やや 良好	加曾利B3式
76	7	圓文土器 深鉢	(8.0)	G縁部片。口羽部は直状に面取りされる。地文は無文で斜行沈継を充填。頭部は沈継で区画し、区画内を削り消す。内面はミガキがかかる。	石英 白色粒	SB4/6 明赤褐色/ SB4/2 灰褐色	良好	加曾利B3式
77	8	圓文土器 深鉢	(11.1)	G縁部片。地文無文に斜行沈継を充填。頭部は削り消す。内面はミガキがかかる。	粗砂粒 多 長石 粒	10W6/4 にぶい黄褐色/ 10W2/2 黑褐色	やや 良好	加曾利B3式
78	7	圓文土器 深鉢	(7.2)	頭部片。地文無文に丸彫棒状工具側面による斜行沈継を、左上～右下～左上～左下の順で格子目状に施す。頭部は沈継で区画し、区画内を削り消すが一部が残存する。	砂粒 白色粒 金雲母微	10W2/2 黑褐色/ 7.5W2/2 黑褐色	良好	加曾利B3式
79	8	圓文土器 深鉢	(5.6)	口縁部片。口縁部直下に矢羽根状沈継を充填。内面はミガキ。	粗砂粒 長石粒	SB3/1 黑褐色/ 7.5W2/2 黑褐色	良好	加曾利B3式
80	9	圓文土器 深鉢	(6.2)	口縁部片。頭部の丸彫棒状工具側面により、斜行沈継を左上～右下～左上～左下の順で格子目状に施す。	長石 角閃石 微小纖維	SB4/6 明赤褐色/ SB4/4 明赤褐色	良好	加曾利B3式
81	8	圓文土器 深鉢	(5.9)	口縁部片。斜行沈継の右上～左下～右上～右下の順で格子目状に施す。地文は圓文。	白色粒 長石粒 少	7.5W2/6 暗褐色/ 10W6/4 にぶい黄褐色	普通	加曾利B3式
82	9	圓文土器 深鉢	(5.4)	口縁部片。斜行沈継の右上～左下～右上～右下の順に複雑な施す。内面の口縁部直下には太い沈継を施す。	白色粒 石英少 微小纖維	10W6/4 にぶい黄褐色/ 10W5/3 にぶい黄褐色	普通	加曾利B3式
83	8	圓文土器 深鉢	(8.5)	口縁部片。口羽部にV字型突起を施し、口縁部直下及び頭部に刻文帯を施らせる。区画内を削り消すによる無文帶。	砂粒 小纖維	10W2/1 黑褐色/ 10W4/2 灰褐色	良好	加曾利B3～ 曾谷式
84	9	圓文土器 深鉢	(5.0)	口縁部片。口縁部直下に2条の帶圓文を施らせ、無文の帶を帶圓文に跨がる貼り付けする。帶圓文直下には、優美な区画による圓文帯。帶上部の施文は圓文貼り付け。	白色粒 多長石 粒	10W4/2 灰褐色/ 10W3/1 黑褐色	良好	曾谷式
85	10	圓文土器 深鉢	(4.7)	口縁部片。直状口縁の波底部。口縁部直下は屈曲し、ギザギザを加えた捲帶状で区画する。区画内に单題紅羅文による圓文帯。頭部に沿うる斜行沈継を施す。	粗砂粒 白色粒	7.5W3/1 黑褐色/ 7.5W2/1 黑褐色	良好	曾谷式
86	11	圓文土器 深鉢	(3.0)	口縁部片。直状口縁の波底部。口縁部直下は屈曲し、ギザギザを加えた捲帶状で区画する。区画内に单題紅羅文による圓文帯。頭部に沿うる斜行沈継を施す。	砂粒 白色粒	7.5W3/2 黑褐色/ 7.5W2/2 灰褐色	良好	曾谷式
87	12	圓文土器 深鉢	(6.7)	頭部～底部。頭部には斜行方向からの刻文列を施す。頭部には瘤状突起を施す。底部には瘤状突起を施す。赤褐色が認められる。	石英 白色粒 長石粒	7.5W4/2 灰褐色/ 10W4/2 灰褐色	良好	曾谷式
88	13	圓文土器 深鉢	(6.7)	口縁部片。底状を呈する。口縁部直下に刻文帯を施す。頭部にも刻み例を施す。底部直下に瘤状突起を施し、瘤消圓文による文様を描出。	砂粒多 白色粒	10W2/1 黑褐色/ SB3/4 带赤褐色	良好	曾谷式
89	14	圓文土器 深鉢	(3.5)	口縁部片。口羽部外側に指印頭を細かく加えた細縞文を施す。地文は無文で彫り込み沈継と横沈継、横沈継と横沈継、底面部に光沢。	角閃石 長石粒 少 微小纖維	SB4/6 明赤褐色/ SB5/6 明赤褐色	良好	安行1式
90	15	圓文土器 深鉢	(4.9)	口縁部片。口羽部外側に細かいV字形を施す。地文は無文で彫り込み沈継と横沈継の無作為な施文。	長石粒 白色粒 少	SB3/2 带赤褐色/ SB3/3 带赤褐色	普通	安行1式
91	16	圓文土器 深鉢	(5.5)	口縁部片。底状を呈する。口縁部直下に刻文帯を施す。頭部にも刻み例を施す。底部直下に瘤状突起を施す。頭部は單題紅羅文。	白色粒 細砂粒	2.5W6/6 明赤褐色/ SB4/3 にぶい赤褐色	良好	安行1式
92	17	圓文土器 深鉢	(5.9)	口縁部片。直状口縁の波底部。口縁部直下に3条の帶圓文を施す。帶上部の施文は單題紅羅文。	砂粒 白色粒 石英少	7.5W4/2 暗褐色/ SB4/3 にぶい赤褐色	良好	安行1式
93	18	圓文土器 深鉢	(4.7)	G縁部片。直状口縁の波底部。口縁部直下に帶圓文を施す。帶圓文に刻文例を施す。帶圓文は2条の沈継と彫文。帶上の施文は單題紅羅文。	粗砂粒 多	SB4/6 明赤褐色/ SB5/6 带赤褐色	良好	安行1式
94	19	圓文土器 深鉢	(5.7)	G縁部片。口羽部直下に横沈継を多道に運びさせた後、口羽部外側と沈継部下位に単題紅羅文を施す。沈継部以下には削り消す。	砂粒 白色粒	SB5/4 にぶい赤褐色/ 7.5W4/2 灰褐色	良好	安行1式
95	20	圓文土器 直	(4.2)	頭部片。頭部を背つ連続形土器。刻文帯を多段に施す。頭部の頭部有り。	粗砂粒	10W5/2 灰褐色/ 10W4/1 灰褐色	やや 良好	新地式
96	21	圓文土器 直	(3.8)	頭部片。頭部を施す。横沈継を多道に施す。沈継間は斜伏の細縞V字形を施す。	角閃石 細砂粒	7.5W6/6 暗褐色/ 10W6/4 改良橙	良好	新地式
97	22	圓文土器 深鉢	(3.5)	口縁部片。口羽部に斜伏状小突起を設け。口縁部直下に沈継で区画した無文帯を施す。地文は單題紅羅文。	砂粒 長石粒	7.5W6/4 にぶい赤褐色/ 7.5W5/3 にぶい赤褐色	やや 良好	金剛寺式
98	23	圓文土器 深鉢	(2.0)	底部片。底面に網代文を施した後に削り消し調整。	石英 白色粒多	SB4/6 明赤褐色/ 7.5W3/1 黑褐色	普通	後期
99	24	圓文土器 深鉢	(3.7) 5.2	底部片。頭部は巣状のミガキがよくかかる。底面は削れ痕。	微小纖維 長石 粒	2.5W6/6 明赤褐色/ SB3/1 黑褐色	良好	後期

遺構番号	図版番号	種類 器種	口徑 器高 底径	断面・技法・文様の特徴	出土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
109	圓文土器 茎鉢	—	(3.8) 4.0	底部片。底面に網代鉢。	石英 長石 金 雲母微	T5R6.6 塗 /7.5Y4.1 焼灰	良好	後期後半
101	圓文土器 茎鉢	—	(3.1) (6.0)	底部片。網文様は地文が單屈B線文に曲線的な沈線を描出。	角閃石 石英少 —	T9Y6.7 にぶい黄 /7.5Y6.6 塗	良好	後期後半
102	圓文土器	6.5	(3.4)	ミニチュアの林形土器。外面全体にケズリ調整。	角閃石 白色和 砂粒少	T.5Y6.3 にぶい樹 /7.5Y4.1 焼灰	普通	後期後半
103	土製品 有底土鉢	長さ：4.6cm 幅：2.4cm 厚さ：1.5cm 重さ：18.4g 表面裏面の長軸方向に漢字を彫文。中央部には穿孔を施す。	—	白色粒 多 石英	T9Y4.2 黄灰地 T9Y4.4 焼灰	普通	後期？	
104	土製品 有底土鉢	長さ：5.8cm 幅：2.5cm 厚さ：1.0cm 重さ：10.0g 表面裏面に漢字を彫文。長軸方向へ短軸方向の筋で施文し、十文字を施す。	—	白色粒 石英	T9Y6.3 にぶい黄 /10Y4.1 焼灰	普通	後期？	
105	土製品 円盤	長さ：4.7cm 幅：4.3cm 厚さ：0.6cm 重さ：15.8g 表面圓文が焼付。	—	骨質陶物質多 石英 微小纖 維	T.5Y6.4 にぶい樹 /7.5Y6.3 にぶい樹 —	普通	後期	
106	土製品 土偶	最大：6.0cm 幅：2.6～3.8cm 厚さ：2.0～2.5cm 頭部扁。中央に頭状の溝がありり。腰部分は腰や少く張り出す。	—	白色粒 多 石英	T9Y8.4 黄灰地 —	普通	後期	
107	須恵器 壺	—	(2.4) (5.0)	底部片。底面及び底部下端は無調整。	石英 チャート 黑色粒	2.5YS/1 黄灰 2.5YS/1 焼灰	夏文化 良好 型銀	9世紀代
108	須恵器 壺	(14.0) (5.2)	—	口縁部片。コクロ成形。	石英 チャート	2.5YS/1 黄灰 2.5YS/1 焼灰	須作系 良好 型銀	9世紀代
109	土器器 皿	(18.7) (4.1)	—	口縁部片。口縁部つまみ上げ調整。内外面ともにヨコナギ。	角閃石 長石粒	T.5YS/3 にぶい樹 T9Y5.4 にぶい樹 —	須作系 普通	9世紀代
110	土器 内耳土器	(31.8) (6.4)	—	口縁部片。口縁部は面取り。口縁部外端から内面口縁部はヘラナゲ調整。耳は横状で口縁部から貼り付け。外面に張り出す。	砂粒 長石粒	T.5YH.2 灰焼 T9Y8.4 黄灰地	良好	15世紀後半～ 16世紀前半
111	土器 かづらけ	—	(2.0) (3.8)	底部片。底面は削輪系切りによる切り離し後。無調整。	長石 砂粒	T9R5.6 明赤地 2.5YS/8 明赤地	普通	15世紀後半～ 16世紀前半
112	石器 石鑿	長さ：2.15 幅：1.2 厚さ：0.3 重量：0.9g 石材：チャート 凸基部有茎石。両側縫合部が埋込み、各面部側が浅く削れる。	—	—	—	—	—	—
113	石器 磨製石斧	長さ：5.0 幅：2.2 厚さ：2.4 重量：90.6g 石材：砂岩 刃部のみ残存。基部側欠損。全体によく磨かれているが、片面は刀部端と中央に截打痕による二次利用か。	—	—	—	—	—	—
114	石器 磨石	長さ：9.2 幅：10.1 厚さ：6.5 重量：724.1g 石材：砂岩 滑曲した内面に踏み跡面。中央に2ヶ所の凹み。	—	—	—	—	—	—
115	石器 磨石・燧石	長さ：6.1 幅：4.6 厚さ：2.4 重量：106.5g 石材：細粒砂岩 鋸長の形状。表面裏面はよく磨かれ、中央部に截打痕。長軸側端部と両側面にも截打痕。	—	—	—	—	—	—
116	石器 磨石・燧石	長さ：11.8 幅：7.4 厚さ：4.5 重量：510.3g 石材：砂岩 表裏・側面全体によく磨かれている。長軸側の両端部と両側面の約半分に截打痕有り。	—	—	—	—	—	—
117	石器 磨石・燧石	長さ：9.9 幅：4.8 厚さ：5.1 重量：553.7g 石材：砂岩 表裏・側面全体によく磨かれている。片面には広めのがれ・凹み2ヶ所の周縁は截打痕。	—	—	—	—	—	—
118	石器 刮石	長さ：8.5 幅：6.3 厚さ：3.6 重量：301.7g 石材：砂岩 表裏両面はよく磨かれ、片側は平坦面、一方は凸曲した面になる。ともに凹みがあり。平坦面は2ヶ所の広い凹みが連なるが、滑曲した面は後で削り取る。	—	—	—	—	—	—
119	石器 刮石・燧石	長さ：10.1 幅：4.9 厚さ：4.2 重量：481.5g 石材：砂岩 表裏両面に凹み有。片面にも凹み・凹みを中心に削り取る。両面に凸の截打痕が認められる。全体に磨痕有り。	—	—	—	—	—	—
120	石器 刮石	長さ：10.1 幅：7.9 厚さ：4.2 重量：382.0g 石材：砂岩 表裏両面の砥削面に凹み有り。	—	—	—	—	—	—
121	石器 砾石	長さ：12.0 幅：4.7 厚さ：3.1 重量：234.3g 石材：砂岩 高い使用頻度のため、顕著な摩耗に上り磨曲する。	—	—	—	—	—	—
122	石器 石器	長さ：18.0 幅：16.5 厚さ：8.4 重量：1,798.0g 石材：多孔質玄武岩 片面は黒頭で高い使用頻度が認められる。もう一方の面は多孔石として利用。	—	—	—	—	—	—
123	石器 石器	長さ：10.9 幅：7.9 厚さ：3.1 重量：288.5g 石材：砂岩 底部は踏み使用。	—	—	—	—	—	—
124	石器 石器	長さ：12.1 幅：11.6 厚さ：8.5 重量：1,360.0g 石材：砂岩 表裏両面とも踏み着き面。截打痕は磨削前のものか。	—	—	—	—	—	—
遺構外	1	圓文土器 茎鉢	(4.3) —	口縁部片。口縁部底に有筋沈線を運ぶ。縫合部の隙間帯に裏文に沿って	長石多 白色粒 金雲母微	T.5Y5.4 にぶい樹 /3Y5.6 明赤地	やや 良好	阿玉台16式

通構番号	画面多号	種類 器種	白黒高 底底	部徴・技術・文様の特徴	動土	色調 (外面/内面)	成形	備考
道構外	2	陶文土器 深鉢	-(4.5) -	阿部片。断面薄肉状縦唇による区画文に沿って、くさび状の有筋沈縫を施す。区画内には直状沈縫。	長石多 石英 雲母少	SYE5/6 明串縫/ 7,SYE5/6 にぶい串 縫	やや 良好	板版式
	3	陶文土器 深鉢	(3.5) -	口縁部片。隆唇と有筋沈縫による区画文。	長石多 陶粒 雲母少	SYE3/4 増串縫/ 7,SYE3/2 増串縫	普通	阿玉台1b
	4	陶文土器 深鉢	-(8.2) -	鉢脚部片。隆唇下垂。ヒ状圧痕。直筋な輪筋み底。	微小繊多 長石 雲母多	SYE4/4 にぶい串縫/ 7,SYE4/4 にぶい串 縫	普通	阿玉台1b~ II式
	5	陶文土器 深鉢	-(4.4) -	口縁部片。屈曲した頭部に2条の沈縫を走らす。地文は屈位の單屈Bと陶文で間隔を開けて施す。	長石 石英 黑 雲母	10H7/4 にぶい黄縫/ 10H6/4 にぶい黄 縫	普通	大木8a式
	6	陶文土器 深鉢	-(3.7) -	鉢脚部片。隆唇・沈縫で済巻文を形成。地文は屈位の單屈Bと陶文。	微小繊多 長石 白閃石	SYE6/6 横/ 7,SYE2/2 黒縫	普通	加曾利丘皿式
	7	陶文土器 深鉢	-(4.7) -	口縁部片。隆唇・沈縫による区画文。区画内は横位の單屈Bと陶文。	石英 白色粒	7,SYE2/2 四周縫/ 7,SYE2/4 にぶい横 縫	やや 良好	加曾利丘皿式
	8	陶文土器 深鉢	-(6.3) -	鉢脚部片。2本の沈縫を垂下させ、沈縫間に走り出す膨舌文。地文は屈位の單屈Bと陶文。	白色粒 微小繊	7,SYE4/4 にぶい横 縫/ 2,SYE6/6 明串縫	普通	加曾利丘皿式
	9	陶文土器 深鉢	(3.5) -	口縁部片。隆唇・沈縫による区画文。区画内は横位の單屈Bと陶文。	長石多 石英多 雲母少	7,SYE3/2 黒縫/ SYE6/6 横	普通	加曾利丘皿式
	10	陶文土器 深鉢	(2.8) -	口縁部片。口唇部外端に沈縫を合わせる。多筋沈縫で文様を抽出。	砂粒多	10H2/1 黒縫/ 10H2/2 黒縫	やや 良好	屈之内1式
	11	陶文土器 深鉢	(4.2) -	口縁部片。形状を見るロゼ底部。底面部直下に凹点文を施す。口唇部外端に沈縫を合わせせる。	石英 砂粒 小繊少	10H2/1 黑縫/ 7,SYE6/6 横	普通	屈之内1式
	12	陶文土器 深鉢	(4.0) -	口縁部片。無文。口縁部直下に隆唇を差しし、隆唇に沿って上部を浅く押凹する。	砂粒多 石英少	7,SYE6/4 にぶい横 縫/ 7,SYE6/6 横	普通	屈之内1式
	13	陶文土器 深鉢	(3.0) -	鉢脚部片。斜状に施したキザミ列を2例並走させる。	石英 白色粒	10H2/1 黑縫/ 10H2/4 反黄縫	良好	浮島II式
	14	陶文土器 深鉢	(5.6) -	口縁部片。口唇部外端に有筋沈縫を沿せし。ロゼ直下にキザミを加えた鉢脚部下垂。さらに隣に輪筋の帶状区画し。有筋沈縫を走らせる。内面口縁部直下にも有筋沈縫を走らせる。	砂粒多	SYE5/4 にぶい横 縫/ SYE5/4 にぶい黄 縫	やや 良好	阿玉台1b式
	15	陶文土器 深鉢	(7.6) -	口縁部片。緩く波状を呈する。微筋線による区画文で口縁部直下は無文。隣の片は継続する單屈Bと陶文。	長石 陶粒 石英少	10H2/1 黑縫/ 10H6/4 にぶい黄 縫	普通	加曾利丘IV式

第7表 出土遺物一覽表（石器類）

第8表 出土遺物一覽表（土器類）

### 【表凡例】

- (石器) 1. 出土地点中の○数字は層位を表す。 ①：1層 ②：2層 ③：3層

2. 石材の略は次の通りである。

安山：安山岩 石英：石英斑岩 ホルン：ホルンフェルス 黒曜：黑曜石

- (土器) 1. 出土地点中の○数字は層位を表す。 ①：1層 ②：2層 ③：3層

2. 「谷」は埋没谷のことを示し、埋没谷に記した出土地点はグリッドを表す。

3. WPは礎文時代堅穴住居跡の壁柱を表す。

4. 篤文中崩の懸垂文は、地文篤文に2本の沈線を重下させ、沈線間を削り消した文様を表す。

# 写 真 図 版

図版 5 出土遺物(1)～図版 12 出土遺物(8)

凡例

SI01～04・06・07 - ○：竪穴住居跡出土遺物（第 13～19・22～24・26・37 図）

土 - ○：土坑出土遺物（第 31・32 図）

地 - ○：地下式坑（SK20・30）出土遺物（第 39 図）

Pit - ○：ピット出土遺物（第 35 図）

谷 - ○：埋没谷出土遺物（第 42～46 図）

外 - ○：遺構外出土遺物（第 47 図）



調査区全景 北東から



調査区全景 南東から



調査区全景 東から



調査区全景 南西から



調査区北西側全景 南から



調査区北東側全景 南西から



調査区南東側全景 南から



調査区中央部全景 南から

図版 2



SIO1 全景 南から



SIO1 全景 南東から



SIO1 1層・遺物出土状況 南東から



SIO1 1層・遺物出土状況 北西から



SIO1 2層・遺物出土状況 南東から



SIO1 2層・遺物出土状況 北西から



SIO1 床直上遺物出土状況 南東から



SIO1 遺物出土近景 東から



SI02～04全景 南東から



SI02全景 西から



SI02炉全景 南から



SI02炉土層断面 東から



SI03全景 西から



SI04全景 西から

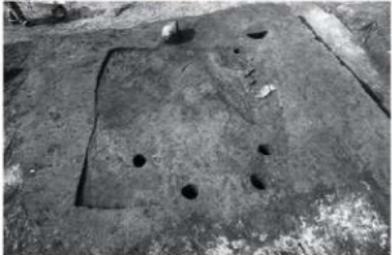


SI06全景 南から



SI06炉遺物出土状況 西から

図版 4



SK07 全景 南から



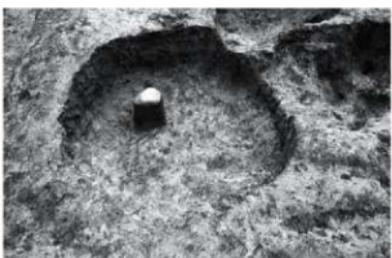
SK02～09・11・12 全景 東から



SK21 遺物出土状況 南から



SK22 全景 北から



SK23 遺物出土状況・全景 東から



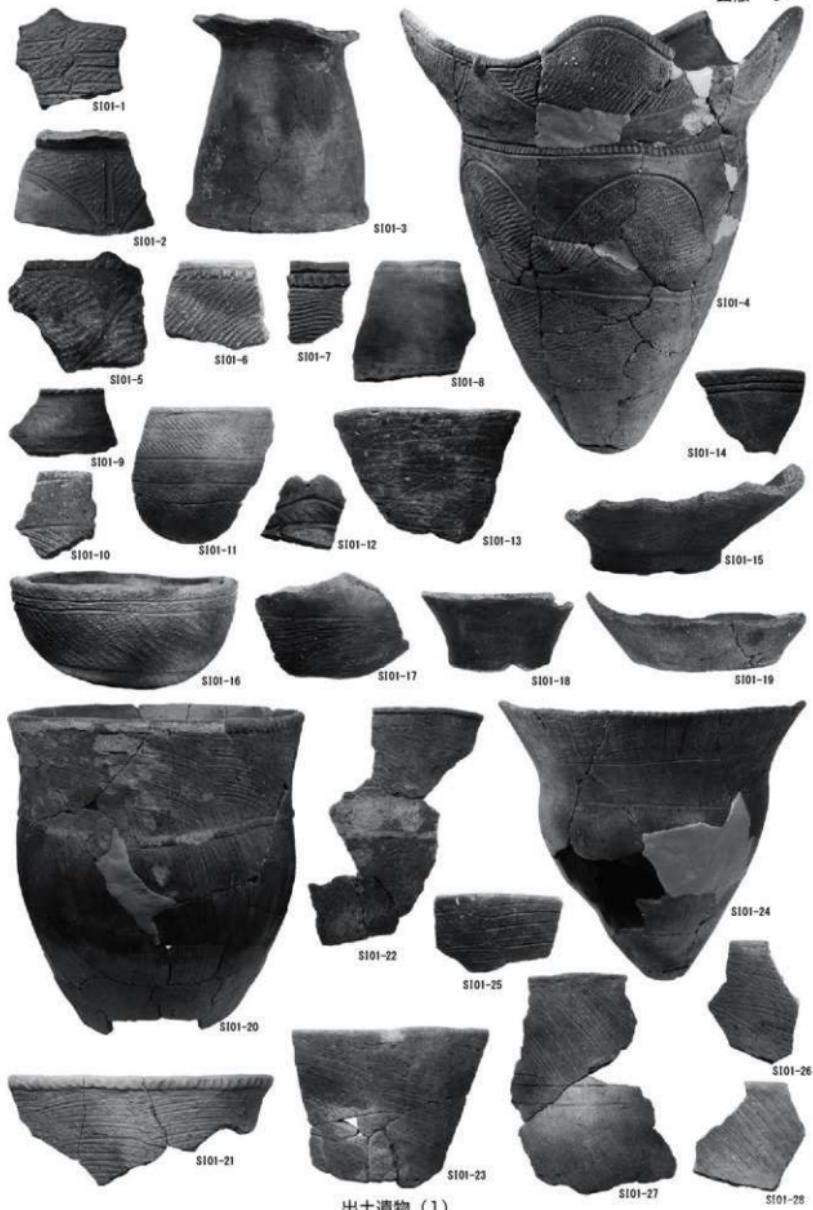
SK20 全景 南から



SK30 全景 南西から

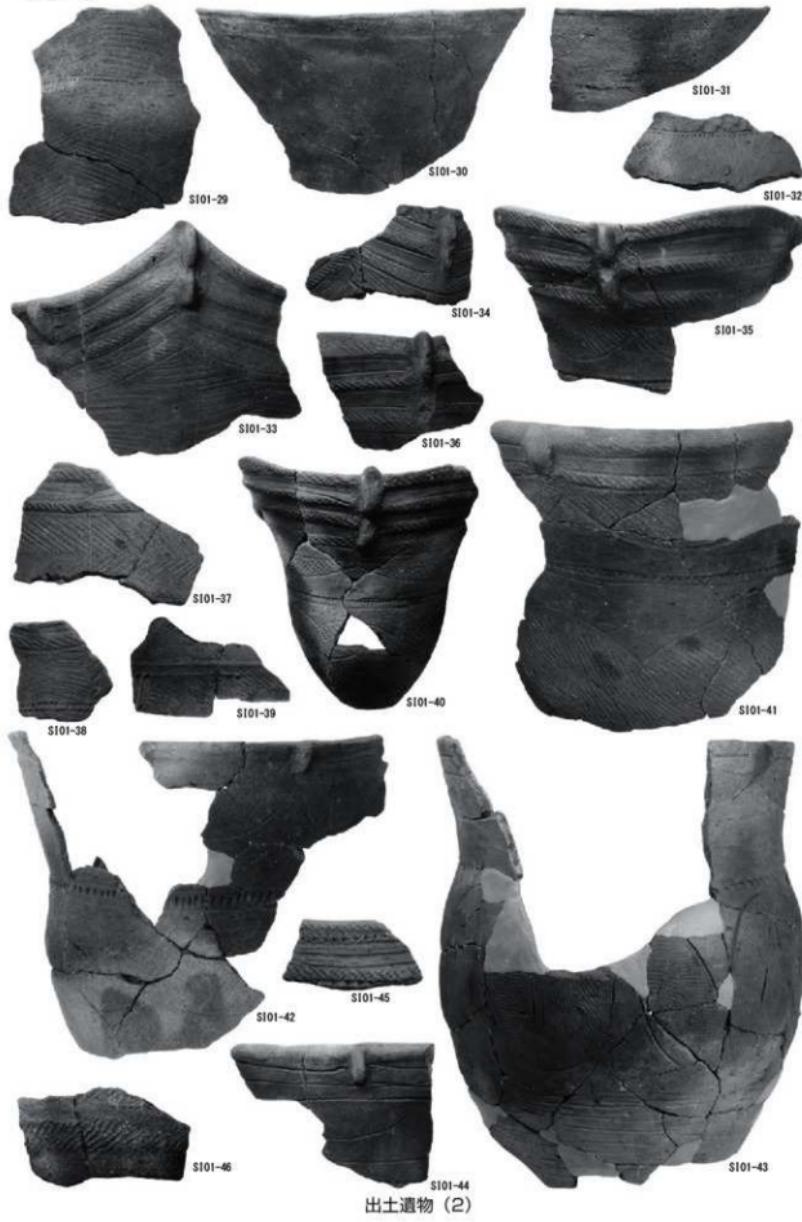


SK30 遺物出土状況 北東から

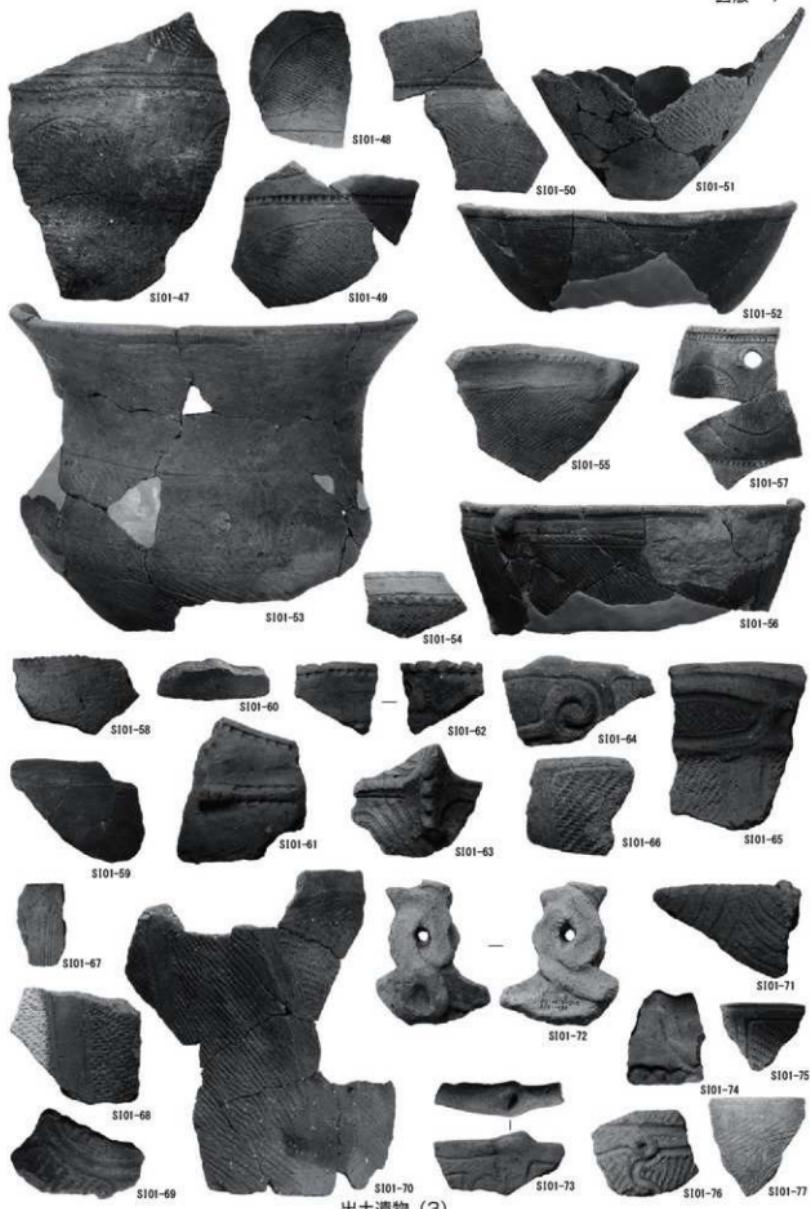


出土遺物 (1)

図版 6

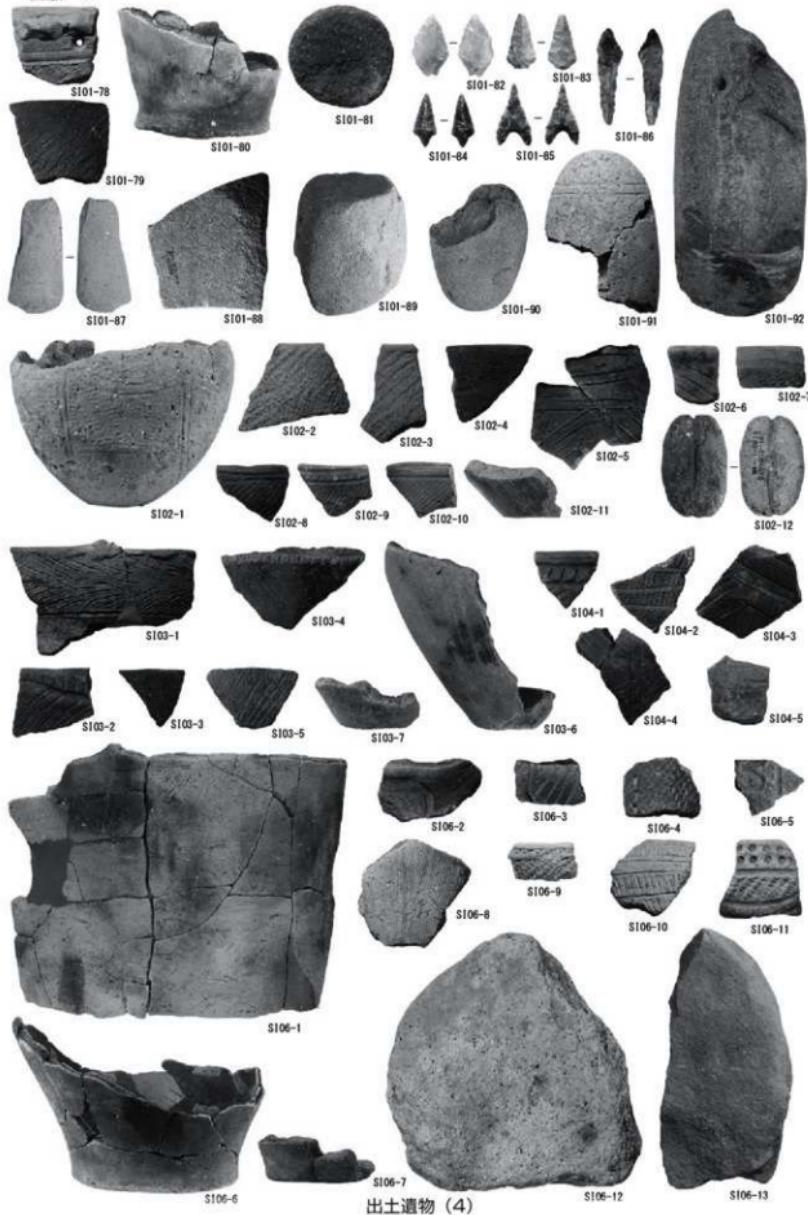


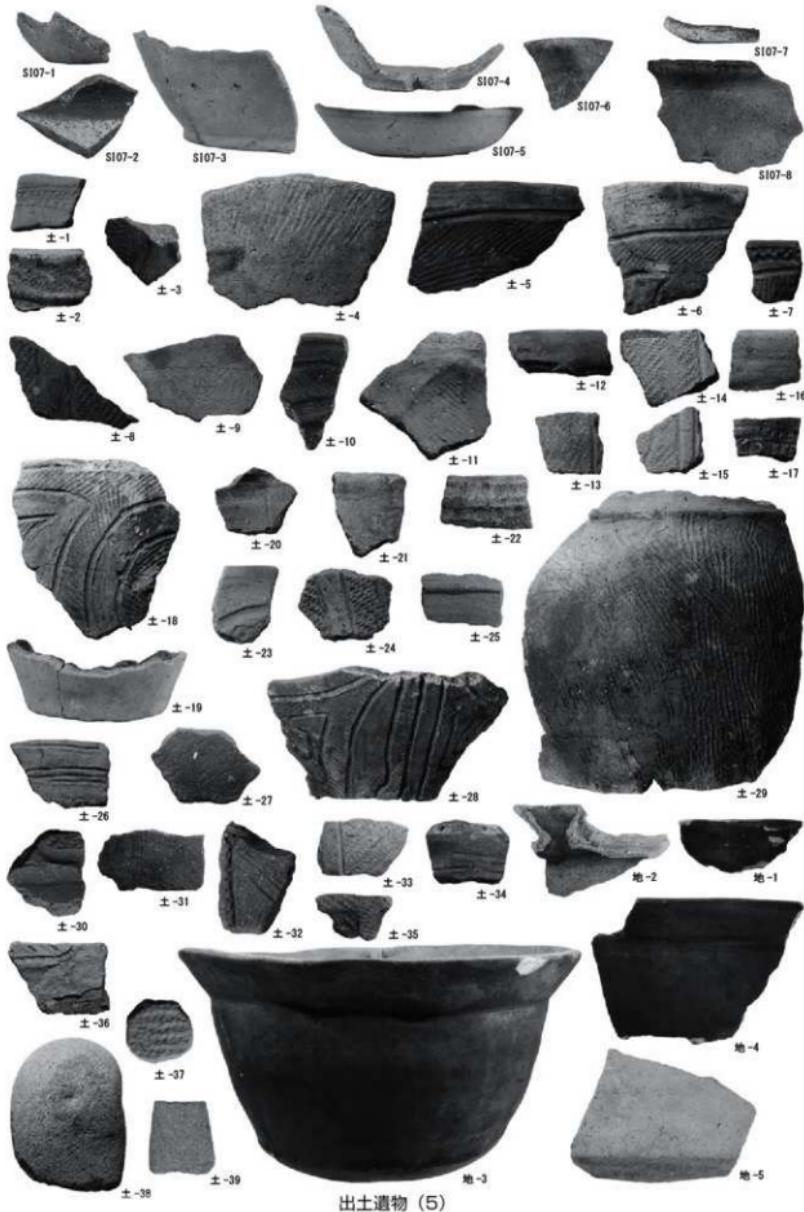
出土遺物 (2)



出土遗物 (3)

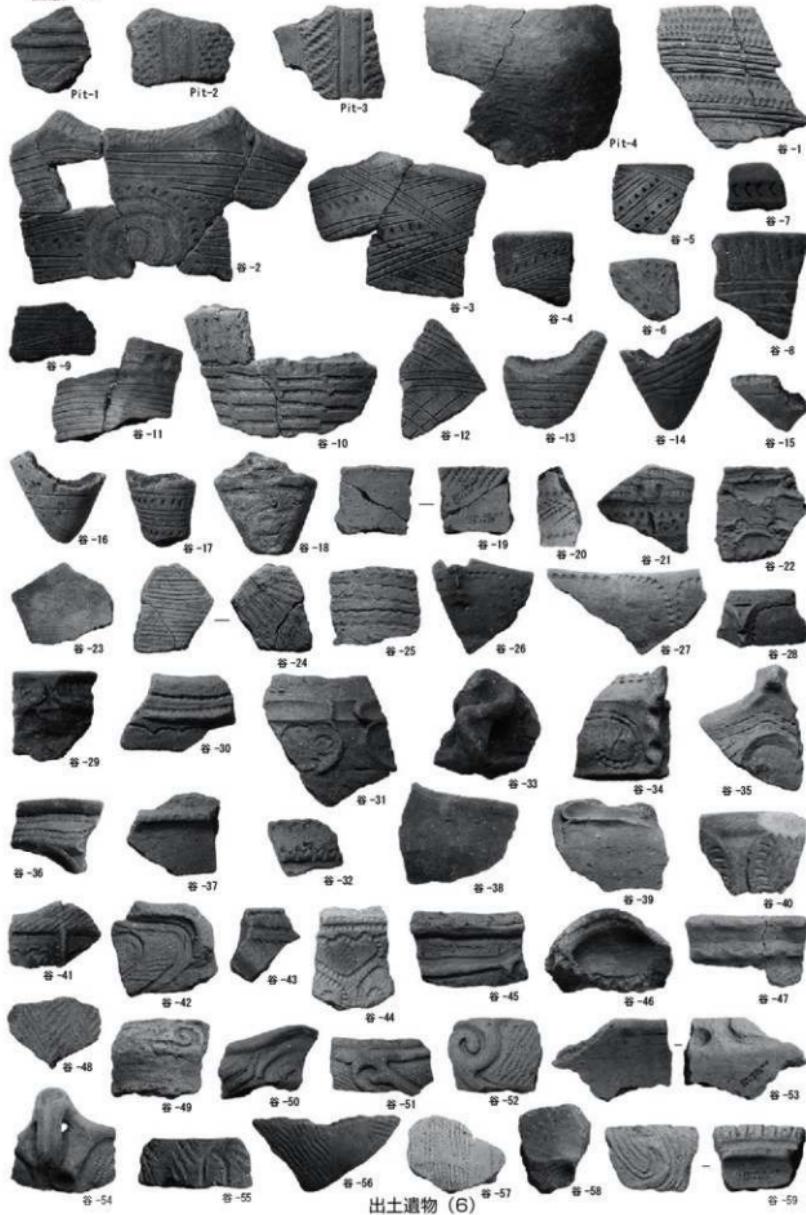
図版 8





出土遺物 (5)

图版 10

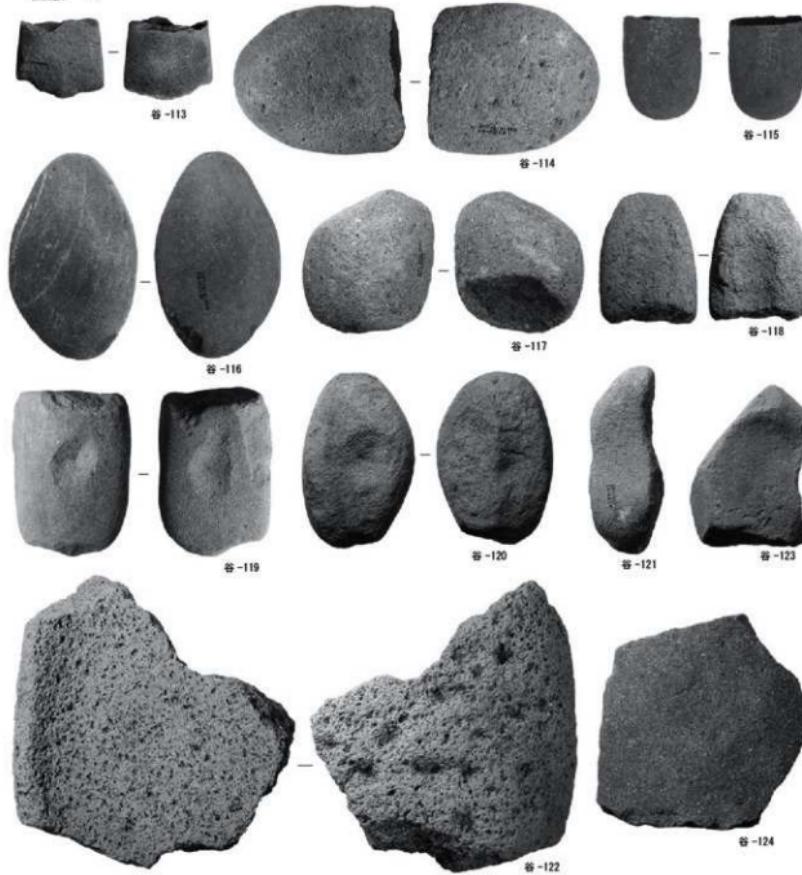


出土遗物 (6)



出土遺物 (7)

图版 12



出土遺物 (8)

## 報告書抄録

ふりがな	あくつ いせき だいじゅうはちぢてん						
書名	坪遺跡(第18地点)						
副書名	コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第62集						
編著者名	高野浩之・米川暢敬						
編集機関	株式会社地域文化財研究所/〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 電話:0476-42-7820						
発行機関	水戸市教育委員会/〒310-0852 茨城県水戸市笠原町978-5 電話:029-306-8132						
発行年月日	株式会社セブン-イレブン・ジャパン 株式会社地域文化財研究所/〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 2014(平成26)年3月25日						

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
坪遺跡 (第18地点)	茨城県水戸市河和 田3丁目2390-1外	201	015	36° 22' 19"	140° 24' 37"	2013.07.29 ~ 2013.09.13	1,860m <sup>2</sup>	コンビニ エンスストア建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
坪遺跡 (第18地点)	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡 土坑 ピット	5軒 26基 9基	縄文土器(深鉢・浅鉢・台付鉢・鉢), 土製品(有溝土錐・土製円盤), 土偶, 石器(石鏃, 石錐, 磨製石斧, 磨石, 回石, 多孔石, 石棒)	坪遺跡のこれまでの調査では、縄文時代中期の遺構を多数検出してきたが、本地点で初めて縄文時代後期称名寺~安行1式期の集落を確認した。		
	集落跡	奈良・平安時代	堅穴建物跡 土坑	1棟 1基	須恵器(坪・甕), 土師器(坪・甕)	また調査区を分断して埋没谷が確認され、縄文時代早期三戸式を最古として田戸下崩式、田戸上崩式期の沈線文系土器が出土した。前期の土器は極少量であつたが、中期以降は阿玉台1b式~後期安行1式期までの遺物が含まれていた。		
	—	中・近世	地下式坑 土坑 ピット	2基 3基 3基	土器(内耳土鍋) かわらけ			

水戸市埋蔵文化財調査報告 第62集

坏 遺 跡 (第18地点)

—コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発 行 日 平成26年3月25日

編 集 株式会社 地域文化財研究所  
〒270-1327 千葉県印西市大森 2596-9  
TEL 0476-42-7820 FAX 0476-42-3804

発 行 水戸市教育委員会  
〒310-0852 茨城県水戸市笠原町978-5  
TEL 029-306-8132  
(担当) 教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター  
〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064-1 大串貝塚ふれあい公園内  
TEL, FAX 029-269-5090

印 刷 株式会社 ライフ  
〒286-0134 千葉県成田市東和田595  
TEL 0476-24-1564